
プリキュアオールスターズ 出現！最強のプリキュア

ALST G

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プリキュアオールスターズ 出現！最強のプリキュア

【Nコード】

N6079X

【作者名】

ALSTG

【あらすじ】

400年前、地球には数多のプリキュアがいた。しかし、あるプリキュアの出現によりほとんどのプリキュアが消えてしまった。そう、最強のプリキュアが倒されてしまったからだ。しかし、そのプリキュア達の活躍により最強のプリキュアは消えたかに見えていた。しかし、400年後、そのプリキュアは何者かに甦ろうとしていた。この物語はこの世界に生きるプリキュア達が400年前に消滅されたはずの最強のプリキュアに立ち向かう戦いの物語である。

プロローグ（前書き）

最初のモチーフはあの大戦です

プロローグ

今より400年前、初代砂漠の使徒の幹部、サラマンダー男爵がデューンの怒りを買って、追放された後、キュアアンジェによってモン・サン＝ミシエルの礼拝堂に封印されてから、数カ月後、知られていない戦いが起きていた。

舞台はフランス

この時代のプリキュア達とはある敵と戦おうとしていた。それは・

「はあああ！！！」

『バキィ！』

「ザケンナアアアア！」

黒い衣装を纏った茶髪のプリキュアは、後の時代に現れるザケンナーと戦っていた。そのザケンナーを黒い光の拳で吹き飛ばした。それをフォローするのは白い衣装を纏いし黒髪の少女とピンクの衣装の金色の少女。白い衣装の少女は自身より大きい相手の拳をいなし、それを柔軟な体を使って脳天に叩きつけられた。ピンクの衣装の少女は怪物たちの攻撃を光のバリアで遮断し、今度はその光で怪物の動きを封じた。

「てりやあああああ！」

別の場所では赤紫の衣装を纏った茶髪のプリキュアは後の時代に現れるウザイナーと戦っていた。そのウザイナーを精霊の力を込めた拳で吹き飛ばし、さらに

「逃がさないよ」

茶髪のプリキュアが高く飛びたつと同時に光を纏い、瞬時に黄緑の衣装へ姿を変えた。そして上空に待機している水色の羽衣を纏ったポニーテールのプリキュアに合流し、ウザイナーに月の光とカマイタチを放ち、ウザイナーを消滅した。

「はあああああ！！！」

違う場所では、蝶と薔薇の意匠を取り入れたピンクの衣装のプリキュアがコワイナーと戦っていた。その周りには赤い衣装を纏ったシヨートヘアのプリキュア、黄色の衣装を纏った髪をシニヨン風にしたプリキュア、緑の衣装を纏ったボブカットのプリキュア、青い衣装を纏ったポニーテールのプリキュアが戦っていた。

「まったく、これだけの敵を用意するなんて、相手は相当の自信があるみたいですね」

「そうね、全く何を考えているのかしら」

赤と青のプリキュアは大量の敵を見てぼやいていた。一方の黄色と緑のプリキュアは

「敵が多すぎて抑え切れません」

「でも、私達が何とかしないと」

しかし、それも大量の物量には抑えきれず、一気になだれ込もうと
していたその時

「はあ！」

突如、地面が揺れ、周りにクレーターを造られ、コワイナーとホシイナーは転倒した。

「全く、油断しすぎよ」

「ごめん」

ピンクのプリキュアに説教を言っているのは胸に青い薔薇の飾りをつけた紫のプリキュアだった。

「けど、これだけの敵がいるなんて驚いたわ」

「でも大丈夫。みんながいるから」

「そうね、けどあんたらしいわ」

会話が終わると四人のプリキュアと共にコワイナーとホシイナーの大軍の所へ向かった。その一方では

「……トリプルプリキュアキイイイク……」

ピンクの衣装を纏うツインテールのプリキュアと青い衣装のサイドポニーのプリキュアと黄色の衣装のショートのプリキュアがナケサケーベと言う怪物を三人がかりの飛び蹴りで吹き飛ばした。しかし、大量の怪物の前に苦戦を強いらせていた。

「周りは敵だらけ。何とかならないの」

弱気になる黄色のプリキュアに青いプリキュアの叱咤がはいる。

「諦めないで！何とかなるから」

「そうだよ。私達は負けないから」

ピンクのプリキュアが青いプリキュアの言葉に続いて言葉を言った
その時、いないところから人の声がした。

「その通りよ。まだ私達は負けていない」

いったのは赤い衣装を纏ったピンクの長髪のプリキュアだった。

「アカルンの力を使えば、先行しているプリキュアの所へいけるわ」

「じゃあ、それを使って早く、あそこへ行こうよ」

「そうね、けど、これだけの敵を何とかしないと」

「そうだね。でも、この状況きつと切り抜けるって私信じるから」

四人のプリキュアはナキサケーベ、ソレワターセの大軍に戦いを挑むのだった。そして、最前線では

「てええええりや！！！」

マゼンタのツインテールのプリキュアがネガトーンを相手に奮闘をしていた。

「もう、突っ込みすぎよ」

「けど、何とかしないとこの辺は滅茶苦茶になるわ」

マゼンタのプリキュアに呆れる白のプリキュアを尻目に青いプリキュアはこの状況を冷静に見ていた。

「けど、ゆだんはダメよ」

「もうすぐ、他の皆もここへ来ますから無理をしないでください」

そこに藤色の花のプリキュアと金色の花のプリキュアがマゼンタのプリキュアの所へたどり着き、白と青のプリキュアに話しかけた。そして遅れて水色の花のプリキュアとピンクの花のプリキュアが到着した。

「もう、強すぎよ。デザトリアンをたった一人で片付けるなんて」「けど、それだけ頼りになるんです。ですが少し無理をしています」

水色の花のプリキュアとピンクの花のプリキュアが心配している中、背後からデザトリアンが大量に現れた。

「やばっ！こんなに出てくるなんて」「油断しすぎです！ですが周りには仲間がいます。何とか切り抜きましょう」

動揺する水色のプリキュアだが、ピンクのプリキュアの言葉で冷静さを取り戻した。

「なんとかやるっしゅ！懸って来なさいデザトリアン」

水色のプリキュアの号令にデザトリアンに挑むプリキュア達

「全く、何で冷静にならないかしら」「無理ありません。ですが、彼女はこれで良いんですから」「そうね」

呆れる藤色のプリキュアを金色のプリキュアがフォローをし、そして・・・

プリキュア達の奮戦により怪物たちは倒された。しかし、消耗は大

きかった

「きつつ〜い」

「もう、疲れた〜」

「もう、動けないよ〜」

疲れているプリキュアを知り目に突如なぞの声がした。

???「やれやれ、へたれすぎだよ君達」

疲労状態のプリキュアの前に謎の小動物が現れた

「ヌール、貴方の仕業だったの」

ヌール「その通り、この時代のプリキュアの力、見せてもらったよ。けど、もう充分だよ。ここで消えてもらうよ。もう出てきてもいいよ」

小動物の声に現れたのは一人の少女だった

「どうして、彼女が」

ヌール「さあ、君の力でプリキュアを倒して最強になるんだ。そうすれば、この世界は守られる、さあ、やるんだ」

???2「そうはさせない」

謎の声に驚くヌール

ヌール「うわっ!？びっくりしないでよ。君が現れるかと思ったよ
キュアミネルバ」

ミネルバ「ヌール、貴方達の好きにはさせないわ」

そう言うと、周りにはたくさんのプリキュアがいた。そこには黒い花のプリキュア、緑の衣装を纏った緑の長髪のプリキュア。手にメダルを持つ紅いプリキュア、緑と黄色の衣装を纏ったオッドアイのプリキュア、赤と青の衣装を纏ったオッドアイのプリキュア、橙と紫の衣装を纏ったオッドアイのプリキュア、藍色の衣装に星を模った髪飾りを持つプリキュア、青と紫の軍服風の衣装を纏い、二丁拳銃を持つプリキュア。マントを纏う天使と騎士を模した衣装のプリキュア、結晶の小手を持つ、橙色のワイルドな雰囲気のプリキュア、マゼンタの衣装を纏い、カードを手にしたプリキュア。宇宙の力を宿し、黒を基調とし、銀色の髪のプリキュア。銀色の鎧をまとい、ヘルメットを装着したプリキュア、真紅のドレスを纏い、炎の扇を手にしたプリキュア。乳白色の衣装に鏡を持ったプリキュア。銀色の鎧を装備し、小手をもった金髪のプリキュア。さらに純白のドレスを纏い、シンバルを手にしたプリキュア。青い衣装に右手に長剣をもったプリキュアなどといったプリキュアたちだった。

ヌール「ほう、こんなに仲間がいるなんて驚いたよ。けど、彼女の敵ではないよ」

ミネルバ「彼女？」

ヌール「そう、僕が契約したプリキュアなんだ。僕についてくれば世界は思うがままだよ」

ヌールの言葉に怒りを覚えるミネルバ

ミネルバ「ふざけるな！プリキュアは私利私欲で使うべき物ではない！止めるんだ、お前はそんな奴の好きにしてもいいのか」

ミネルバの言葉を知り目に謎の少女は感情なく言った

???「何でそんな事を言うの？ヌールは私を信じてくれたのよ。邪魔しないでよ」

ミネルバ「くっ、もうあいつの操り人形になってしまったか。仕方ない、攻撃を仕掛けるぞ！全員突撃せよ！」

ミネルバの号令に掛け、攻撃を開始するプリキュア達。それを疲労状態のプリキュアは歯がゆく見ていた。

「私達、何も出来ないの？」

「彼女が私達の敵になるなんて・・・」

「悔しい、何とかならないの・・・」

無力感にひしがれるプリキュア達、そんな状況を戦っているミネルバはある事を言った。

ミネルバ「貴方達、撤退して。ここは私達が何とかするわ」

ミネルバの言葉に反論する黒い衣装のプリキュア

「どうしてなの！なんで私達が撤退しなければならないの！？私達は戦えるよ！」

ミネルバ「ダメなんだよ！」

「・・・」

ミネルバ「今の貴方ではヌールはおるか、彼女には勝てないんだ。だから、撤退して」

「でも・・・」

ミネルバ「大丈夫、私にはあれがある。そして、近い未来、貴方達の力を受け継いだプリキュアがきつとあいつを倒してくれるはずだ。だから、今は逃げて。そして貴方達はこれからの時代に必要なんだから」

ミネルバの言葉を聞き、黒い衣装のプリキュアは決意する。

「今は撤退しよう。いつか、ヌールを倒すために」

「わかったわ」

「ここは撤退しよう」

撤退を決意するプリキュア達、その一方で、

ヌール「仲間を撤退するなんて余裕だね。けど、持つのかい」

ミネルバ「いいえ、充分よ。みんな！」

一同「うん」

ミネルバ「私たちの力で世界を守るのよ」

そういつとミネルバ達は光に包まれ、そして

ミネルバ「奇跡の光よ。悪しき者を消し去れ！」

ヌール「こんなのって認めないよー！ー！」

ミネルバ達の光によって、ヌールと謎の少女は消滅した。かくしてプリキュアたちによって世界は平和になった。ミネルバを初めとする数多のプリキュアの犠牲によって

しかし、それは戦いの序章に過ぎなかった。

プロローグ（後書き）

そして、舞台は400年後へ

始まりは星海市より（前書き）

物語は現在へ

始まりは星海市より

400年後、舞台は日本のとある都市、星海市より始まる。

きれいな海が臨む、煌びやかな街、星海市。ここは、400年前、ある伝説の戦士たちがここへ暮らし、その後、あらゆる世界へ渡ったといわれている。曰くつきの街である。
そんな街のストリートにある三人はここへ来ていた。

???1「ここが星海市か、大都市なのにきれいな街だね」

茶髪のロングヘアの少女の名は北条響。メイジャーランドに伝えられた伝説の戦士、スイートプリキュアの一人、キュアメロディである

???2「珍しいわね。響が食べ物以外に興味が湧くなんて、明日は雨でも降るのかしら？」

響「奏、それどういう意味？まあ、この街のお菓子の気になるけどね・・・」

響をからかったのはオリブグリーンの髪の少女、南野奏。彼女もまた伝説の戦士、スイートプリキュアの一人、キュアリズムである。そして、

???3「まったく、二人共はしゃぎすぎよ」

猫?「そういうセイレーンだって、この街へ来てから嬉しく笑っているんじゃないか」

エレン「まあ、否定しないわハミィ。だってこの街の雰囲気、マイナーランドにはないから」

ハミィ「確かにそうニャ。ここは何となくメイジャーランドを思い

出しそうな雰囲気ニヤんだし」

響と奏の掛け合いに呆れていた少女は黒川エレン。本来の姿はセイレーン。かつては響や奏達の敵、マイナーランドの幹部であり、マイナーランドの歌姫であった。しかし、大事な友達であるハミイを救いたいと言う思いが、彼女を三人目のプリキュア、キュアビートとして覚醒したのだ。

そして、そのエレンに話していた猫みたいな生物が、エレンの友達であるハミイ。彼女はメイジャーランドの妖精であり、歌姫である。そんな彼女達が、何故この街へやって来たのかと言うと・・・

????4「響、奏、エレン。こっちだよ」

響「あっ！ラブじゃない」

響達を呼んだのは桃園ラブ。そう彼女もまたプリキュアである。最も彼女はメイジャーランドではなくスウィーツ王国に伝わる伝説の戦士、キュアピーチである。

ラブ「待ってたよみんな。さっ、今から星海市の街へ観光へ行くよ」
響「ちよつとラブ、引つ張らないで」

ラブに無理やり連れてかれる響。そんな状況を三人の少女が見ていた。

????「もう、ラブったら。響達に出会えたからってこんなにはしやいじゃって・・・」

????「仕方ないよ美希ちゃん。だって、私達もエレンと初めて会ったから」

????「そうね。私も前からメイジャーランドやマイナーランドの人、一度でも会って見たかったの」

美希「そうなのせつな？」

せつな「そうよ。ラビリンスが總統メビウスに支配されていた頃は、他の世界の交流がなかったの。それに」

美希「それに？」

せつな「エレンと言う子がどうも気になるの」

美希「そっか。エレンって子。昔のせつなを思い出すからなの」

せつな「そうよ」

「???」「そうなんだ。それだと、何かほっとけないよ。じゃあ、これを機にエレンちゃんと仲良しにしましょ」

美希「仲良くか、それもそうねブッキー。今日は響達に観光を付き合いましょ」

ブッキー「そうだよ。今日は思いっきり楽しもうよ」

この三人の少女、蒼乃美希、山吹祈里、東せつな。彼女達はラブをリーダーとするダンスユニット、クローバーのメンバーであるが、彼女達にはもう一つの姿があるのだ。それはスウィート王国に伝わる伝説の戦士、キュアベリー、キュアパイン、キュアパッションである。ただし、東せつなだけはラブ達の世界の人間ではないのだ。彼女は先に出たラビリンス出身の少女であり、彼女もまたかつてはラビリンスの幹部、イスとしてラブ達と敵対していたのだ。しかし、總統メビウスによって規定された寿命が縮められ、ラブとの最後の戦いで寿命がなくなり、それをアカルンによって生き返り、キュアパッションとして転生した過去があった。そのため、せつながエレンの事を気にするのも無理はないのだ

さて、ラブがはしゃいでいる間である動物はラブのバッグの中であちこち動かされていた。そんな事態にその動物はラブに文句を言ううとしていた。

「???」「ちよっ、ピーチはん。はしゃぐのもええけど、すこしはわ

いの事、大切に扱わんかい！」

その動物の声を聞き、我に返るラブ

ラブ「あつ、ごつめ〜ん。タルトの事忘れてた」

タルト「忘れてたつて、幾らなんでもあかんやろピーチはん。少しは人のこん考えんかい」

ラブ「本当にごめん。後で星海市にあるドーナツショップにも寄るから」

タルト「まあ、ええけど。もう乱暴に扱わんよう気をつけてくれへんか」

タルトの存在に気づいたエレンはラブの方に近づいた。

エレン「ねえラブ？なにこのイタチは？」

タルト「イタチとは失礼や！わいはなスウィーツ王国の105番目の王子、タルトや！」

エレン「王族？」

タルト「そや！ちなみにわいはパルミエ王国のココはんやナッツはんとは知り合いやで。あとカオルちゃんという兄弟分もおるで」

ラブ「そうなのよ。王族の関係者は多いのよ。あと、メップルとミップルも王族に入るから」

エレン「あのイタチ、知り合いが多いんだ」

タルト「だから、イタチちゃうわ」

響「もうエレン。からかうのはそれくらいにしてよ。ラブが困っているじゃない」

ラブ「いいよ、気にしてないから」

響達の会話を見ていた奏はすこし寂しさを感じていた。

奏「もう、二人共。何をしているのよ。私達も早く行動しないと、
って何あの動物」

奏の前に現れた謎の生物。それはまるでぬいぐるみみたいな物が浮遊していたのだ。そして奏での前で可愛らしい声を発するのであった。

????「プリッブー」

その声を聞いていた奏はとんでもない行動を起こしてしまう。

奏「かつ」

????「キュア？」

奏「かわいい〜」

????「キュアー！」

奏の意外な行動に驚くハミィ

ハミィ「奏、おちつくニヤ」

奏のとんでもない行動で悲鳴をあげるぬいぐるみらしき生物。その事態に気づいたブッキーはシフォンの所へ向かった。

ブッキー「ちょっと奏ちゃん、ダメだよシフォンちゃんを泣かしちゃ」

奏「えっ、この動物、シフォンって名前なの？」

ブッキー「そうなの。シフォンちゃんは今幼児くらいなの。けど泣かすのは良くないよ」

ブッキーの説教を聴いて我に返る奏

奏「御免なさい。我を忘れてこんな事をしてしまつて」
ブッキー「いいのよ。何かシフォンちゃんも奏の事、気に入っているみたいだし」
奏「そうなの？」

そんな騒ぎの中で美希は響達にある事を知らせた

美希「みんな、もう騒ぎはそこまでにしないで。今日は観光をしながら、他の仲間に会わなきゃならないのよ」

エレン「えっ、他にもいるの？」

美希「そうよ、どんな人かは後のお楽しみよ。行きましょ」

この騒ぎの中でも響達は上手く行っていたかのように見えていた。しかし、そんな騒ぎの裏で、あるおもちゃ店では、謎の動物がとある白いライダーの玩具の前でつぶやいていた。

「???」星海市、どうやら僕が求めていたはずの人間がここにいる街。さて、彼女を呼ぶため、少し遊んで見ようか」

そう言う謎の動物から黒い光が放ち、白いライダーの玩具に入っていた。

既に悪意は動き始めようとしていた。

始まりは星海市より（後書き）

次はエレンと同じといわれるあのメンバーパートです。

白いライダーは言うまでも無く現在放送中のあの作品です。
その白いのがスイート組とフレッシュ組の最初の相手です。

博物館の出会い（前書き）

エレンと同じと言えるキャラ。それは美々野くるみの事
そう、G o G o組とS Sの話である

博物館の出会い

響達がラブと一緒に行動を始めようとしていた頃、星海市の中心部にある博物館。通称スターオーシャンミュージアム。

その中では、六人の少女と二人の青年と一人の少年が博物館の中を見学していた。

そして、広間の一角ではしゃぐピンクの髪の少女の行動を茶髪のシヨートの少女が抑えようとしていた。

???「こら、のぞみ！はしゃぎすぎないで！」

のぞみ「だって、りんちゃん。この博物館、色々ありすぎてどれを見るべきか迷っちゃうもん」

りん「そりやそうだけとね。でもね、のぞみ。はしゃぎすぎて他の人に迷惑をかけるのはよくないんじゃないの」

のぞみ「そうだけと」

今のピンクの少女は夢原のぞみ。彼女はパルミエ王国に伝わる伝説の戦士、プリキュア5のリーダーであるキュアドリームである。

そののぞみの行動をいさめようとした茶髪のシヨートの少女は夏木りん、のぞみの幼馴染であり、プリキュア5の一員、キュアルージュである。

そんな二人の行動を紫の少女と茶髪の少年は呆れて見ていた。

???「まったく、のぞみったら。相変わらずはしゃいじゃて」

???「そういうのもむりないだろくるみ。この博物館はこれだけいい物が揃っているからな」

くるみ「シロップ、確かにそうだけと」

シロー「それに今日は休日だから人が集まるんだ。にぎわっているのも仕方ないだろ」

シローとなのる少年。本来の名はシロップで人間時の姿は甘井シローと名乗っている。彼は運び屋の仕事をやっている少年である。普段は後で触れるナッツハウスで同居しており、学園が開いている間は、サン・クルミエール学園の食堂で働いている。彼はキュアローズガーデン出身だったが、エターナルの上層部、アナコンデイのいざこざに巻き込まれ、一時はキュアローズガーデンに関する記憶を失っていた過去がある少年である。

ちなみに彼は人ではない。本来の姿はオレンジのペンギンに似た姿であり、さらに大きいツバメに似た姿になれるのだ。ちなみに彼はうらの事を気にしている。

そして、そのシローに話しかけた紫の少女は美々野くるみ、彼女はのぞみ達の学校、サン・クルミエール学園に通う生徒である。普段は後で触れるナッツハウスに暮らしている。しかし、彼女はのぞみ達の世界の人間ではない。彼女はパルミエ王国の準お世話役、ミルクであり、本来の姿は白いロッピーの兎のような姿である。彼女は本来は後で紹介するココやナッツの様に人間になれるのは出来ないが、のぞみ達がパルミエ王国へ来訪している時にエターナル幹部の一人、ネバタコスの襲撃が起こってしまうが、その騒ぎの際に青い薔薇の種を拾い、その薔薇の種を育てていた。その時にミルクは青い薔薇の光を浴び、人間になれる能力を得るようになった。だがそれだけではない。その青い薔薇の光の力により、彼女はプリキユアと同じ力を持つ戦士、ミルキローズへ変身するようになった。彼女もまた、プリキユアの一員でもあるのだ。

くるみ「それもそうね。この博物館は前からナッツ様が行きたかった場所だから仕方ないかも」

???「のぞみがはしゃいでいたり、ナッツがココへ行きたかったのも無理ないだろくるみ。ここは色々な物が集まっているからな」くるみ「ココ様。確かにこの博物館はいろんな物が集まっているみ

たいね。けど、シロップにはちょっと複雑かな」

ナッツ「確かにそうかもしれないな。確かシロップは一時はエターナルの所で働いていたからな。だが、エターナルも今は完全に崩壊したから今は気にしていないみたいだぜ」

ココ「エターナルがいない今はシロップもつらい思いはせずに済んだんからな。もう、過去は振り切ったんだ」

くるみ「そうね」

（でも、私は最初の頃は色々迷惑をかけていたわ。私のトラブルのせいでかれん達がバラバラになってしまったり、カワリーノの策略でドリームコレットが奪われてしまったり、初めの頃はのぞみとは争いが遭ったわ）

心の中では憂鬱になるくるみだったが、そんな彼女に青い髪の少女が声をかける

???「気にしすぎよくるみ。私だつてのぞみに会えなかったら、私はずっと一人だったかもしれないわ。それにかつての私にも会った事があるから」

くるみ「かれん」

かれん「くるみ、誰だつて人は嫌な過去があるの。私だつて嫌な過去に押し潰されてしまった事があるの。でも、のぞみやこまち、うらやりんのおかげで助けられた事があるの。勿論くるみ、貴方もよ」

くるみ「そうなの、かれん？」

こまち「そうよくるみさん。かれんには、くるみさんに救われたところがありますから」

くるみに話をかけていたナッツと言う青年はのぞみの世界とは別の次元にある世界の一つ、パルミエ王国の国王の一人である。人間の時の名は夏。普段はサン・クルミエール学園の近くの池の畔にある

アクセサリーショップ、ナッツハウスの店長をしている。出会った当初は、のぞみ達に不信を抱いていたが、当時、パルミエ王国を滅ぼした悪の組織ナイトメアに立ち向かうのぞみ達の行動を見て考えを改めた。王国一の読み手であり、多くの書物に精通している人物である。後で紹介する秋元こまちはナッツに恋心を抱いているのだ。ちなみに本来の姿はりすに似た生物である。

そして、ココと名乗る青年もまた、のぞみの世界とは別の次元にある世界の一つパルミエ王国の国王の一人である。人間の時の名は小々田コージ。彼は普段はサン・クルミエール学園の教師をしている。彼もまた、ナッツハウスで暮らしている。のぞみが恋心を抱いている相手であり、くるみにとってはナッツと並ぶ尊敬する人物である。その為、くるみはのぞみに対していがみ合ってしまう原因は彼の存在があるが、実際は仲が悪くない。どちらかと言うとけんか友達みたいな関係である。ちなみにココの本来の姿はスピッツ犬に似た生き物である。

くるみに声をかけた青い少女は水無月かれん、彼女はサン・クルミエール学園の生徒会長であり、山や島に別荘を持つ大富豪の令嬢である。くるみにとっては姉のような存在ともいわれている。そして、彼女もまた、プリキュア5の一人、キュアアクアである。

そして、水無月かれんの親友である秋元こまちはプリキュア5の一人、キュアミント。小説家になる事を目標としているおっとりとした性格の少女である。ただし、人には理解できない行動に走ったり、料理に隙あらば羊羹を入れようと企む困った性格の持ち主である。そしてこまちはナッツに心を惹かれているのだ。

こまちがくるみに話をかけようとしている所を黄色のツインテールの少女がくるみ達の所へ近づいてきた。

???「すいません、来るのが遅くなってしまって」
くるみ「遅いじゃない、うーらら」

黄色のツインテールの少女の名は春日野うらら。六人の少女の中で一番年下であり、女優になる事を夢見るアイドルである。そして、彼女は、プリキュア5の一員、キュアレモネードである。

うらら「ちよっと、来る途中であの二人に出会いましたから」

そこへのぞみとりんもうららの所へ近づいて来た。

りん「うらら、遅いじゃない。どうしたの？」

のぞみ「うららも今来たの？」

うらら「ちよっと別行動をしていたんです。のぞみさん達の所へ戻ろうとしている時に二人に会いました」

のぞみ「あの二人？」

うらら「はい、この人です」

うららが連れてきたのは茶髪の元気そうな少女と紫の大人しそうな雰囲気少女だった。しかし、のぞみはその二人の事をすぐに気づいた。

のぞみ「うわっ！咲ちゃんに舞ちゃん。あなた達もここへ来たの？」

そう、のぞみに声をかけた二人の少女。茶髪の少女は日向咲、泉の郷に選ばれた伝説の戦士、花の戦士キュアブルームと月の戦士キュアブライトである。彼女は夕凧中学校のソフトボール部のエースである。

紫の大人しそうな少女は美翔舞、彼女は日向咲と同じ泉の郷に選ばれた戦士、鳥の戦士キュアイーグレットと風の戦士キュアウインディである。

彼女達はプリキュアにしては珍しい二つの形態を持つプリキュアで

ある。そう、彼女達もまた、のぞみ達に面識があり、現在ここへ向かっているラブ達や響達にも面識があるのだ。

咲「あつ、のぞみ達もここに来てたんだ。こんな所に出会うなんてうれしいナリー」

りん「まったく、咲も相変わらずね。まつ、元気なのが咲のいい所なんだから」

舞「もう、咲ったら。それにしても偶然ね。こんな所でみんなに会えるなんて」

こまち「あいかわらずね舞さん。でも、他のみんなももうすぐここへ来るから」

舞「どういう意味ですか？」

かれん「今、ラブ達と響達がこちらへ向かっているの」

くるみ「それだけじゃないの。今、なぎさ達やつばみ達もここへ向かう予定なの」

咲「ひよつとして、ここで待ち合わせの予定があるの？」

のぞみ「そうだよ。博物館の前の広場で集合するの。来たらきつと驚くよ」

りん「そりゃ、そうでしょ。もしかしたら、ちゃっかりあの小学生も来てたりして」

咲「小学生？」

くるみ「何か、響達のいる町、加音町で、黒いプリキュアの正体が小学生ではないかと噂されているの。ナッツ様が作っておいたミルキイノートの検索機能で調べているけど、中々正体が解らないの、ある人はスイーツ部の部長とか」

りん「私と同じ、フットサル部の部員じゃないとか」

舞「なんでりんさんが割り込むの？」

りん「悪い悪い、私もフットサル部の練習試合の時に加音町へ行った事があるの。その時にミューズの正体と噂されている人に会った事があるのよ」

のぞみ「そうなんだ。りんちゃんすごいよ。もしかしたらミューズの人に会えたかも」

りん「そうかも知れない。けど、でも確証がないんだ」
うらら「やっぱり、証拠がないのですか」

りん「そう、何か確定になりそうなのがないのよ」

少女達が会話に夢中になっている時、大人しくしていたシロップは口を開いた

シロップ「お前ら、会話に夢中になるのはいいけどよ、後ろ詰まってるぞ」

のぞみ「うしろ？って、うわっ！」

のぞみ達の後ろには人が詰まっていた

咲「人、たくさんいるナリ・・・」

くるみ「は、早く行きましょ・・・」

後ろの人ばかりを見たのぞみ達はやく次の場所へ進むのであった。しかし、ココとナッツだけは違っていた

ココ「・・・」

ナッツ「どうしたココ？」

ココ「おかしい？誰かに見られているような気がするんだ」

ナッツ「気のせいだろ」

ココ「気のせいかな。ならいいが」

（何かいるようなのに、いない気がする。何故だ？）

ココ達が不安を抱いてる頃、博物館の一角、大航海時代の展示会場では謎の生物が海賊船の模型を見ていた

「??? 海賊船か。何か利用価値あるな。そうだ、ジェット機とレ
ーシングカー、トレーラーと潜水艦と合成して強いのが創ろうか。後
はドラゴンの模型とパトカーとライオンの剥製と武者人形と忍装束
とレースカーも利用するか」

その生物は海賊船に黒い光を浴びせると、すぐにこの場から消えて
いった。この海賊船がのぞみ達に災いをもたらす事を知らず

博物館の出会い（後書き）

この海賊船もまたやばいフラグ。
そして、いよいよ、あの二組が来ます。

動物園の出会い（前書き）

のこる二組、MH組とHC組登場

動物園の出会い

のぞみ達と咲達が博物館で見学している頃、星海市の中心地に近い動物園では園内の時計がある広場で待ち合わせをしている三人の少女がいた。

???

「遅いですねつばみさん達。そろそろ来てもいい時間ですが、どこへ寄り道をしているのでしょうか？」

???

「ひかり、ここは広いから多分つばみ達は迷っているルル」

広場で待ち合わせをしている金髪のお下げの少女は九条ひかり。普段は藤田アカネのいとして「T A C O C A F E」で手伝いをしながら同居している、一見大人しそうに見える少女であるが、彼女の正体は光の園のクイーンの「生命」にあたる存在である。彼女はなぎさ達の交流によって、クイーンの力を取り戻し、ジャアクキングとの最後の戦いでは、クイーンとして覚醒していった。そして、ジャアクキングを倒した後はクイーンとは別の存在としてなぎさ達の元へ戻って来た。

そして、ひかりに抱きかかえているぬいぐるみみたいな物はルルン。彼女は光の園からやってきた「未来を紡ぐ光の王女」である。普段はコンパクト型のアイテム「ミラクルコミュニケーション」の姿をとっている。

その近くには、黒髪のロングの少女と茶髪のショート少女がいた

???

「そう言うのも無理ないわ。星海動物園は広い上に、近くには植物園。少し歩くけど水族館もあるからね」

???

「それもそうだね。こんだけ広いと迷った時、大変な事になるから」

黒髪のロングの少女は雪城ほのか、彼女は光の園に伝わる伝説の戦士の一人キュアホワイトで。足技や回転系の技を得意とし、柔軟な体を生かし、敵をいなす合気道系の技を使う技巧派の戦士である。

茶髪のショート少女は美墨なぎさ。彼女は光の園に伝わる伝説の戦士の一人、キュアブラック。彼女は自身のパワーを活かし、強烈なパンチやキックで戦い、その破壊力は、ミルキイローズには劣るが強力である。この二人は全プリキュアの中では最も体術に優れたプリキュアである。しかし、彼女の前には歴戦の戦士とも言えるプリキュアがいた。その人は既にここへ来ていた。

???

「その通りよなぎさにほのか。のぞみだったら迷いかねないわほのか」

「ゆりさん、それは言いすぎですよ」

なぎさ

「それにのぞみがいたら、怒りそうですよ」

ゆり

「そうね、流石にそれはないから・・・」

なぎさ達に話しかけたのは月影ゆり。彼女はココロの大樹に選ばれた伝説の戦士の一人、キュアムーンライトである。三年前に父が行方不明になった後、プリキュアとして選ばれ、たった一人で砂漠の使徒と戦っていた。しかし、プリキュアパレスの試練に向かう時にサバーク博士によって作り出されたプリキュア、ダークプリキュアに襲撃され、パートナーであるコロンを失いも自身も一時は変身能力を失ってしまうが、ココロの大樹の力とコロポットによってプリキュアの種が修復され、戦線に復帰する。しかし、彼女には残酷

な運命が待っていた。ムーンライトを敵視するダークプリキュアの正体がじつはゆりの一部と実はゆりの父であった月影博士の手に作り出された、いわば姉妹のような存在だった事やサバーク博士が実の父であり、その父を砂漠王デューンによって殺され、一時は復讐鬼になりかけていたがつぼみの説得によって復讐を乗り越えていった。

そして、三人の少女がなぎさ達の所へ来た。三匹のぬいぐるみみたいな物と一緒に。

???

「なぎささんにほのかさん。遅れてしまってすいません。えりかが色々寄り道してしまって」

えりか

「つぼみ、だってここ色々見たい所が多すぎんのよ」

なぎさ

「それもそうだね。ここはいろんな物が集まるんだからね」

???

「そうですね、何かパリでファッションショーに来ていた時の事を思い出しますね」

つぼみ

「その時はサランダー男爵の事やオリヴィエの出会いとかがありましたね。そういういつきも気になる所あるのですか？」

いつき

「ええ、いくつもありますよ。ポプリもこういうにぎやかな場所が気になっていますから」

ポプリ

「今まで出かけてみたけど、星海市はなんか気にいったでしゅ」

コフレ

「そうですっ！。何か、この街はまるで心地いいんですっ！」
シプレ

「私もですっ！」

つぼみ

「そうですね。もし機会があったらファッション部の皆も一緒に連れて行きます」

えりか

「それ、いいねつぼみ。今度来る時は他の皆も連れて行こうよ」

その三人の少女。ピンクの少女は花咲つぼみ、彼女はココロの大樹に選ばれた伝説の戦士キュアプロッサム。素直で礼儀正しい御婆ちゃん子である。彼女は初変身した時は力を制御できずに振り回され、砂漠の使徒からは「史上最弱のプリキュア」と言う不名誉な称号を得てしまった事があった。

青いウェーブのロングヘアの小柄な少女は来海えりか。彼女はココロの大樹に選ばれた伝説の戦士キュアマリン。明るくマイペースなお節焼きである。ファッションモデルの姉を持ち、自身もファッションデザイナー兼スタイリストになる夢を持つ。しかし、彼女には悩みがあった。背の低さに悩まされていたからだ。もっともえりかより背の低い人が近いうちに現れれば、悩みはなくなるかも知れない。

そして、茶髪のシュートの少女は明堂院いつき。明堂学院の理事長の孫で、実家は明堂院流古武術の道場である。道場の跡継ぎになる為、学園では男装をしており、その影響で、一人称は僕である。そして、彼女もまたココロの大樹に選ばれた伝説の戦士、キュアサンシャインである。

そしてぬいぐるみみたいな物で、ピンクの装飾品を付けた方はシプレでつぼみのパートナー妖精、青い装飾品を着けたのはコフレでえりかのパートナー妖精。そして、金色の装飾品を付けたのはポプリでいつきのパートナー妖精。シプレとコフレの妹分である。

ひかり

「それは悪くありませんね。なぎささんとほのかさんもこういうの
どうでしょうか？」

ほのか

「いいわね、この提案。次来る時はそうしたいけど、なぎさは？」

なぎさ

「あたしもいいわ（でも、藤P先輩を誘ってもいいのかな・・・）」
ほのか

「なぎさ、どうしたの？」

なぎさ

「なんでもないから」

ひかり

「????」

えりかの提案にほのかとなぎさは賛成するが、ひかりは、なぎさが
何故赤面したのかを理解する事ができなかった。
そして、ゆりはなぎさ達に声をかけた。

ゆり

「無駄なお喋りはそこまでにしなさい。そろそろ、のぞみや咲がい
る所へ行くわよ。もしかしたらラブや響と合流するかも知れないわ」
つぼみ

「解っています。なぎささんも行きましょう」

なぎさ

「え、ええ」

ゆり達の号令で、集合したなぎさ達は、のぞみ達がいると思われる
博物館へ向かおうとした。しかし、その裏では

水族館にて

従業員

「おかしいな。記念品のメダルはどこ行っただ？」
従業員

「解りません。何処かへ紛失したようです」

水族館ではメダルが紛失する事件が起きていた。そこには、謎の小動物がメダルと動物のポスターを手にして隠れていた。

???

「メダルに動物。これを合成したらどんな物が出来るのかな」

するとメダルとポスターに黒い光を浴びせた。すると、七体の怪物が誕生した。その怪物は、とある目的で外へ出た。

動物園の出会い（後書き）

次回、戦闘開始。まずはスイート組とフレッシュ組から

予兆 フレッシュ&スイート編（前書き）

戦闘開始の前触れ。ラブ達と響達編です。

予兆 フレッシュ&スイート編

なぎさ達とつばみ達が、博物館へ行こうとしていた頃。響達はラブ達の案内で観光をしていた。

現在、響達は商店街でいろんな店を見ていた。

響「うわー。こんなに店があるんだ」

ラブ「そうなの、ここは色々な店があるの。たとえば」

ラブが右手に刺したのは楽器の専門店で、響はその店を見ていた。

響「いろんな楽器があるんだね。ピアノの他にもギターとか、太鼓みたいなものがあるなんて」

ラブ「響、もしかして楽器に興味があるの？」

響「あるけど、以前の私はそんな物には興味なかったかも知れないの」

ラブ「どういう意味なの」

何故、楽器の話をして響が暗くなるのか。戸惑うラブの元にそこでハミイと奏がやって来る。

ハミイ「それは響が昔は音楽嫌いだったからニヤ」

ラブ「音楽嫌い？」

奏「そう、響は小学校の頃、響のお父さんのすれ違いのせいで響は音楽の才能がないと思いついてしまっただけで音楽が嫌いになったの」

ラブ「そうだったの」

奏「けど、音楽に対する愛情は捨てて切れなかったの、そして、ある出来事で響は音楽への情熱は取り戻し、響のお母さんの交流で響はピアノリストになるという夢を得たのよ」

ラブ「そっか。響は音楽に対してコンプレックスがあっただけど、ハミイや奏の交流があったおかげで立ち直ったんだ。よかったんじゃない・・・ってどうしたの？」

ハミイ「響と奏、ニヤアに出会った頃は不仲で酷かったんニヤ」
ラブ「どういう事？」

ラブと響が会話をしている頃、エレンは美希たちと一緒に玩具店にいた

エレン「ねえ、何でここに来たの？」

祈里「シフォンちゃんが喜ぶ玩具を探しに来たの」

そう言うときエレンをオルゴールのある所へ連れてきた

エレン「シフォンって、こういうの好きなの？」

美希「そうなの、シフォンはオルゴールの子守歌が好きなの」

エレン「子守歌か・・・。ねえ、このオルゴール、買ってもいいかな？」

美希「エレンはオルゴールに興味があるようね？いいわ、買ってもいいわ」

エレン「ありがとう」

祈里「よかったね、エレンちゃん。後はレジに支払いに行きましょう」
エレン「えっ、そうね」

エレンがオルゴールを買い、支払いに行こうとしている頃、せつなはある方向に視線を見て、立ち止まっていた。

タルト「どないしたんや、パッションはん。急に立ち止まって」
せつな「タルト、感じる」

タルト「何がでっか？」

せつな「あれを見て」

せつなが指指した先は、男子が欲しがっている特撮番組の玩具がある場所だった。そこから禍々しいオーラが発していた。

タルト「玩具売り場から一体何・・・」

せつな「伏せて！」

タルトが言いかけたところをせつなはいきなり伏せた。

タルト「な、何や今のは？」

せつな「右手にロケットを持っていた白い奴よ」

そう、タルトはロケットを持った白い奴に襲われたのだ。

せつな「まずいわね。ラブ達に知らせないと」

そういうとせつなは携帯電話でラブに連絡を入れた。その頃のラブ達はと言うと

ラブ「それじゃ、不仲になっていたのは、待ち合わせの場所を間違えたのが原因だったの？」

奏「そう、入学式の時、私は桜の木の元で待っていたけど、その時は校門の反対側にも桜の木があるのを気づかなかったの」

響「その出来事のせいで私達はしばらくは不仲になっていたの。会えば喧嘩ばかりで、初めてプリキュアになった時も息が合わないせいで、何も出来ずに負けちゃったの。しかも、初めてなったのに解散の危機に瀕したの」

ラブ「初めてなったのにプリキュアを止めるって、何か、酷すぎよ。もし、ほのかやかれん、くるみやゆりさんがいたら二人共、こっ酷

く叱られているわ」

ハミィ「その通りニヤ。実際、誤解を解いても、しばらくは喧嘩をしていたから、元の親友にもどるには時間がかかったんニヤ」

ラブ「そうだったんだ。ハミィも苦労してたんだ」

ラブがハミィ達の話をしているとき、ラブの携帯であるリンクルンから着信音が鳴った。

ラブ「どうしたの、せつな？」

せつな「気をつけて、敵が出たの？」

ラブ「敵？どこから現れたの？」

タルト「玩具売り場からいきなり出てきたんや。なんかロケットを装備した白い者に」

ラブ「白い者？それは今どこにいるの？」

ラブが携帯で話している所を響が近づこうとするが、響は奏に呼び止められていた。

響「何で止めるの奏？」

奏「だって、目の前にあれが・・・」

響「あれって、うわっ！な、何でこんな所に白い宇宙飛行士みたいなのがいるのよ！？」

響の目の前にいたのは、白い宇宙飛行士に似た格好をし、右手にロケットを携えた腰にスイッチを持った怪人だった。

ラブ「どうしたの響？なんで驚いている、って何あれ！？なんでこんな所に仮面ライ・・・」

響「違うわよ、この話には仮面ライダーフォーゼは出ないよ！」

奏「おそらく、その仮面ライダーを怪人みたいな物に変えたのよ」

ラブ「せつなの言っていたのはこれだったんだ」

ラブ達が驚いている所で、美希、祈里、せつな、エレン、タルト、シフォンが合流した。

美希「ラブ、大丈夫？」

エレン「響、奏、無事なの？」

ラブ「大丈夫だよみんな」

響「私達は大丈夫よ」

エレン「よかった」

せつな「そんな事言っている場合じゃないわ」

祈里「あの怪人がそとに出たら大変な事になるよ。何とか止めないと」

そういうとラブ達は怪人の所へ視線を向けた。

響「子供達が懂れている正義の味方を」

奏「何らかの方法で人々を傷つけるような物に変えるなんて」

エレン「人々に笑顔をもたらす者を悪い事に使うなんて」

響・奏・エレン「「絶対に許せない！」「」」

美希「その通りよ！」

祈里「みんなの笑顔を守るヒーローを悪い物に変えるなんて」

せつな「人々を不幸にするなんて絶対させない」

ラブ「だから、私達はこんな事態を止めてみせる。みんな行くよ！」

そういうとラブ達は携帯電話、リンクルンを手にして変身コードを言う。

ラブ・美希・祈里・せつな「「「チェンジ・プリキュア・ビートアップ!」」」」

響「私達も行くよ!」

そういうと響達はハートコンパクトに似たアイテム、キュアモジューレを掲げ、変身コードを言う

響・奏・エレン「「レッツプレイ!プリキュア・モジュレーション!」」」

そういうとラブ達と響達は光に包まれ、衣装や髪型が変化する。

ラブはピンクの衣装を纏い、髪はレモンイエローのツインテールに変化し、

美希は青いツーピースの衣装を纏い、髪は紫のサイドテールに変化し、

祈里は黄色の衣装を纏い、髪は変化はしないが髪色は薄くなり、少しウェーブが掛かり、

せつなは赤い衣装に黒いタイツ、髪はピンクの長髪へ変化し、

そしてラブ達の左胸にはクローバーを模したワッペンが装着する。

響はへそを露出したピンクの衣装を纏い、髪はピンクのツインテールに変化し、

奏は白い衣装を纏い、髪はレモンイエローのポニーテールに変化する。

エレンは青い衣装を纏い、髪は淡い紫のサイドポニーに変化する。

そして響達の胸にはキュアモジューレが装着される。

そして、華麗なる衣装を纏ったラブ達と響達は地上に降り立ち、名乗り口上を言う

ラブ「ピンクのハートは愛あるしるし！もぎたてフレッシュ、キュアピーチ！」

美希「ブルーのハートは希望のしるし！つみたてフレッシュ、キュアベリー！」

祈里「イエローハートは祈りのしるし！とれたてフレッシュ、キュアパイン！」

せつな「真っ赤なハートは幸せの証！熟れたてフレッシュ、キュアパッション！」

響「爪弾くは荒ぶる調べ！キュアメロディ！」

奏「爪弾くはたおやかな調べ！キュアリズム！」

エレン「爪弾くは魂の調べ！キュアビート！」

ピーチ・ベリー・パイン・パッション「レッツ・フレッシュプリキュア！」

メロディ・リズム・ビート「届け！三人の組曲！スイートプリキュア！」

今ここに邪悪なる者に立ち向かう可愛らしく強い戦士達、フレッシュプリキュアとスイートプリキュアが登場した。

彼女達は突如現れた怪物を倒すことができるのか？

予兆 フレッシュ&スイート編（後書き）

次回、戦闘開始。因みに、レッツ！フレッシュプリキュアのセリフは原作にはありません。

戦闘前編 フレッシュ&スイート編（前書き）

フレッシュ組とスイート組、戦闘開始。

戦闘前編 フレッシュ&スイート編

商店街にて仮面ライダーフォーゼに似た怪物に対峙するスイート組とフレッシュ組

ピーチ「玩具が敵になるのって、トイマジン軍団以来だね」

メロディ「トイマジンって何？」

ピーチ「ラビリンスと戦ってる時に一時はクローバーストリートにある玩具達が消える事件が起きていたの。その事件を引き起こしていたのはおもちゃの国を支配していたトイマジンと言う怪物だったの。一度は倒したけど、メロディ達と初めて出会ったブラックホールの事件で再び現れたの」

メロディ「そっか、あの時ね。私達はトイマジンとは戦っていなかったんだ。でもそういう敵が居るなんて」

ピーチとメロディはあの時の話をしていた。そしてベリー達はと言うと

ベリー「それにしてもあの仮面ライダーが私達の敵になるなんて」
パッション「それは違うわベリー。これは仮面ライダーフォーゼの玩具が何らかの理由で怪物化したのよ」

ベリー「えっ、そうなの？」

パイン「何か、ナケワメーカーかソレワターセに似ているよ」

ピーチ「確かに似ているけど、何か違う。違和感を感じるよ」

メロディ「かといってネガトーンでもない」

リズム「そうね。ネガトーンだったら不幸のメロディを発するけどそういう気配がないみたい」

ビート「一体、何かしら。あの怪物？」

ビートが思案している間にも白いライダーに似た怪物はピーチたちを襲おうとしていた

ビート「来るよ、みんな！」

白いライダーに似た怪物は右手にロケットを装備し、ピーチ達の方へ突撃しようとしていた。しかし、その怪物の突進をピーチ達は難なく避けた。

ピーチ「動きは早いけど、当たらなければ大丈夫だよ」

余裕のピーチだったがタルトは白いライダーの左手に何か光る物を見た。

タルト「ピーチはん、あの白いライダーの左手に何かを出してきおった」

ヒーチ「何かって？」

タルト「左手を見るんや」

白いライダーの怪物の左手にはアンテナらしき物が装着していた

リズム「パラボラアンテナ？」

メロディ「何するの？」

そのパラボラアンテナから光線が発射し、その光線はリズムとパインに当たる。

パイン「キャ！？」

リズム「何が起きたの？」

光線を浴びてしまったパインとリズムに駆け寄るメロディとベリー

ベリー「大丈夫？」

メロディ「リズム、平気？」

パイン「当たったけど、何ともなかったよ」

リズム「大した事ないから」

メロディ「そっか」

ベリー「ならいいけど」

光線を浴びたが何ともなかったことに安心するベリー達だが、その時パッションがあることを言ってきた

パッション「気をつけて！ミサイルが来るわ！」

ベリー「ミサイル？」

よく見ると白いライダーの怪物の右足にはミサイルランチャーが装備していた

ベリー「嘘！ランチャーを装備しているわ」

パッション「みんな避けて！」

右足のランチャーから大量のミサイルがピーチ達を襲うが・・・

ピーチ「そんな攻撃、当たるもんですか！」

メロディ「スポーツ万能、舐めないで！」

大量のミサイルを避けたピーチ達だが、避けていない人が一人だけいた

パイン「何このミサイル。私だけ避けきれない」

そして、ミサイルがパインを襲い、そして全て当たってしまう

パイン「キャアアアアアアア！」

ミサイルに当たってしまい、落ちていくパイン。落ちていくパインをピーチがキャッチする。

ピーチ「どうしたのパイン？」

パイン「私だけミサイルが全部こっちへ来てしまったの。避けたはずなのに」

ベリー「ミサイルが全部パインに、まさか！？さっきのパラボラアンテナの光線を浴びたせいで」

タルト「多分、パインはんとリズムはんに浴びせられた光線に当たてしまうと、確実に命中してしまう効果をもってしまうんや」

ピーチ「つまり、攻撃が確実に当たってしまうって事。じゃあ・・・」

タルト「多分、リズムはんと同じ効果をもってしまうとるんや」

タルトの話で顔面蒼白になるハミィ

ハミィ「まずいニヤ。メロディにビート！リズムがパラボラアンテナの光線に浴びせられているニヤ！リズムを守るんにゃ！」

ハミィの話を聞いたメロディはビートに声をかけた

メロディ「聞いたビート。リズムの方を見てあげて」

ビート「解ったわ」

その頃、ビートは白いライダーの怪物の突進攻撃を避けまくっていた

リズム「駄目っ、避けても避けても、突進が襲って来るなんて」

しつこい突進攻撃にスタミナが切れてしまっリズム、そして転倒してしまっリズムに左足にドリルを装備し、右手にロケットを装備した白いライダーの怪物の攻撃が襲おうとしていた。

リズム「しまった！」

命中されるその時

ビート「ビートバリア！」

ギター型の武器、ラブリターロッドを装備したキュアビートが音のバリアを張らせ、白いライダーの怪物の攻撃をはじき返した。

リズム「ビート！」

ビート「危ないところだったねリズム。メロディ、後はお願い」

ビートがそう言うのとメロディは脚にマゼンタのオーラを纏い、白いライダーの怪物の方へ走り出し、そして、ジャンプしオーラを纏ったキックを繰り出した。

メロディ「食らいなさい！プリキュア・メロディスマッシュ！」

メロディの必殺キックを当てた白いライダーの怪物は吹き飛ばされたはずが、左手にパラシュートを出し、吹き飛ばしの速度を落とした。

ベリー「パラシュート？」

パイ「そういえばこのライダーのモチーフは宇宙飛行士だよ」
パシ「だから、パラシュートを持ってもおかしくない」
ピー「それだけじゃないよ。何か出してきたよ」

白いライダーの右足にはランチャーとは違う装備をしていた。その装備から大量の煙を排出してきた。大量の煙に苦しむピーチ達

ピー「げぼつげぼつ。まさか煙幕装備を出すなんて」

メロ「これじゃ周りが見えないよ」

パイ「まずいのはタルト達だよ。どこにいるの？」

ビート「煙があつてはハミイが見えない」

大量の煙に苦しまれるピーチ達に悲鳴があがる

「???」
「ニヤ——！」

「???」
「こらっ離さんかい！」

「???」
「助けて——！」

リズム「ハミイの悲鳴が聞こえたわ」

パシ「タルトの悲鳴に」

ベリ「シフォンの泣き声が聞こえたわ」

ピー「煙が晴れる。見て」

煙が晴れると白いライダーの怪物は右手にマジックハンドを装備し、ハミイ達を捕獲した。左手にはハサミを携えて。

ピー「しまった！」

メロ「さっきの煙で私達が混乱している隙に、捕獲するなんて」
リズム「早く助けないと」

リズムが飛び出そうとするが、ベリーに静止される

リズム「どうして止めるの？」

ベリー「リズム、怪物の脚を見て！」

リズム「脚？」

白いライダーの怪物の右足には音響装置、左足にはスプリングのような物が装備していた。

ベリー「おそらく、これを使って足止めし、そして逃走するつもりよ。動けば音響装置で動きを封じるつもりよ」

リズム「それじゃあ、動けばハミィ達が大変な事に、どうすればいいの？」

白いライダーの怪物に人質にされたハミィ達。動けば大変な事になってしまう。窮地に立たされたピーチ達とメロディ達はこの状況を打開する事が出来るのか？

- - - - -

その頃、商店街の外では赤い髪の少女が佇んでいた

???「ここにプリキュアの気配がする。そして、あいつの悪意を感じる。貴方の好きにはさせない」

そついうと携帯電話にカギのような物を差込、ある言葉を言った

???「プリキュアチェンジ」

そして、赤い髪の少女は光に包まれた状態で、商店街に入った。彼

女の正体はいかに？

戦闘前編 フレッシュ&スイート編（後書き）

次回

???「派手に行つてやるわ」

今回のキーマン登場

戦闘中編 フレッシュ&スイート編(前書き)

今作のキーマン現る

戦闘中編 フレッシュ&スイート編

人質にされたハミィ達。救出を試みようとするが、白いライダーの怪人が何をしでかすか解らないために動けずにいた。

メロディ「どうするピーチ、どうやって救出するの？」

ピーチ「動けば音響装置が発動してしまう。動くだけで鉄でハミィ達を切り刻む恐れがあるわ」

悩むピーチにパッションが話しかける

パッション「なら、動かずに白いライダーに近寄ればいいでしょ」

メロディ「方法あるのパッション？」

パッション「アカルンを使つて、瞬時に白いライダーに近づける。

瞬間移動すれば音響装置を発動する前に助けられるわ」

メロディ「なるほど、いい考えね」

パッション達の会話を見た白いライダーの怪人は左手の鉄をカメラに変えた

ベリー「何で左手をカメラに変えたのかしら？」

パイン「何か目的でもあるのかしら？」

カメラが気になるベリーとパイン。そしてピーチはパッションにアイコンタクトをした

ピーチ「いい、パッション。私が合図をしたらアカルンで瞬間移動して」

パッション「解ったわ」

白いライダーの怪人は、動かずに様子を見ていた

ピーチ「気づいてない様ね。今よパッション」

パッション「頼むわアカルン」

アカルンを出そうと動き出す瞬間、右足の音響装置の衝撃波がピーチ達を襲う

ピーチ「何で！まだ動いてないのに？」

強烈な衝撃波に襲われたピーチ達は、店の壁に叩きつけられた

ピーチ「キヤア！」

メロディ「うっ！」

壁に叩きつけられたピーチ達は何が起きたのかわからずにいた

ピーチ「一体、何が起きたの？」

パッション「動いていないのに、衝撃波が来るなんて・・・」

ベリー「多分、さっき装備したカメラでパッションの様子を撮影したからよ」

パッション「私を撮影した！？」

パイン「おそらく、白いライダーの怪物は瞬間移動すると読んでカメラを出したのよ」

メロディ「それじゃあ・・・」

リズム「もう打つ手はないの・・・」

瞬間移動による救出作戦が見破られてしまい窮地に立たされるフレッシュ組とスイート組。そしてハミィ達にも危機が

ハミイ「そんなニヤ、作戦が見破れるなんて」

タルト「フォーゼ本編でもカメラは使ったんや。撮影する事によつて解析されるとは、これは厄介や」

シフォン「キュア」

そんなハミイ達に左手の鍔がゆっくり近づこうとしていた

ハミイ「ニヤ」。止めるんニヤ。ニヤは食べても美味くないニヤ」

タルト「ちよつ兄さん。わいを食用肉にするのは勘弁してくれや」

今、ハミイ達は生命の危機に晒されようとしていた。だがその時、一発の銃弾が、マジックハンドのフレームを破壊し、ハミイ達は解放された。

ハミイ「ニヤーってあれ？」

タルト「わてら無事でっせ」

危機に晒されたハミイが何者かによつて助け出された事に驚くメロディ達

メロディ「なつ何が起きたの？」

リズム「誰が助けたの？」

ビート「今のは一体？」

呆けるメロディ達の前にハミイ達を保護した赤い海賊風の衣装を纏い、赤い長髪の眼帯の少女が現れた。

「???」貴方達の大切な者、助けたわ」

ピーチ「貴方は一体？」

ピーチの疑問に赤い長髪の少女は答える

???「教えてやるわ、私の名は」

???「変革を呼ぶ自由の海賊、キュアパイレーツ」

赤い長髪の眼帯の戦士、キュアパイレーツの登場に驚くメロディ達

メロディ「キュア・・・」

リズム「パイレーツ？」

パイン「パッション、キュアパイレーツって知ってる」

パッション「知らないわ、そんなプリキュア。ただ、別の世界では様々な戦士に変身するヒーローがいたけど、そういう能力のプリキュアは見たことないわ」

ベリー「確かに」

呆けているベリー達を尻目にピーチはパイレーツに話しかけてきた。

ピーチ「ねえ、貴方は味方なの？」

ピーチの疑問に答えるパイレーツ

パイレーツ「安心して、私は味方よ」

ピーチ「味方？」

パイレーツ「そうよ。もし、信用できないなら私の戦いを見なさい」

そう言うとパイレーツは視線を白いライダーの怪人の方に向き、その白いライダーの怪人と対峙する。果たして、彼女の実力は？

戦闘中編 フレッシュ&スイート編（後書き）

次回、パイレーツのターン。
パイレーツ「派手に行つてやるわ」

戦闘後編 フレッシュ&スイート編(前書き)

パイレーツのターン。
でも、長すぎた・・・

戦闘後編 フレッシュ&スイート編

人質にされたハミィを救ったのは赤い衣装を纏った海賊風の戦士キユアパイレーツだった。

白いライダーの怪物に対峙するパイレーツ。その手には船乗りが使う片刃の剣、カトラスに似た武器を持っていた。その武器を構え、決めセリフを言う

パイレーツ「派手に行つてやるわ」

そして、その武器を携えて、怪人の所へ走る。その白いライダーに片刃の剣、キユアカトラスで斬り付ける。

パイレーツ「はっ！」

パイレーツの剣に斬り付けられ、ダメージを受ける。しかし白いライダーの怪人は左手に盾を出して、剣の攻撃を防ぐ。

パイレーツ「盾で防ぐか。だがこっちの拳はどうか」

そういうとパイレーツは拳で盾に殴る。防いでも思わず怯んでしまふほどのパワーで仰け反る白いライダーの怪人。動きが止まったところをパイレーツは携帯電話のような物を取り出し。鍵のような物を差し込もうとしていた。

ピーチ「何、この鍵は？一体何をするの？」

パイレーツ「見せてあげるわ。私の力を」

そして、鍵を携帯電話に差込、あるコードを言う

パイレーツ「プリキュアチェンジ！」

電子音『キュ〜アユニバース』

すると、光に包まれたパイレーツは黄色のラインが入った黒い衣装を纏った銀髪のツインテールのプリキュアに変身した。
違う姿のプリキュアに変身した事に驚くピーチ

ピーチ「何、今のプリキュアは一体？」

Pユニバース「これは、違う世界に存在するプリキュア、キュアユニバース」

ピーチ「キュアユニバース？」

パイレーツ「この世界には存在しないプリキュアよ」

メロディ「存在しない？どういう意味なの？」

Pユニバース「理由は後で話すわ。今は怪物を倒すのに集中しないと」

白いライダーの怪物は、右手の鉄球を撃ち出し、ユニバースを狙うが

Pユニバース「甘いわ」

そういうと回し蹴りで鉄球を打ち返し、鉄球は何故か足元にぶつけた。白いライダーの怪物は足元に鉄球をぶつけられて、何故か痛がっていた。その拍子で音響装置とスプリングは壊された。

ビート「これって何？」

リズム「多分、タンスの角に小指がぶつけられた様なダメージを受けて痛がっているのよ」

ハミィ「何と言うギャグニヤんだ・・・」

タンスの角にぶつけられてた痛みにやられた白いライダーの怪物。
その隙にユニバースは銀の長剣、コスモブレードを召喚し、剣の切っ先に電撃の力が込める。

Pユニバース「食らいなさい。木星の大いなる力、プリキュア・ジュピターボルテージ！」

剣の切っ先に電撃の力を込めて、広範囲に電撃を放射し、白いライダーの怪物にダメージを与えた。
パイレーツの戦いに魅了されるベリー達。

ベリー「すごい」

パイン「これがパイレーツの力」
パッション「でも油断しないで。あの白いライダーの怪物の色が変わるわ」

パッションの言うとおり、白いライダーの怪物は、電気を纏った金色のライダーの怪物になった

ベリー「き、金色になった!?!」

パイン「電気を纏っているよ」

金色のライダーの怪物は左手にウィンチを装備し、ウィンチロープでユニバースを捕らえた。

ユニバース「捕縛攻撃か!」

そして、右手の電気ロッドをウィンチのロープに部分に触れさせ、電流を流した。

タルト「あかん！このままでは黒焦げや」

電流がユニバースに襲おうとするが、ユニバースの手に携帯電話を出し、緑の鍵を差し込んだ。

Pユニバース「プリキュアチェンジ！」

電子音『キュ〜アエルス！』

電子音がなつたと同時に電流を当てたユニバース。しかし、次の瞬間、ユニバースは緑の衣装を纏った緑の長髪のプリキュア、キュアエルスに変身した。

Pエルス「残念だったね。そんな電流、効いてないわ」

エルスに変身した事により電流ダメージを無力化したのだ。

ベリー「今度は緑に変身した！」

パイン「一体どうなっているの？」

電流攻撃を無力化された事によって混乱する金色のライダーの怪物

Pエルス「今度はこっちの出番よ！」

そういうとエルスの周りに電流が纏い、瞬間移動をして、連続攻撃を仕掛ける。

Pエルス「はああああ！」

装備を仕掛ける暇もなくやられる金色のライダーの怪物。エルスの

電撃キックで吹き飛ばした後、エルスの手で緑のロッドを召喚する。

Pエルス「ライトニングロッド！」

そして、ロッドから緑の刀身が展開し、大剣形態に変形する。そして、さっき纏った電撃を刀身に纏い、刀身を巨大化する

Pエルス「食らいなさい！プリキュア・ライトニングスラッシャー・オーバードライブ！」

かなりの長さになった雷の刀身を持った剣を金色のライダーの怪物に斬り付ける。そして大ダメージを受ける。

パッション「他のプリキュアの力を使うとはとんでもないね」

ピーチ「パッション。今度は赤くなるよ」

パッション「赤い？」

ピーチの言うとおり、今度は赤くなったライダーの怪物は銃を装備し、水と火の弾丸を放つ。さらに、ミサイルランチャーとガトリングガンを発射する。

パッション「本当に赤くなった」

メロディ「今度は火と水の球が来るわ」

タルト「おまけにさっきのミサイルに加えて機関銃まで来おったわ」
ハミィ「どうやって防ぐんニヤ？」

弾丸が来る中、エルスは携帯電話を持ち、今度は赤と青のツートンカラーの鍵を差し込む

Pエルス「プリキュアチェンジ！」

電子音『キュッアブレイズ』

今度は右半身が赤で左半身が青の衣装を纏い、赤と青に分かれた三つ編みに赤と青のオッドアイのプリキュア、キュアブレイズに変身した。

ビート「ひっ！？何よ、あの妖怪半分こ女は」

リズム「ビート、これもプリキュアよ」

ビート「これもプリキュアなの！？」

Pブレイズ「まずは炎で叩き落して」

そう言うのと右手から炎が発射し、ミサイルや弾丸を撃ち落とし

Pブレイズ「間に合わないなら」

今度は左手から氷の壁が発生し、弾丸を全てブロックする。

ベリー「炎と氷を同時に使うなんて」

パイン「普通のプリキュアにはそんなの出来ないよ」

Pブレイズ「さて、そろそろ決めてもらうよ」

そういうとブレイズの手には片刃の剣、ブレイズソードを手にし、赤いライダーの怪物の方へ走った。

Pブレイズ「炎と氷の力、受けてみなさい！プリキュア・ブレイズスラッシュー！」

赤いライダーを炎の剣で斬り付けた。そして次の瞬間、剣の軌道が

ら冷気が発生し、瞬時に凍らせて、大ダメージを与えた。これにより白いライダーの怪人に戻る。

ピーチ「圧倒的だね。これじゃ私では・・・」
Pブレイズ「いいえ、あるわ」

そういうとブレイズはパイレーツの姿に戻り、ピーチ達に言葉をかける

パイレーツ「止めは貴方達に任せる。私では玩具ごと破壊しかねないのでな」

パイレーツの言葉を聞いてピーチ達は皆に言葉をかける

ピーチ「解ったよパイレーツ。後は皆で決めるよ」

そういうとピーチはロッド型の武器、ピーチロッドを出す。そしてベリーは剣型の武器、ベリーソードを出し、パインは笛型の武器、パインフルートを出し、パッションはハープ型の武器、パッションハープを出す

メロディはピンクのスティック型の武器、ミラクルベルティエを、リズムは白いスティック型の武器、ファンタスティックベルティエを、ビートはラブギターロッドが変形した武器、ソウルロッドを召喚する。

そして、それぞれの必殺技を同時に放つ

ピーチ「皆で決めるよ。届け！愛のメロディ！プリキュア・ラブサンシャイン・フレッシュ！」

ベリー「響け！希望のリズム！プリキュア・エスポワールシャワー・フレッシュ！」

パイン「癒せ！祈りのハーモニー！プリキュア・ヒーリングプレア
ー・フレッシュユ！」

パッション「吹き荒れよ！幸せの嵐！プリキュア・ハピネス・ハリ
ケーン！」

メロディ・リズム「翔けめぐれ、トーンのリング！プリキュア・
ミュージッククロンド！」

ビート「翔けめぐれ、トーンのリング！プリキュア・ハートフルビ
ー・トロック！」

ピーチ達の必殺技を同時発射しその途中で合成された光線が白いラ
イダーの怪物に命中する

メロディ「決めるよ、三拍子！1！」

リズム「2！」

ビート「3！」

メロディ・リズム・ビート「フィナーレ！」

白いライダーの怪物の周りが爆発し、浄化の光によって、怪物は元
の仮面ライダーフォーゼの玩具に戻る。

怪物が消えたのか、ピーチ達は変身を解く

ラブ「ありがとうございます。貴方のおかげで助かりました」

響「ハミイ達を助けてくれて」

パイレーツ「気にしなくてもいいわ。プリキュアなら当たり前のこと
をしたのだから、それより貴方達に言いたいことがあるわ」

ラブ「何ですか？」

パイレーツ「貴方達は近いうちに400年前に消えた悪夢と戦う事
になる」

響「400年前の悪夢？」

パイレーツ「今はまだ現れないが、時がたてば現れるわ。言いたいことはそれだけよ」

そういうとパイレーツはラブ達とは反対方向へ立ち去ろうとするが

ラブ「あのく、パイレーツまた会えるの？」

パイレーツ「会えるわ。その時は他のプリキュアと一緒にする時に
出会うわ」

そういつてパイレーツは去った。そしてこれからの方針を話す。

タルト「これであの化け物は去ったわ。早い所、ここから去ります
わ。シフォンはんもおびえておるし」

ハミィ「そうニヤ。早くここから去るんニヤ。怖いのは勘弁ニヤ」

奏「そうね、ほかの皆も心配しているし」

せつな「何か嫌な予感がする。急いで集合場所の広場へ行きましょ」

そして、ラブ達と響達は集合場所である博物館前の広場へ向かうの
であった。

戦闘後編 フレッシュ&スイート編（後書き）

次回、集合場所に近いG O G O組とS S組の背後に豪快な巨人も
どきの怪物が・・・

予兆 5 g o g o & S S 編(前書き)

戦闘開始の前触れ。 のぞみ達と咲達編です。

予兆 5 g o g o & S S 編

商店街にてラブ達と響達はフォーゼもどきの怪物を倒した。

その頃集合場所である広場に近い5 G O G o 組とS S 組はというと、広場へ行く途上で会話をしていた。話題はスターオーシャンミュージアムのことを話していた。

のぞみ「本当にすごかったよ。スターオーシャンミュージアムの展示物は」

うらら「そうですね。古今東西のいろんな物が取り揃えてて、いずれも見る価値がありました」

舞「私は宇宙の物がよかったわ。ミュージアムのプラネタリウムもよかったし、ここでスケッチしたかったわ」

咲「舞、ここでスケッチしたら迷惑掛けるよ。あたしは動物かな。とくにライオンのは迫力があってよかった」

りん「あたしは宝石かな。どれもきれいだったし。今度のアクセサリ作りの参考にしようかな」

こまち「私は古代の書物よ。昔の人はどんな物語を書いていたのか気になってたから」

かれん「私は医療よ。医療の歴史を見て思ったの。昔の人はこういう風に治していったんだと」

のぞみ「そうか、じゃあ私は・・・」

くるみ「待ちなさい！」

のぞみが言おうとする所をくるみが突っ込みをいれた

くるみ「あんたの場合は土産コーナーのお菓子が気になるんですよ」

のぞみ「ぎくっ！だって土産コーナーのお菓子はおいしそうだったんで・・・」

くるみ「まったく、食意地張っちゃって。まあ、デザート王国でも同じことだったんだし」

のぞみ「でも、その時のくるみだってお菓子のこと気になってたでしょ」

くるみ「うっ！まあ、否定は出来ないわね」

のぞみとくるみの会話を聞いて咲と舞が話に入ってきた

咲「デザート王国？一体何の事？」

のぞみ「咲ちゃん、何か気になるの」

咲「まあ、何か美味しそうな国じゃないかと」

のぞみ「そうだよ。ここはお菓子が美味しい王国なの。ただ、ちょっと私には嫌な思い出があるの」

咲「嫌な思い出？」

くるみ「まって、咲。ここは私が言うわ。ここへきた時ののぞみはちょっと嫌な事があったの」

舞「それは一体」

くるみ「それは、ココ様がムシバーンという男に洗脳されて敵になつていたの」

咲「洗脳！？」

くるみ「そして、のぞみはココ様を戦う羽目になってしまったの。その時ののぞみは苦戦を強いられてきたけど、のぞみの説得のおかげで正気に戻れたの。そういう意味ではのぞみが羨ましかったわ」

舞「それで、よくいがみ合ってしまったのはこれが原因かしら？」

くるみ「うっ、それに近いわ。後、ムシバーンの戦いで、のぞみはシャイニングドリームになって戦いを繰り広げたわ。そして、戦いが終わった後はムシバーンは満足な心を持って消えて言ったわ。でも、ブラックホールでの戦いでまた現れてしまったわ。その時ののぞみはつらかったわ。あんな形で敵になってしまった事を」

舞「そうだったんですか。のぞみさんにもつらい思い出があるとは

思いませんでしたわ」

のぞみ「舞ちゃん、実はそれだけじゃないの」

舞「どういう意味なんですか？」

のぞみ「私には、りんちゃんやうらら、こまちさんやかれんさん、くるみ、なぎささん達以外にも友達がいたの」

咲「それは誰なの？」

のぞみ「その友達の名前はダークドリーム。シャドウが作り出した私のコピーなの。もちろん、彼女とは戦ったよ。そして和解して一緒に出ようとしてたけど、シャドウの攻撃から私を守るために身代わりになつて散ってしまったの。もし生きてくれたら友達になれたのに・・・」

舞「のぞみさん・・・」

のぞみ「ごめん、明るい話のはずが暗い話になってしまつて」

舞「いいんです。わたしものぞみさんがこついうところがあつたことに驚きましたから」

咲「あたしもよ」

咲達の会話を聞いていたシロップ

シロー「驚いたな。俺の会会う前なのぞみはこついうことにあつていたとはな」

小々田「それもそうだろう。時には喧嘩だつてした事があつたし、いろんな事があつたんだ」

夏「まあ、そのおかげでいろんな事を学んだからな。けど残念だな」

小々田「何が残念なんだ？」

夏「大航海時代の展示コーナーで海賊船の模型が消える騒ぎが起きたんだ。ココ、俺が世界の文化を勉強をしていた事を知っているだろ」

小々田「ああ、そうだったな。その時はナッツは王の事で悩んでいたな」

夏「そうだ。だが、その出来事が会ったからこそ、俺は王の力を使えるようになっていったからな。ん、どうしたシロップ？」
シロー「何か、警官達が集まっているぞ」

よくみるとシローの視線の先には警官が集まっていた。

小々田「すいません。何かあったんですか？」

警官A「何か、パトカーが一台消えたんだ」

夏「パトカーが消えた？」

警官A「はい、そうです。他にもフォーミュラカーとレースカー、ジェット戦闘機と潜水艦、トレーラーが突如消えたんです」

そしてちようどのぞみ達も警官の所へ来た。

のぞみ「ココ、どうしたの？」

小々田「何かパトカーが消えたという話を聞いたんだ」

小々田が話をしようとしているところを別の警官が来た

警官B「大変です！」

警官A「どうした？」

警官B「博物館にて海賊船の模型が消えました。他にもドラゴンの模型とライオンの模型、ティラノザウルスの模型と侍人形と忍者装束が消えました」

警官の話を聞いて呆けるのぞみ達

のぞみ「海賊船に」

りん「ジェットとトレーラー？」

うらら「レースカーに潜水艦？」

こまち「ドラゴンとライオン？」

かれん「侍と忍者？」

くるみ「パトカーにフォーミュラカー？」

咲「後、ティラノザウルス？」

舞「何か嫌な予感がするわね」

舞がそういうと、突如地響きがあった

かれん「地震？」

うすら「何が起きたんですか？」

地響きを聞いた途端、警官達は逃げいていった。

警官A「何だ、あのデカブツは」

警官B「逃げろ——！」

咲「どうしたんだろう？」

舞「急に逃げるなんて？」

そういうと、突然、のぞみのいる地点が暗くなってきた

こまち「何か、暗いわね。どうかしたのかしら。あらっ、りんさん
顔色悪いわよ」

りん「後ろみてよ、皆」

くるみ「後ろ？」

のぞみ「何があるの？」

後ろを振り向くと、脚が潜水艦とトレーラー、腕がジェットとレー
スカー、そして胴体が海賊船の巨人がいた！

のぞみ「うわっ！！なんじゃこりやああああ！！！」
小々田「何か出た！」
夏「一体何なんだ！？」

そう、この巨人は海賊の戦士がのる巨大兵器を模した怪人だった

りん「これって、ゴーカイ・・・」

うらら「りんさん。この作品にはゴーカイジャーは出ませんよ」

こまち「まさか、これって」

かれん「さっきの警官達が話していた消えた乗り物が合体した物よ」
くるみ「でかすぎよ」

咲「あんなのが暴れたら大変な事になるよ」

舞「このままでは、関係ない人が巻き込まれるわ」

そして咲と舞の携帯から声がした。

????「その通りラピ」

????「はやく止めるチョッピ」

咲「フラッピ、感じたの」

舞「チョッピもなの？」

声の主はフラッピとチョッピ。この二匹は泉の郷の精霊であり、幼い頃の咲と舞に会ったことがあるのだ。

フラッピ「そうラピ」

チョッピ「ほつといたらまずいラピ」

咲「そうだね」

舞「何とかとめないと」

そういうと咲と舞は携帯電話、クリスタルコミュニケーションを手にして、

手を繋いで変身コードを言う。

咲・舞「デュアル・スピリチュアル・パワー！」

のぞみ「私達も行くよ！」

りん・うらら・こまち・かれん・くるみ「「「「Yes!」」」」

「

そういうとのぞみ、りん、うらら、こまち、かれんは携帯電話に似たアイテム、キュアモのキーボタンを押し、変身コードを言う

のぞみ・りん・うらら・こまち・かれん「「「「プリキュア・メ
タモルフォーゼ!」」」」

くるみはパレットに似たアイテム、ミルキィパレットに筆を触れさせ、変身コードを言う

くるみ「スカイローズ・トランススレイト！」

そういうとのぞみ達と咲達は光に包まれ、衣装や髪型が変化する。

のぞみは蝶と薔薇の意匠を入れたピンクの衣装を纏い、髪は腰まで届くほどのロングヘアになりツーサイドテールがリング状に変化し薔薇の髪飾りが装着する、

りんは蝶と薔薇の意匠を入れた赤の衣装を纏い、髪は前髪が生えた赤いショートヘアに変化し、

うららは蝶と薔薇の意匠を入れた黄色の衣装を纏い、髪は猫の耳の様なシニヨン風の髪に、先端は細いカールした髪になり根元には薔薇の髪飾りがつける、

こまちは蝶と薔薇の意匠を入れた緑の衣装を纏い、髪は増量したショートボブに二つに分かれて長くなった襟足に蝶と薔薇の意匠を入れたカチューシャを着けて、

かれんは蝶と薔薇の意匠を入れた青の衣装を纏い、髪は長いポニーテールに変化し。ポニーテールの根元には蝶と薔薇の髪飾りが装着する、

そしてのぞみ達の胸には蝶を模したブローチが装着する。

くるみは白と紫の衣装を纏い、ウェーブのかかったツースайдテールに青い薔薇の髪飾りを装着し、胸元には青い薔薇が装飾される。

光に包まれた咲と舞は

咲「花開け大地に！」

舞「羽ばたけ空に！」

との掛け声と同時に咲は赤紫色の衣装を纏い、髪はショートのパニーテールに変化し、

舞は銀白色の衣装を纏い、髪は紫のポニーテールに変化する。

そして、咲と舞の腰にクリスタルコミューンが装着される

そして、華麗なる衣装を纏ったのぞみ達と咲達は地上に降り立ち、名乗り口上を言う

のぞみ「大いなる希望の力！キュアドリーム！」

りん「情熱の赤い炎、キュアルージュ！」

うらら「弾けるレモンの香り！キュアレモネード！」

こまち「安らぎの緑の大地・・・キュアミント！」

かれん「知性の青き泉！キュアアクア！」

くるみ「青いバラは秘密のしるし・・・ミルキローズ！」

咲「輝く金の花！キュアブルーム！」

舞「煌めく銀の翼！キュアイーグレット！」

ドリーム・ルージュ・レモネード・ミント・アクア・ローズ「っ」

「っ」希望の力と未来の光、華麗に羽ばたく5つの心、Yes！

プリキュア5！「っ」

ブルーム・イーグレット「ふたりはプリキュア！スプラッシュスターー！」

ブルーム「聖なる泉を汚す者よ！」

イーグレット「アコギな真似はお止めなさい！」

今ここに邪悪なる者に立ち向かう可愛らしく強い戦士達、プリキュア5と二人はプリキュア、スプラッシュスターが登場した。

彼女達は巨大な豪快な怪物を倒すことが出来るのか？

この戦場の外では、藍色の髪の美女がプリキュア達の様子を見ていた。

「???」これがこの世界のプリキュアか、ヤイバの世界や上原大人の世界、皇リイナの世界やジュエルマスターの世界とは違って、どんな力を持つのだろうか」

そして、彼女の胸元にはペンダントのような物をかけていた。そして、このペンダントは今いるプリキュアの前で輝いていた。

彼女と出会うのは先の話である。

予兆 5 g o g o & S S 編（後書き）

なぎさ「何だか知らないけどイライラする」

メップル「何でメポ？」

なぎさ「あんたの声が聞こえそうでしょ！」

ほのか「たしかに海賊戦隊ゴーカイジャーのナレーションがメッ
プルの人とはいえ」

ひかり「過敏すぎます」

次回プリキュア対豪快な怪物戦開始

戦闘前編 5 g o g o & a m p ; S S組編（前書き）

戦闘開始、しかし、今回は街中で暴れるとまずいので広い所へ行きます。戦闘開始は次回になります。

戦闘前編 5 g o g o & a m p ; S S組編

豪快な巨人に対峙する5 g o g oとS S組。豪快な巨人のでかさに驚いていた。

ブルーム「で、でかい・・・」

イーグレット「あの巨人が私達の敵になるなんて・・・」

ルージュ「あのデカブツ、レモネードの誘いで大都会へ行ったときに遭遇したバルーンホシイナー以来だ」

アクア「もしくは私の高原の別荘に現れた山ホシイナーよ」

ミント「信じられないわ。海賊の戦士が乗る巨人が私達を攻撃するなんて」

レモネード「それはありません。この巨人は人々を守るために戦うヒーローが乗る物です。悪いことに使う訳がありません!」

ドリーム「じゃあ、何が起きたの?」

驚くドリーム達を尻目に豪快な巨人擬きは手の砲口にエネルギーを溜め

ローズ「みんな、呆けないで!来るわ!」

ビームを発射する。そして、その光線はドリーム達を襲う。

ドリーム「うわっ!」

ブルーム「激しすぎるよ」

ルージュ「当たったら一たまりもないよ」

光線の脅威に晒されるドリーム達

ミント「それより、ここで戦ったら関係のない人が巻き込まれるわ」
イーグレット「そうね。ここで戦うのは得策じゃないよ」

アクア「それに、ここではココ達も攻撃に晒されるわ」

ローズ「確かに。流れ弾で街の被害を増やすわけには行かないわね」

光線の砲撃に悩ませる中、空から、声がした

???「ドリーム！」

レモネード「その声、シロップですか」

ドリーム達の前に現れたのは橙色の燕、それがシロップの本来の姿の一つである。シロップは普段はペンギンに似た容姿だが、大きな燕の容姿の時はドリーム達を乗せる移動手段として使われるのだ。

シロップ「そうだロプ」

ローズ「シロップは無事ね。ココ様とナッツ様は」

???1「大丈夫ココ」

???2「こつちも無事ナツ」

シロップの背中席にはココとナッツがいた。容姿は本来の姿であるスピッツ犬とリスに似た姿になっている。

ドリーム「よかった。無事だったんだね」

ミント「ナッツさん。怪我をしないで済んで」

安心するドリームとミント。そしてココ達はある提案を言う

ココ「ここで戦うのは駄目ココ。広いところへ行くココ」

ドリーム「広いところってどこなの？」

ココ「広場より少し北に星海海岸があるココ。そこへ誘うココ」
ミント「でも、ここは人がいるところだけど大丈夫？」

ナッツ「大丈夫ナツ。この時期は人がいないから大丈夫ナツ」

ローズ「そうね、人がいないなら安心ね。みんな、一度、ここへ離脱して、海岸へ誘い込むのよ」

ローズの号令でシロップに乗り込むドリーム達。S S組は自力で何とかしようとするが

ブルーム「あたし達は自力で飛べる形態があるから大丈夫だけど」
イーグレット「駄目よブルーム。距離があるから。ここはシロップに乗りましょ」

やや距離があるという理由でブルーム達も乗り込むことにした。

シロップ「全力で飛ぶロプ」

ドリーム達を乗せたシロップは豪快な巨人擬きの手から一時逃げることにした。目的は海岸へ誘い込む為である。シロップの様子を見た巨人擬きは、突如、巨人にある扉を全てあけた。胴には竜の首、手は竜の翼、足には竜の爪が出現した。そして、巨人擬きもまた飛行を開始した。

シロップに乗って逃走しているドリーム達

ルージュー「とりあえず逃げてはいるんですけど、一体どこへ向かっているんですか？」

アクア「星海海岸と言う所よ。夏場は人がにぎわっているけど、今の時期は人がいないのよ」

ルージュ「そうなんですか、もし夏場に訪れるのでしたら水着持ってくださいかなって」

アクア「水着ね、それも悪くないわね」

ルージュとアクアの話をしている中でブルーム達は海岸の事の出来事を思い出していた。

ブルーム「話聞いてみると夕風海岸を思い出しそうナリ」

イーグレット「そうね、海岸にはいろんな事がありますから」

ブルーム「そうなのよ、何かフラッピとチョッピが海へ遭難したとか、ハナミズターレが海の家の人をやっていたり、後、満さんと薫さんが海岸で死闘を繰り広げたとか色々あったね」

ブルーム達が話をしている所をローズが声を掛ける

ローズ「はいはい、話するのもいいけど、本来の目的を忘れちゃうわよ」

ブルーム「あつ、そうだね。でも、都合よく来るのかな」

ブルームがぼやく頃、後ろにいるレモネード達は驚いていた。

レモネード「皆さん、後ろを見てください」

ドリーム「後ろ？」

ミント「何かいるのかしら？」

レモネードの視線には竜と融合した巨人擬きが追跡してきた。

ミント「やっぱり、追ってきたみたいね」

ドリーム「でも、どうやって竜をいれたの？」

レモネード「最初に現れた時は海賊船とジェットとトレーラーとリースカーと潜水艦しかありませんでしたが」

ミント「博物館の中にあつた竜の剥製を入れたのよ」

ドリーム「なるほど。って何か竜の口から何か吐き出してくるよ」

ドリームの言うとおり竜の口から、火球を吐いた。しかし

ミント「この攻撃はシロップ狙いね。けど」

そっとうとミントは両手を交差し、周りにミントの風を吹いた後、上げた手から緑の円盤を召喚した

ミント「プリキュア・エメラルドソーサー！」

そして、そのソーサーを盾にして火球を防いだ。

ミント「私がいる限り、シロップには当てさせないわ」

その後も巨人擬きの攻撃を防ぎまくるミント。その中、竜の火球は見当違いの方向へ撃った

ドリーム「あれ？これってノーコンなの」

レモネード「わざと外したのでしょうか？」

巨人擬きの行動にかしげるドリームとレモネード。しかし、ルージュとアクアだけは違っていた。

ルージュ「この攻撃、何かありますね」

アクア「ええ、何か目的があるようね」

そして、ローズは上空を見ていた。すると上から何か来る物に気づいた。

ローズ「気をつけて、上から何か来るわ」

ドリーム「上つて、ああ!？」

レモネード「上空から狙ってきました」

何と上に打ち上げてから攻撃してきたのだ。

ミント「しまった、上から攻撃するなんて。でも、ここを外したら、直接攻撃されるわ」

不安を抱くミント。しかし

ブルーム「大丈夫だよミント」

イーグレット「こっちは私達が何とかするわ」

そういうと二人の手に光が集まり、何とバリアを張ってきたのだ。そして、打ち上げた火球を防いだ。

ミント「バリア？ブルームとイーグレットもできるの？」

ブルーム「あたし達は精霊の力を借りる事によってバリアを作り出せるの」

イーグレット「それだけじゃないの。他にも、飛行能力を得たり飛び道具が使えるの。だから、周りは私達がフォローします。ミントは巨人擬きの方向の攻撃を防ぐ事に集中してください」

ミント「解ったわ、二人共お願いね」

ブルーム「任せなさい」

ブルームとイーグレットのバリアを借りる事によって、火球攻撃を防ぐ事に成功したドリーム達。そして数分後

ココ「みえたココ」

ナッツ「星海海岸の上空まで来たナツ」

シロップ「もう、逃亡する必要はないロプ」

ついに星海海岸上空へ着いたドリーム達

ドリーム「よしっ、こつから反撃よ！みんな行くよ！」

ルージュ・レモネード・ミント・アクア・ローズ・ブルーム・イーグレット

「「「「「Yes!」」」」」

ドリーム「つてあれ！？なんでさりげなくブルームとイーグレットも言ってるの？」

ブルーム「一度言ってみたかったのドリーム」

ドリーム「はぁ・・・、そんな事より、攻撃をしないと」

ミント「ドリーム、ここは私が先に仕掛けるわ」

そういうと、盾として使われた円盤を巨人擬きへ投げつけた。

ミント「狙うは龍の翼よ」

そう、翼を斬りつけることによって巨人擬きを地面に落としてダメージを与える作戦である。そして命中するが、今度は巨人擬きから竜を出し

ローズ「カウンター、まさか・・・」

何とカウンターでシロップにあて、プリキュア諸共地面に落とされ

てしまう

シロップ「ロプーーーーー！」

ココ「ココー！」

ドリーム「いけないココ達が」

イーグレット「ドリーム、慌てないで」

そういうとイーグレットは水色の羽衣を纏った衣装のプリキュア、キュアウィンディに変身する

ウィンディ「風よ！」

そして、地面に突風を当て、地面にクッションみたいな物を発生し、ココ達を安全に地面に降ろした。

ココ「助かったココ」

ナッツ「ウィンディ、ありがとうナッツ」

地面に無事に降りたココ達を見て安心するドリーム

ドリーム「ウィンディ、ココ達を助けてくれてありがとう」
ウィンディ「気にしなくてもいいわドリーム」

そして、無事に地面に降り立つドリーム達、一方の巨人擬きも地面に降りようとしていた。

ブルーム「そう簡単に地面に降りさせないよ」

そういうとブルームは黄緑の月を連想させる衣装のプリキュア、キュアブライトに変身し

ブライト「光よ！」

黄緑の光を巨人擬きの膝にあて、脚を切り離した。これでダメージを与えるかに見えたが、巨人擬きは脚にフォーミュラカーを接続し、地面にホバリングしながら降りてきた。

ルージュ「こらー！車が飛ぶなああああ！」

レモネード「ここは蟹ではないのでしょうか」

ローズ「レモネード、電王はこの作品には出ないわよ。それにこの形態は何かやばい予感がするわ」

ミント「ひょっとして、完全形態が出たりして」

アクア「ミント、そういうの言わないで。本当に出かねないから」

海岸を舞台に変え、今度は下半身をフォーミュラーカに変えた豪快な巨人擬きがプリキュア達の前に立ちはだかる。果たしてどうなる？

戦闘前編 5 g o g o & a m p ; S S組編（後書き）

次回、豪快な巨人擬き、大暴れ。カンゼンも来るのか？しかし！

湊「次回、私が助っ人に登場よ！」

戦闘中編 5 g o g o & a m p . s S組編（前書き）

豪快な巨人擬き、やりたい放題。でも、最後にこの人登場

戦闘中編 5 g o g o & a m p ; S S 組編

下半身をフォーミュラカーに換装した豪快な巨人擬き、その巨人擬きに挑むブライトとドリーム達。

ブライト「下半身を車に換えるなんて、ただ乗せただけでは・・・」
ウィンディ「ブライト、それは言っではいけないよ」

二人の会話を聞き、コミュニケーションの中にいるフラッピとチョッピはブライト達に言葉を言う

フラッピ「ブライト、くるラピ」
チョッピ「気をつけるチョピ」

ゴーオン擬きの突進がブライトたちを襲う。

ブライト「うわっ！」
ウィンディ「早い！」

ゴーオン擬きのスピードに翻弄されるブライト達。しかし、アクアは冷静に見ていた。

アクア「確かに早いけど、このスピードは平地だからこそ発揮できるのよ」

ミント「じゃあ、どうするの？」

ローズ「決まっているわ。要するに走りづらくすればいいのよ。ここをでこぼこ道にすればスピードは落ちるわ」

ミント「それはいいけど、どうやってここをでこぼこ道にするの？」
ローズ「ミント、ここは私に任せなさい」

アクア「ローズ、貴方、何か手があるの？」

ローズ「勿論、あるわ。見ていなさい」

そういつとローズはゴーオン擬きが走る道の前に立った

ローズ「暴走車はここで止まりなさい！」

そういつとローズは拳を地面を叩くと、小規模のクレーターが出来た。クレーターに突っ込んだゴーオン擬きは縦回転しながら宙に浮いてしまった。

ブライト「出た、ローズ必殺のクレーターパンチ・・・」
ウィンディ「相変わらず強烈ね」

クレーターパンチの威力に驚くブライトとウィンディ

ローズ「今よドリーム！」

そういつとドリームはゴーオン擬きの所へ走り、両手をクロスし、手にピンクの光を纏う。

ドリーム「プリキュア！シューティングスター！」

そして、一度、後方へ飛んだ後、両手をクロスし、ピンクの光を纏いながら、ゴーオン擬きへ突進した。そして、ゴーオン擬きをバラバラにした。しかし・・・

レモネード「バラバラになったのはフォーミュラーカーだけですね」
バラバラになったのは六つのパーツに分けられたフォーミュラーカ

ーだった。そして、離脱した巨人擬きの下半身には赤いライオンが出現した。そして、そのライオンの爪が空中で無防備になっているドリームを襲う。

ルージュ「ドリーム、気をつけて！」

ドリーム「えっ？」

ライオンの爪がドリームの背中を襲い

ドリーム「キャアアアアア！」

地面に叩きつけられてしまう。ドリームの背中には、衣装とインナーを切り裂いて出来た傷が出来ていた。ルージュは負傷したドリームに近づく。

ルージュ「ドリーム、大丈夫？」

ドリーム「大丈夫だよルージュ」

ルージュ「無理しないで！あんたの傷、相当酷いから」

ドリーム「解っているよ。でも動きに支障ないから」

そういうと、ドリームはガオゴーカイオー擬きになった巨人擬きに対峙する。しかし、背中に血を流しているドリームを見たローズは

ローズ「ドリーム、無理しないでよ・・・」

そして、ドリームの様子を見て、不安を抱いたルージュは他の皆に声をかけた

ルージュ「ドリームを無理するわけには行かない。皆、ドリームのフォローに入っであげて」

ミント「解ったわ」

ルージュの呼びかけでドリームを援護しようとするが、レモネードは巨人擬きの妙な様子に気づいていた。

レモネード「ルージュ、まってください！巨人擬きが何かします！？」

レモネードの言う通り、巨人擬きの胸は全開に開き、中から、パトカーと緑の忍者が飛び出した

ルージュ「何あれ！？なんでパトカーと忍者が出るの？」

アクア「成程、この中にパトカーや忍者、竜を仕込んでいた訳ね」

驚くルージュの前にパトカーが突っ込んでくる。

アクア「ルージュ！避けなさい！」

アクアの言葉を聞き、パトカーの突進を避けるルージュ

ルージュ「あのパトカー、何て乱暴かしら？」

アクア「こんな運転、間違いなく免許停止確定よ。あんな車、早く振り切ってドリーム達の所へ行かないと」

しかし、パトカーのスピンをしながらの射撃の前にルージュとアクアは足止めされてしまう。

ルージュ「くっ！これではドリーム達の所へ行けない」

苦戦するルージュとアクアを救うため、レモネードが援護へ行くが

ミント「レモネード、上に敵が」
レモネード「敵？」

上空から緑の忍者が襲い掛かる。しかし、レモネードは間一髪避ける事に成功する。

レモネード「危なかった」

ミント「あの忍者、私達を足止めするつもりね」

レモネードとミントの前に忍者が立ち塞がる

レモネード「ですが、一人なら何とかできます」

ミント「そうね、協力して行きましょ」

しかし、レモネードとミントの思惑とは裏腹に忍者は何と分身した。

レモネード「分身？そんなのありますか？」

ミント「多すぎるわ。でも、何とかしないと」

レモネードとミントは大量の忍者によって足止めしてしまう。

ブライト「ルージュたちが足止めされてる」

ウィンディ「こうなったら、私達がドリームの元へ行かないと」

足止めされてしまったルージュたちを見たブライト達は急ぎドリームの所へ向かう。しかし、その行動は突如、地面から現れたドリル付きのティラノザウルスによって邪魔されてしまう。

ブライト「何でこんな時に恐竜が出てくるのよ」

ウィンディ「あの恐竜、私達を足止めするつもりなの!？」

そして、恐竜の口から光線を放ち、ブライトとウィンディを襲う。

ブライト「ちよっ!何あの光線は」

ウィンディ「当たったら、ひとたまりもないわ」

恐竜の襲撃によって足止めされたS S組。それぞれのメンバーがパトカー、忍者、恐竜によって足止めされてしまう。そして、ガオ擬きに対峙するドリームとローズは

ローズ「まずいわね。皆、足止めされてるわ。脚が四足ではクレイターパンチは効果が薄いし、ドリームは怪我をしている、どうすればいいの」

ガオ擬きは容赦なくドリーム達を襲う。必至に避けるがドリームは怪我の影響で動きが鈍い。

ドリーム「早い。やっぱり無理は出来ないか。皆には心配したくないのに・・・」

動けないドリームにライオンの爪が襲おうとする。

ローズ「ドリーム、避けなさい!」

ドリーム「わかってる、ってうわっ!」

背中 of 激痛で鈍ってしまうドリーム。そこをライオンが襲う。もし当たれば致命傷になってしまうその時

???「プリキュア・ストライクスピア!」

光の槍がドリームを襲おうとしたライオンの額に命中し、ガオ擬きは後退した。

ドリーム「今の攻撃は一体？」

ドリームは光の槍を投げた人に視線を向けた

ドリーム「あの人は一体？」

ドリームを助けたのは赤い衣装を纏い、赤い長髪をした眼帯の少女だった。その少女を見て、敵が及ばないところに居たココは驚いていた。

ココ「君は一体、何者ココか？」

ココの質問に答える少女

???「安心なさい、私は味方よ」

少女の返答を聞いて、今度はナッツが少女に質問を言ってきた。

ナッツ「どうして、ドリーム達を助けたナツか？」

ナッツの質問に答える少女

???「貴方達を守りたいからよ」

ドリームを救った少女に視線を向けるドリーム達、するとブライトが少女に声をかけた。

ブライト「あんたは一体、何者なの？」

そついうと少女はブライトの質問に答えた

???「教えてあげるわ。私の名は」

???「変革をもたらす自由の海賊！キュアパイレーツ！」

ドリーム「キュア・・・」

ローズ「パイレーツ？」

ドリームを救ったのはキュアパイレーツと言うプリキュアだった。
彼女の参戦によりドリーム達は反撃に移ろうとしていた。

戦闘中編 5 g o g o & a m p ; S S 組編（後書き）

パイレーツ「次回、カンゼンゴーカイオー擬き、出現よ。でも、貴方達には素敵な出会いをもたらすわ」

ドリーム「どういう意味なの？」

パイレーツ「次回のお楽しみよ。ヒントは貴方の知っている友達よ」

戦闘後編その1 5 g o g o & a m p ; S 組編（前書き）

もっとも長い話かもしれない。詰め込みすぎたか・・・
カンゼンは次回になります

戦闘後編その1 5 g o g o & a m p ; S 組編

豪快な巨人擬きの攻撃にさらされている上に、巨人擬きの胸から現れた忍者とパトカー、さらに地中から現れたドリル付きの恐竜によって足止めされたプリキュア達を救ったのは赤い衣装を纏った海賊の戦士、キュアパイレーツだった。

ブライト「あんだ、あたし達を助けに来たの？」

ブライトの質問に答えるパイレーツ

パイレーツ「そうよ。だから今から、貴方達を助けるわ」

パイレーツの言葉を聞いて、質問を言おうとするココ

ココ「相手は恐竜と忍者とパトカーと豪快な巨人擬きだココ。どうやって戦うココか？」

するとパイレーツは携帯電話と鍵に似た物を出して、鍵を電話に指した。

パイレーツ「これを使うわ。プリキュアチェンジ！」

電子音「キュ〜アエクス！」

パイレーツは交差した翼を持ち、右手に剣を持った紫のプリキュア、キュアエクスに変身した。そして

Pエクス「行くわよ。トランスモード！」

そしてエクスのは赤く光り、右手のエクスソードを展開し、恐竜と戦っているブライトの所へ向かった。

その頃のブライトは光線とドリル付きの尻尾に悩まされていた。

ブライト「あの光線、きついナリ」

ウィンディ「かと言って、近寄ればドリル付きの尻尾が襲ってくるわ。どうすれば・・・」

不安を抱くブライト達の前に、赤く光ったプリキュアが横切った。

Pエクス「ここは私に任せなさい」

ブライト「あんたは一体？」

Pエクス「貴方達の味方よ」

ウィンディ「味方？」

Pエクス「そうよ、貴方達、今から私の戦いを見なさい」

そういうとエクスは両手にピンク色の光を放つ剣を出し、恐竜擬きを斬りつける。

Pエクス「プリキュア！エクスサーベル・ハリケーンスラッシュ！」

神速の如く、恐竜擬きを切り刻むエクス。さらに

Pエクス「喰らいなさい！プリキュア・エクスダガー・スピア！」

二本の短剣が、恐竜の両目に命中し、視界を塞いだ。視界を塞いだ事によって混乱する恐竜擬き。さらに、ライフルモードに変形したエクスソードを恐竜擬きの腹に突き刺し、弾丸を内部へ撃ち込んだ。

P エクス「プリキュア！エクスソード・フルブラスト！」

恐竜擬きは腹のダメージを受けて、倒れた。そして、再び剣形態に変形したエクスソードで敵を切り裂こうとした。

P エクス「止めよ！プリキュア！エクスソード・スラッシュ！」

エクスソードの一撃で倒れる恐竜擬き。しかし、恐竜擬きは倒れていた。

P エクス「後は貴方達が止めを刺して。私では破壊されるから」

パイレーツの言葉を聞いたブライトとウィンディは手を繋ぎ、必殺技の体制に入った

ウィンディ「精霊の光よ、命の輝きよ！」

ブライト「希望へ導け、2つの心！」

そして、二人の手に精霊の光が集まり、その光を両手で押し出して発射する

S S 組「プリキュア・スパイラル・スター・スプラッシュ！」

その光は恐竜擬きに包まれ、消滅する。

P エクス「今のうちよ！早くドリームの元へ行きなさい！」

ブライト「あんたはどうするの？」

P エクス「他の皆を助けに行くわ」

そういうとエクスは今度は忍者擬きの所へ向かった。その忍者擬き

の所で苦戦しているレモネードとミントはと言うと

レモネード「数が多すぎます。レモネード・フラッシュつかっても
きりがありません!」

ミント「ナイトメアの戦いに使った技は、今はローズパクトの力のおかげで威力が上がっているけど、それでもきついわ」

苦戦しているところをエクスがやってくる

Pエクス「心配しないで、ここは私が何とかするわ」

レモネード「貴方は一体誰なんでしょうか?」

ミント「私の味方なの?」

Pエクス「安心して、私は味方よ(しかし、数が多いな)」

そいうとエクスは黄色のプリキュアキーを出してきた

Pエクス「忍者にはこれよ。プリキュアチェンジ!」

電子音「キュ〜アボルト!」

今度は黄色の雷のプリキュア、キュアボルトに変身した。ボルトの手には雷を纏った十字手裏剣を持っていた。

Pボルト「斬り裂け!プリキュア・ライティングクロス!」

十字手裏剣を投げつけ、忍者共をまとめて倒すが、忍者はさらに分身する。

Pボルト「分身するとは小ざかしいわね。ならば」

そいうとボルトは分身で対抗し、全方向から電撃を放った。

Pボルト「まとめて消し去ってやるわ。プリキュア・ライジングサ
ンダー！」

全方向からの電撃によって大量の忍者はほとんど消し去った。そし
て、残った忍者はと言うと

レモネード「プリキュア・プリズムチェーン！」

光の鎖によってまとめて捕まえた。

Pボルト「鎖だけで敵を捕獲するとはやるようね」

レモネード「ありがとうございます。貴方もやりますね。ミント、
止めをお願いします」

ミント「解ったわ！」

そして、ミントの手には緑の円盤が形成され、敵に投げつけた

ミント「プリキュア・エメラルドソーサー！」

その円盤によって、忍者は両断され、忍者は消滅した。

レモネード「助かりました！」

ミント「ありがとう、助けてくれて」

Pボルト「気にしなくていいわ。それより、早くドリームの所へ行
きなさい」

レモネード「解りました」

ミント「無理しないでください」

そついうとボルトは今度はパトカーに苦戦しているルージュとアク

アの元へ向かった。その頃のルージュとアクアはというと

ルージュ「ゴーオン擬きには劣るが厄介ですね」

アクア「そうね。車輪から撃つ弾丸は厄介ね。少しずつ削られるのは痛いわ」

弾丸攻撃によりルージュとアクアの機動力は少しずつ削られていた。特にアクアは脚が露出しているせいで傷が目立っていた。

アクア「いくらプリキュアの力があるとは言え、当たり前続けると痛いわ」

ルージュ「しかし、パトカーはしつこいみたいです。何とかならないのかな」

ルージュがばやくとボルトがルージュ達の前に現れた

Pボルト「下がりなさい。無理をすれば大変な事になるよ」

ルージュ「誰なのあんた？」

Pボルト「私は貴方達の味方よ」

アクア「味方？じゃあ、私達を助けるの？」

Pボルト「そうよ。だから、貴方達は一度下がって回復に努めなさい。ここは私に任せなさい」

アクア「わかったわ」

ルージュとアクアを下げさせると、ボルトは赤色のプリキュアキーを取り出し、携帯電話に挿した

Pボルト「プリキュアチェンジ！」

電子音「キュ〜アウイング」

今度は赤い装甲を纏い、ヘルメットを装備したプリキュア、キュアウイングに変身した。

Pウイング「警察車両にはそいつで勝負よ！」

そういうとウイングの左手には銃型武器、ウイングショットが、右手にはウイングソードを装備し、パトカーに挑んだ。

パトカーはビームや銃弾でウイングを襲うが、ウイングには通用しなかった。傷が付いていないウイングを見て驚くルージュとアクア。

ルージュ「あれだけの銃弾受けて、傷一つ付いていないなんて」

アクア「あのプリキュアの防御力、相当高いよね」

銃弾を防いだウイング。そしてウイングはウイングショットとウイングソードを合体し大型銃にした。そして、腕のウイングブレスに番号を入力し、発射準備に入った。

電子音「8・8・9」

Pウイング「プリキュア・ウイングバスター！」

ウイングバスターから光線を放ち、パトカーを転倒させる。そしてウイングはルージュとアクアに声をかける

Pウイング「二人共、止めは貴方達に任せるわ。もう回復したでしょ」

ウイングの声を聞いたルージュとアクア

ルージュ「アクア、立てますか？」

アクア「大丈夫よルージュ」

ルージュ「そうか、じゃあ、はやくあのパトカー黙らせて上げましょうか」

アクア「そうね、ドリームとローズの二人心配しているから」

そういうと二人は両手を交差し、ルージュは炎、アクアは水を発生した

ルージュ「プリキュア・ファイアーストライク！」

アクア「プリキュア・サファイアアロー！」

掛け声と同時に、ルージュは炎のボールを出し、サッカーボールの要領でけりだし、アクアは水で出来た弓矢を作り、水の矢を放った。そして、炎と水は合成され赤と青の光線になってパトカーに当てる。そしてパトカーは消滅した。

Pウイング「二人共いいコンビネーションね。凄いわ」

ルージュ「照れるわね」

アクア「そう、ありがとう」

Pウイング「わかったなら、早くドリームの所へ行きなさい。皆もそこへ行ってるわ」

ルージュ「そうね、はやくドリームの所へいきましょ。あんたもドリームの所へ行くんでしょ」

Pウイング「当然よ。私は先に行くから、あとで来なさい」

ルージュ「解ったわ。ドリームの方、頼むわよ」

ウイングはドリームの所へ向かった。そのドリームの所はガオゴークイオー擬きに苦戦していた。

ローズ「ドリーム、あんた怪我しているでしょ。下がちなさい」

ドリーム「でも、ローズだけでライオン擬き倒せるの？」

ローズ「舐めないでよドリーム。私は赤い薔薇の力五人分の力があるのよ。それくらい敵なんて大した事はないわよ。だから心配はしなくてもいいのよ」

ドリーム「ローズ（でも、ローズだって限界よ。私が怪我をしなれば皆に迷惑をかけずに済んだのに・・・）」

珍しく弱気になるドリームの前に、赤い装甲のプリキュアが現れる

Pウイング「大丈夫よ。貴方は一人じゃないわ」
ドリーム「貴方は？」

ドリームの質問を聞いたウイングは一度パイレーツに戻る

パイレーツ「私はキュアパイレーツ。貴方達の味方よ」

ドリーム「キュアパイレーツ・・・それじゃ、私達を助けてくれるの？」

パイレーツ「当然よ。ドリーム、ここからは私が手伝うわ。それに皆もここへ来るわ」

ローズ「じゃあ、皆も来るの」

パイレーツ「そうよ。だから、皆が来るまで持ちこたえましょ」

そう言うパイレーツは携帯電話を出し、橙と紫のツートンのプリキュアキーを出した。

ドリーム「この鍵は一体何？」

パイレーツ「見てなさい。これが私の戦いよ。プリキュアチェンジ！」

電子音「キュゥアガイア！」

今度は右半身が橙で左半身が紫の衣装を纏い、橙と紫に分かれたボ

ブカットに橙と紫のオッドアイのプリキュア、キュアガイアに変身した。

ローズ「何！？このプリキュアは」

Pガイア「これはキュアガイア。別の世界に存在するプリキュアでこの世界には存在しないプリキュアよ」

ローズ「どういう意味なの？」

Pガイア「後で教えるわ。今はこの戦いに勝利しましょ」

ローズ「そうね」

ガオゴーカイオー擬きに対峙するドリーム、ローズ、ガイア。しかし、ガイアは

Pガイア「先に攻撃を仕掛けるわ」

そういうとボウガン型の武器、ガイアボウガンを召喚し、上へ向けて矢を放った

Pガイア「プリキュア・ガイアレイン！」

そして上から水を纏った石の矢が大量に降ってきた。ガオ擬きに命中し、そしてドリームにも命中した

ローズ「どうしてドリームに当てるの？」

Pガイア「理由はあるわ。よく見なさい」

すると、ドリームの傷が治り、衣装の損傷も直してしまった。

ローズ「嘘！ドリームの傷が治った」

Pガイア「これはプリキュアに対しては回復効果を与えるの。ドリ

ーム戦える？」

ドリーム「うん、大丈夫だよ」

Pガイア「そう。なら大丈夫ね。さあ、行くわよ」

ドリーム、ローズ、ガイアはガオ擬きと交戦する。万全に回復したドリームによって戦況は逆転する。

ドリーム「はあっ！」

ドリームの拳がライオンの頭にあてライオンは昏倒する。

ドリーム「今よ！パイレーツ！」

そしてガイアはガイアボウガンから水を纏った岩槍を放った。

Pガイア「プリキュア・ガイアチェイサー！」

岩槍があたり、ライオンはバラバラになったかに見えた。しかし、バラバラになったパーツはゴーカイオー擬きの中に入り、今度はシンケンゴーカイオー擬きと化した

ローズ「今度は侍。これ以上はまずいわ」

ドリーム「大丈夫だよローズ」

そう、遅れてきたルージュたちもドリームの元へ着いた。

ルージュ「ドリーム、ローズ遅くなって御免」

ドリーム「皆、無事なんだね」

ルージュ「ああ、パイレーツのおかげよ」

Pガイア「皆、揃ったわね。行くわよ！」

ついに集結したプリキュア達。いよいよ豪快な巨人擬きの決戦が始まる。

戦闘後編その1 5 g o g o & a m p ; S 組編（後書き）

次こそ、カンゼンゴーカイオー擬き出現。しかし、夢の競演を見逃すな。

一言言おう。虎キチさんが喜ぶ五人組登場ですよ

戦闘後編その2 5 g o g o & a m p . s S 組編（前書き）

なぜじゃあ〜。何で長くなった。でも、最後は間に合った

戦闘後編その2 5 g o g o & a m p ; S S組編

劣勢だったドリーム達だったが、パイレーツの活躍によって窮地を脱したドリーム達。今度はシンケンゴーカーに戦いを挑む。

ドリーム「今度はシンケン擬きが相手だけど、今度は皆がいる。行くよ！」

プリキュア5・S S組「「「「「「Yes!」」」」」

ドリームの号令で気合を入れるが

Pガイア「このYesは何か意味があるのか？」

レモネード「私達なりの気合の入れ方なんです。ブロッサムやメロディは決め台詞を言う事で気合を入れるんです」

Pガイア「成程、なら私も、こんな格好だが、派手に行ってやるわ！」

シンケン擬きに戦いを挑むドリーム達。しかしあまりのやかさに苦戦する。

ルージュ「相手がでかいわね。どうしますか？」

アクア「こういうのは関節部を狙いなさい。ここは無防備になりやすい所だから」

アクアの提案を聞いたドリーム達は間接部に集中攻撃を仕掛けた。さらにガイアの援護射撃によって、間接部の攻撃に成功するがシンケン擬きは薙刀で反撃する。

ローズ「薙刀とは厄介ね」

薙刀によって離れたドリーム達、そしてシンケン擬きは獅子の口から火球を放つ。だが

ミント「同じ手は聞かないわ！プリキュア・エメラルドソーサー！」

火球をソーサーの盾で塞ぎまくるミント。しかし、今度は大型火球で攻撃した。

ローズ「これはまずいわね。この威力ではソーサーが持たないわ」

その時、ミントの所にブライトとウィンディがフォローに入る。

ミント「ブライト、ウィンディ！」

ブライト「あたしも手伝うよ！」

ウィンディ「一人より三人よ！」

Pガイア「いいえ、四人よ」

そういうとガイアは携帯に赤い鍵を差し込んだ

Pガイア「プリキュアチェンジ！」

電子音『キュ〜アフレイム』

今度は赤い衣装のプリキュア、キュアフレイムに変身した。

ミント「このプリキュアは？」

Pフレイム「これは別の世界にいる七人のプリキュアのリーダーよ」

そして、ブライトとウィンディのバリアを張らせ、さらにフレイムは

Pフレイム「ヴォルカニックスールド！」

炎の盾を張らせ、大型火球を薙刀に当てさせて、地面に落とした。
それを見たレモネードは

レモネード「使わせてもらいます。プリキュア・プリズムチェーン
！」

鎖を薙刀に絡ませ、それを鎖鎌見たく振り回し、敵を斬りつける。
だが、シンケン擬きは今度は赤い刀で薙刀の持ち手を壊し、その勢
いでレモネードを斬ろうとしていた。しかし、ここでフレイムのフ
ォローが入る。

Pフレイム「刀か。ならこれで行くわ」

今度は金色の鍵を差し込む

Pフレイム「プリキュアチェンジ！」

電子音『キュ〜アシャイン！』

今度は金色のプリキュア。キュアシャインに変身する。

Pシャイン「ルナティックスラッシュ！」

シャインは月色の刀で赤い刀を弾かせる。弾かれてふらつくシンケ
ン擬きの前に、ルージュが刀の手を持つ所に現れ、炎を纏った回し
蹴りを持ち手に当てた。

ルージュ「プリキュア・ファイアーストライザー！」

強烈な回し蹴りで刀を落とすシンケン擬き。そこを一对の双剣を二

つ持ったアクアが追撃をかける。

アクア「キュアフルーレ・ツインスラッシャー！」

双剣化したフルーレを斬りつけ、今度は右手にトルネードフルーレとクリスタルフルーレ、左手にファイアーフルーレ、シャイニングフルーレ、プロテクトフルーレに持ち替え、敵に斬りつける。

アクア「キュアフルーレ・ファイブアタック！」

アクアの剣撃によって動かなくなるシンケン擬き。そして、アクアはドリームとローズに声をかける。

アクア「決めなさいドリーム！ローズ！」

ローズ「好き勝手やった分、ここで返させてもらっわ！」

ドリーム「ローズ、どうせならアレを使おうよ」

ローズ「アレって？」

ドリーム「ハンターコンビを倒したアレだよ」

ローズ「成程」

ドリームの言葉に気づいたローズはドリームの手を繋ぎ、両手に光を集め、それを押し出した。

ドリーム・ローズ「ツインローズ・シャインストリーム！」

ピンクと紫の光を当てられたシンケン擬きは、ライオン、ジェット、レースカーを消し去り、海賊船の胴体のみにされた

ブライト「もう、動かないナリか・・・」

ウィンディ「手足をもぎ取られたから大丈夫よ」

だが、ブライトの期待を裏切るかの如く、海賊船のところに、恐竜の頭とドリル付きの尻尾、さらにバラバラになったフォーミュラカーのパーツが襲来した。

ココ「何をするココ？」

ナッツ「まさか、合体するつもりナツか？」

シロップ「何か嫌な予感がするロプ」

海賊船と恐竜とフォーミュラカーが合体し、何とカンゼンゴーカイオー擬きとなって復活した。

ドリーム「こんなのありなの・・・」

ローズ「本当に現れるなんて・・・」

ルージュ「勝てるのか・・・あれ・・・」

まさかのカンゼン擬きに驚くドリームを尻目にシャインは落ち着いていた

Pシャイン「慌てないで、手はあるわ」

そういうとシャインはパイレーツに戻り、今度は拳銃を出した

レモネード「何ですかこれは？」

パイレーツ「これはキュアリボルバー。武器であり、召喚武器よ」

ミント「召喚武器？」

アクア「何と呼ぶの？」

そういうと、パイレーツは黒い4本の鍵と水色と黄緑の鍵を差し込んだ。そして、引き金を引くと光が放たれ、その光は、意外な者に

変化した。

ブライト「嘘でしょ！」

ウィンディ「どうして、満さんと薫さんが・・・」

そこにはブライトの衣装を着た霧生満とウィンディの衣装を着た霧生薫がいた。だが、それだけではない

ルージュ「な、何でダークルージュが・・・」

レモネード「どうして、ダークレモネードが・・・」

ミント「まさか、ダークミントが現れるなんて」

アクア「まさか、ダークアクアが出てくるとは、これは一体・・・」

驚くのも無理はなかった。そう、鏡の国で戦ったダークプリキュア5がルージュの目の前に現れるとは予想もなかったからだ。だが、しかし

ドリーム「けど、一人足りないよ」

ローズ「どうすんの？」

パイレーツ「大丈夫よ」

そついうと黒い鍵を出し、携帯に差し込んだ

パイレーツ「プリキュアチェンジ！」

電子音『ダークドリーム』

何と、パイレーツはダークドリームに変身した

ドリーム「ダークドリームにもなれるなんて・・・」

PDドリーム「驚いて御免なさい。これは、キーをリボルバーに差

込み、引き金を引く事で、召喚するの。まあ、意思までは再現できないが、実力は本物と同じだ」

パイレーツの召喚に驚くドリーム達。それこそ、パイレーツが使う力の一つである。そして、強敵であるカンゼン擬きは果たして倒せるのか？

戦闘後編その2 5 g o g o & a m p . s S組編（後書き）

次回、カンゼン擬きよ。覚悟せよ。最強のコラボレーションを見せてやる。

戦闘後編その3 5 g o g o & a m p ; S S 組編（前書き）

g o g o & a m p ; S S パート。これで完結。そして、ダークプ
リキュア5の合体技を見よ！

戦闘後編その3 5 g o g o & a m p ; S 組編

最終形態であるカンゼンゴーカイオー擬きと化した巨人擬き。しかし、こちらにはパイレーツが召喚したプリキュアと共闘して対抗しようとしていた。

P D ドリーム「行くわよ、皆。全員で怪物を倒しましょ」

ブライト「最終形態が相手なんだし、気合を入れないと」
ウィンディ「そうね」

カンゼン擬きに対峙するプリキュア達。先に仕掛けたのはカンゼン擬きだった。カンゼンのタイヤを使った突進が襲ってくるが、ドリーム達は必至に避ける。

ローズ「速い上にこの巨体。当たればひとたまりもないわ」

ドリーム「でも、タイヤさえ何とかすれば、きっと勝てるよ」

ローズ「それはそうだけど、どうやって狙うの？」

P D ドリーム「ここは私に任せなさい」

そういうとDドリームはDレモネードとDアクアにアイコンタクトをかけた。するとDレモネードは脚から三日月のエネルギー弾、ダークネスフラッシュを放ちタイヤに当てた。そして、それをDアクアは手に持った長剣でタイヤを斬り付け、タイヤをパンクした。これによってカンゼン擬きは転倒した。Dドリームの戦法を見てルージューは感心した。

ルージュー「タイヤに攻撃して転倒とはやりますね」
アクア「でも、油断はしないで」

倒れたカンゼン擬きは立ち上がり、今度は左手の指から大量のミサイルが放ってきた。

PDドリーム「大量のミサイルか。ならば」

その様子を見たDドリームは満と薫にアイコンタクトをかけ、風と光弾で大量のミサイルを打ち落とした。しかし、撃ちもられたミサイルがブライト達を襲おうとしていた。

ブライト「撃ちもらしたミサイルがこっちに来るよ」

ウィンディ「大丈夫よブライト。ここは私に任せて」

するとウィンディは風の壁でミサイルを受け止めた。そして、それを球状に包み込まれ、巨大な空気弾に変えた。

ウィンディ「ミサイル込みの空気弾よ！受け取りなさい！」

その空気弾をカンゼン擬きに当てた、それを見たブライトは

ブライト「追撃よ！光よ！」

光弾を放ち、空気弾に当てさせ、空気弾に入っていたミサイルを爆破し、大ダメージを与え、一時的に動かなくした。

PDドリーム「いい攻撃ね」

感心するDドリーム。しかし、カンゼン擬きもただではやられなかった。今度は右手のドリルが襲おうとしていた。しかし、慌てる様子はなかった。今度はDルージュとDミントにアイコンタクトをかけ、火炎攻撃、ダークネスファイアーとエネルギー攻撃、ダークネ

ススプレッドを放ち、ドリルの威力を弱めた。そこへ

PDドリーム「プリキュア・ダークネスショット！」

闇の光弾でドリルを破壊した。攻撃をしのいだドリーム達だが、カンゼン擬きは取って置ききの攻撃のロケットパンチ、ゴーカーカンゼンバーストを射出し、ドリーム達を襲おうとしていた。それを見たレモネードは。

レモネード「焼け石に水になりますが。これで速度と威力を落とします。プリキュア・レモネードフラッシュ！」

レモネードの掌から無数の光の蝶を放ち、速度と威力を落とす事を試みたが、あまりなのでかさの為、速度は落ちていなかった。

PDドリーム「一人では無理だが、協力すれば」

そこへSS組とダークプリキュア5が飛び道具を放ち、速度と威力をかなり落とした。速度を落としたロケットパンチはミントに迫るが

ミント「プリキュア・ミントプロテクション！」

緑の全方位バリアで防ぎ、ロケットパンチを上空へ弾いた。ロケットパンチはカンゼン擬きの左手に戻る。

PDドリーム「まだやるつもりだけど、そうは行かないわ。合体技を使うわ」

そついうとダークドリームの周りにダークルージュ、ダークレモネ

ード、ダークミント、ダークアクアが集まり、そして、ダークプリキュア5の掌に闇のエネルギーが集まる。

PDドリーム「これがダークプリキュア5の合体技。プリキュア・ダークネスエクスプロージョン！」

ダークプリキュア5の掌から五つの闇の光弾が放ち、その五つの光弾は一つの巨大球になり、カンゼン擬きを襲う。カンゼン擬きはゴークイカンゼンバーストを放つが、巨大球のパワーに耐え切れず破壊。そしてカンゼン擬きに大ダメージを与えて動けなくした。

PDドリーム「貴方達、止めは任せるわ。もう動けないから」

Dドリームの言葉を聞いたブライトは必殺技の準備に入った。

ウィンディ「待つてブライト。満さんと薫さんがいますし、どうせならアレをやりましょ」

ブライト「そうだね。意思がないとはいえ、満と薫がいるみたいだし、やろうウィンディ」

そういうとブライトはブルーム、ウィンディはイーグレットに姿を変え、満と薫の所へ行った

イーグレット「精霊の光よ！命の輝きよ！」

ブルーム「希望へ導け！全ての心！」

SS組「プリキュア・スパイラル・ハート・スプラッシュユスター！」

台詞を言いつつ精霊の光を集め、四人同時に手を突き出し光を放った。

それを見たドリームも必殺技の体制に入る。

ドリーム「私達も行こう。最後まで決めないと」

ローズ「それもそうね」

アクア「だったら、これが必要ね」

そして、アクアは自分が持っていた4本のフルーレをドリーム、ルージユ、レモネード、ミントに渡した。そして、必殺技の体勢に入る。

ドリーム「5つの光に！」

ルージユ・レモネード・ミント・アクア「勇気をのせて！」

GoGo組「プリキュア・レインボーローズ・エクスプロージョン！」

そして、一歩踏み込み突きの姿勢をとった後、フルーレから五色の薔薇が召喚し、その五色の薔薇が融合後、巨大な虹色の薔薇になってカンゼン擬きに放った。

そして、ローズはナッツから王の力を受けミルキイミラーを受け取った後、必殺技の体勢に入る。

ローズ「邪悪な力を包み込む、煌くバラを咲かせましょう！ ミルキイローズ・メタル・ブリザード！」

決め台詞と同時に鉄紺色の薔薇吹雪を放った。まず、精霊の光がカンゼン擬きに命中し、次に薔薇吹雪が敵の方に集まり大きな鉄紺色の薔薇に包み込まれ、最後に虹色の薔薇がカンゼン擬きを押し潰した。押し潰したカンゼン擬きは元の海賊船の模型、ジェット機、トレーラー、レースカー、潜水艦、ドラゴンの模型、パトカー、ライ

オンの模型、侍人形、忍者装束、恐竜の模型、フォーミュラカーに戻った

敵が居なくなっただので、変身を解除するドリーム達とブルーム達。そして、召喚したプリキュア達は光に戻って消えていった。

のぞみ「ありがとうパイレーツ。私を助けてくれて」

パイレーツ「礼はいいわ」

りん「そんなはずはないですよ。パイレーツがいなかったらあのぞみがどうなっていたのかわかんなかったし」

パイレーツ「確かにそうね。でも、貴方達自分を卑下しなくても言いわ。私は当たり前のことをしたんだから。それより貴方達には一つ言いたい事があるの」

うらら「言いたい事ですか？」

こまち「何かしら？」

パイレーツ「貴方達は近い内に400年前に消えた悪夢と戦う事になる」

咲「400年前の悪夢？」

舞「何の事なの？」

パイレーツ「今は現れないが、時がたてば現れるわ。その事はラブや響にも伝えているから」

かれん「えっ、貴方、ラブや響に会ったの？」

パイレーツ「そうよ。既に言いたい事を言っただけあるから」

くるみ「驚いたわね。まさか、ラブや響に会っているなんて」

パイレーツ「言いたいことはそれだけよ。それじゃ」

そういうとパイレーツはのぞみ達とは反対方向へ立ち去ろうとするが

のぞみ「パイレーツ、またどこかで会えるの？」

パイレーツ「会えるわ。その時は他のプリキュアと一緒にいる時に

出会うわ」

そういつてパイレーツは去った。そして浄化した物を見てこれからの事を考えていた。

ナッツ「これからどうするナツか？」

ココ「浄化した物は警察に任せて、一度集合場所の広場へ行くココ」のぞみ「そうだね。ラブちゃんや響ちゃんの事も気になるし」

咲「後はなぎさ達とつばみ達だね。多分、広場へ来てるかもしれないし」

シロップ「その通りロプ」

くるみ「シロップ、あんた飛べるの？」

シロップ「大丈夫ロプ。休んだおかげで飛べるロプ」

のぞみ「シロップがまた飛べるようになったし、一度広場へ行こう」

そして、のぞみ達はシロップに乗り、一路広場へ向かった。その様子を藍色の美女が見ていた。

???「この世界、何かあるようね」

そして、藍色の美女は広場へバイクを走らせた。

戦闘後編その3 5 g o g o & a m p ; S 組編（後書き）

次回、MH組とHC組のパート。相手は来月フォーゼと競演する映画に出るあいっだ。後、歌は気にするな↑これが最大のヒントだ。

予兆 M H & a m p ・ H C 組編（前書き）

戦闘開始の前触れ。 なぎさとつぼみ編

予兆 M H & a m p ; H C 組編

星海海岸にてのぞみ達と咲達はゴーカイオー擬きの怪物を倒した。ゴーカイオー擬きを倒す数分前、集合場所へ向かうなぎさ達とつぼみ達は水族館に通じる道を歩いていた。その道中でなぎさ達はゆりと話していた。

なぎさ「そう言えばゆりさんってつぼみ達の先輩なんですか？」

ゆり「そうよ。プリキュアとしても学園においてもそういう意味では先輩に当たるの」

ほのか「そうなんですか。確か私達と同じ歳にプリキュアとして覚醒して三年もの間、砂漠の使徒と一人で戦ってましたね。そういう意味では私にとっては憧れの存在でしたわ」

ゆり「そう。随分高く買っているようね。でも、私はそんなに強くないわ」

ひかり「そんなはずはありません！だってゆりさんはつぼみさんやえりかさん、いつきさんが勝てなかった砂漠の使徒の最強の戦士、ダークプリキュアを互角に戦っていたんじゃないのですか？それなのに卑下をするなんてよくありません！」

ひかりの言葉を聞いて、つぼみ達は話に加わってきた。

つぼみ「ひかりさん待って下さい。ゆりさんは冷静に振舞ってはいますが、実はゆりさん、色々とつらい出来事にあっているんです！」
ひかり「つらい出来事？」

いつき「はい、ゆりさんは実は僕達がプリキュアに覚醒する前に一緒に戦っていた妖精がいたんです」

ひかり「ゆりさんにも妖精がいたのですか？」

ポルン「ゆりにも妖精がいたなんて初耳ボ」

ゆり「ええ、いたの。妖精の名前はコロン。私が一人で戦っていた頃に一緒に戦っていたの。あの時までは・・・」

ほのか「あの時？」

なぎさ「何が起きていたのですか？」

ゆり「プリキュアパレスの試練を受けようとしている時にダークプリキュアが現れたの」

いつき「そのダークプリキュアは、最初はゆりさんと互角で戦っていましたが、その時に一緒にいたサバーク博士がコロンを殺したんです」

ひかり「妖精を殺した？」

ゆり「ええ、私を守るために犠牲になってしまったの。それをダークプリキュアに付け込まれてしまい、一時は変身能力を失ってしまったの」

妖精が殺された事にショックを受けるなぎさ達

なぎさ「そんな、妖精を殺すなんて・・・」

メップル「信じられないメポ」

ほのか「もし、ミップルが同じような目に遭ったらどうなるのか」
ミップル「考えすぎミポ。ほのかにはそんな事起きないから」

「
動揺するなぎさ達をみてえりかはゆりに声をかける

えりか「ゆりさん、なぎさ達を不安がらせちゃ駄目だよ」

ゆり「御免なさい」

えりか「いやいや、そういう意味で言ったわけじゃないから。ゆりさん、話を続けて」

ゆり「わかったわ。コロンは死んだけど、その精神はココロの大樹に生きていたの」

えりか「そう、コロンに再会し、ゆりさんが再びプリキュアとして

復活した後は、ココロの大樹に戻っていったの」

ゆり「そう、コロンの再会とココロポットの力でプリキュアの力を取り戻した後は、つぼみ達と一緒に砂漠の使徒と戦っていたの」

つぼみ「ですが、ゆりさんはその後、つらい事に遭ってしまっんです」

なぎさ「つらい事って？」

えりか「アタシ達がデューンの居城、砂漠城でとんでもない事実を知っちゃったの」

ほのか「その事実って？」

ゆり「そのサバーク博士は私のお父さんで、ダークプリキュアは私の一部を元に創られた人工生命体。そう、私の妹になる存在だったの」

ひかり「そんな、実の親や姉妹が敵同士になるなんて残酷すぎます」

衝撃の事実には驚くなぎさ達。そしてその時の事をつぼみは話した。

つぼみ「その時のゆりさんはショックを受けました。そのせいでゆりさんは復讐心に支配されそうになってしまったんです」

ゆり「そう、その時はお父さんを殺したデューンへの憎しみに支配されかけていたの」

いつき「でも、ゆりさんは思いとどまりました」

えりか「つぼみの説得のおかげで、ゆりさんは復讐から振り切ったの」

ほのか「そうだったんですか」

（もし、なぎさがいなくなったら、私も復讐心に支配されたかもしれないわ）

なぎさ「そうだったんですか。すいません、ゆりさんにはつらい過去を思い出すような事を言ってしまったって」

ゆり「いいのよ、なぎさ。私も、その事を話したらすっきりしたわ」（確かに私は今までつらい事が遭ったけど、いまはつぼみやえりか

にいつき、そしてなぎさや咲、のぞみにラブに響もいる。もう私は一人じゃないから」

ゆりの話を聞き終えた頃、ひかりは、人だかりの所を見ていた。

ひかり「どうしたんでしょう。急に人が集まり始めるなんて」

ひかりの様子を見たつぼみは声をかけた

つぼみ「どうかしましたかひかりさん？」

ひかり「何か、人が集まっていますか」

つぼみ「人ですか？」

よく見ると、人だかりの中には警官の姿があった。それを見てなぎさは警官に声をかけた。

なぎさ「すいませ〜ん。何かあったんですか？」

警官「ああ、何か水族館の景品のメダルが突然消えたんだ。その後七対の妙な物が水族館から現れたんだ」

ほのか「メダルに妙な怪物？どういう意味かしら」

かしげるほのかを知り目に、シフレ達は不安を抱いていた。

つぼみ「シフレ、どうかしましたか？」

シフレ「つぼみ、何か闇の存在をかんじますっ」

コフレ「コフレも感じますっ」

えりか「闇の存在。一体どこにいるの？」

ポプリ「すぐ、近くにいますでちゅ」

いつき「闇の存在が近くに？一体どこに」

その時、近くで悲鳴が上がった

「????」「うわああああ!」

「????」「助けてくれ。三つの生物の怪物が出た!？」

そこには、怪物に追われる人々がつばみ達の所へ来ていた。

つばみ「どうかしましたか？」

市民「助けてくれ、怪物に追われている」

ゆり「怪物？」

ゆりの視線を見ると、クワガタ・カマキリ・バッタを合成した緑の怪人、

ライオン・トラ・チーターを合成した黄色の怪人、

サイ・ゴリラ・ゾウを合成した白の怪人、

タカ・クジャク・コンドルを合成した赤い怪人、

シャチ・ウナギ・タコを合成した青い怪人、

プテラノドン・トリケラトプス・ティラノサウルスを合成した紫の怪人、

そしてコブラ・カメ・ワニを合成した橙の怪人が目の前にいた。

なぎさ「何よこれ!このごちゃ混ぜ怪人、ありえない!」

ひかり「まさか、仮面ライ……」

ほのか「ひかり……この作品には仮面ライダーオーズは出ないよ」

七体の怪人を見て驚くなぎさ達。そして、市民は怪人の出現に怯えていた。警官も応戦するが怪人には傷一つ付けられなかった。

市民「何だ、この怪物は」

警官「武器が効かないなんて……どうなってるんだ？」

市民達は恐慌状態に陥ろうとしていた。しかし、つぼみ達は市民に声をかけた。

つぼみ「大丈夫です。ここは私達が何とかします。急いで逃げてください！」

市民「でも、あんたらは大丈夫か」

いつき「心配しないでください」

えりか「ここはアタシ達に任せてください」

警官「あんたら、大丈夫か？」

ゆり「大丈夫よ。それより貴方達は市民を避難して、この怪物は私が何とかするから」

ゆりの言葉を聞いた市民達は急ぎ、安全なところへ逃げた。市民がいなくなったところをゆりは声をかけた。

ゆり「これで市民のほうは大丈夫ね。みんな行くわよ！」

ゆりの言葉を聞いたつぼみは、シフレに呼びかけた。

つぼみ「シフレ！」

シフレ「はいですっ！プリキュアの種、行くですっ！」

そして、つぼみとえりかといつきの手には、香水瓶型の変身アイテム、ココロパフォームを手にし、プリキュアの種を装填した。ゆりはコンパクト型の変身アイテム、ココロポットを出しプリキュアの種を装填し、そして、変身コードを言う。

つぼみ・えりか・いつき・ゆり「……プリキュア・オープン・マイハート！」「」「」

つばみ達が変身するのをみて、なぎさはほのかに声をかけた。

なぎさ「あたし達も行くよほのか！」

ほのか「ええ！」

なぎさ達の手には携帯電話型の変身アイテム、ハートフルコミュニケーションを手にし、クイーンのカードをスキャンし、手を繋いで、コミュニケーションを掲げ、変身コードを言う。

なぎさ・ほのか「デュアル・オーロラ・ウェーブ！」

そして、ひかりもタッチ・コミュニケーションを使い、変身コードを言う。

ひかり「ポルン。私も行きます。ルミナス・シャイニングストリーム！」

そういとうなぎさ達とつばみ達は光に包まれ、衣装や髪型が変化する。

なぎさとほのかは銀色の光に包まれた後、なぎさは黒い衣装を纏い、ほのかは白い衣装を纏った。

ひかりはピンクの衣装を纏い、髪は金髪のツインテールに変化する。つばみは花の意匠をあしらったピンクの衣装を纏い、髪はピンクのポニーテールに変化し、

えりかは花の意匠をあしらった水色の衣装を纏い、髪は水色のロングヘアーに水色のティアラを装着し、

いつきは花の意匠をあしらった金色の衣装を纏い、髪は普段のショートから、ロングヘアを経て金色のツインテールに変化し、

ゆりは銀色の衣装を纏い、髪は薄紫のロングヘアーに変化する。

そして、なぎさとほか、ひかりが持っていたコミュニケーションは腰に装着し、

つぼみとえりか、いつきがココロパフォームはキャリーに格納し腰に装着し、

ゆりのココロポットは左胸に接続した。

そして華麗なる衣装を纏ったなぎさ達とつぼみ達は地上に降り立ち、名乗り口上を言う。

なぎさ「光の使者、キュアブラック！」

ほか「光の使者、キュアホワイト！」

ブラック・ホワイト「ふたりはプリキュア！マックスハート！」
ひかり「輝く命、シャイニールミナス！光の心と光の意志、全てをひとつにするために！」

つぼみ「大地に咲く一輪の花、キュアブロッサム！」

えりか「海風に揺れる一輪の花、キュアマリン！」

いつき「陽の光浴びる一輪の花、キュアサンシャイン！」

ゆり「月光に冴える一輪の花、キュアムーンライト！」

ハートキャッチ組「ハートキャッチプリキュア」

ホワイト「闇の力のしもべ達よ！」

ブラック「とつとお家に帰りなさい！」

今ここに邪悪なる者に立ち向かう可愛らしく強い戦士達、ふたりはプリキュア、マックスハートとハートキャッチプリキュアが登場した。そしてブラックとブロッサムは三つの生物の力を持った怪人にどう立ち向かうのか？

予兆 M H & a m p ; H C 組編（後書き）

メップル「でもこの怪人、闇の下僕に見えるメボか？」
ミップル「どう見ても正義のヒーローに見えるミボ」
ホワイト「でも、邪気が感じるから、立派な敵よ」
ブラック「変な事は言わないの！次回、戦闘開始よ！」

次回、プリキュア対七体の怪人、戦闘開始。

戦闘前編その1 M H組 & a m p・H C組（前書き）

戦闘パート前編、マックスハート編。ホワイトとルミナスの新技、登場。

戦闘前編その1 M H組 & a m p ; H C組

水族館に通じる通りにて7体のメダルの戦士擬きに遭遇したブラック達とブロッサム達。

ブラック「相手は七体か。戦えるのかな」

ホワイト「大丈夫よ。相手がたくさんいようとしても一体ずつ相手すれば何とかなるわ」

ルミナス「そうですね。私達も今までの戦いで経験を積んでいますから。問題は相手をどうやって決めますか？」

七体の怪人を目の前にするブラック達。この陣容を見てムーンライトは言う。

ムーンライト「一番強そうなのはプトティラ擬きね。紫は私が相手にするわ」

サンシャイン「私はサゴーズ擬きにします。ブロッサムとマリンが相手にするには分が悪いようなんです」

ブロッサム「私はガタキリバ擬きにしますので、マリンはラトラーター擬きをお願いします」

マリン「相手はラトラーターか。まあ、何とかやるっしゅ！」

ルミナス「橙は守りが強いですね。ブラカワニ擬きは私が何とかします」

ブラック「タジャドル擬きも強敵ね。赤いのはあたしにまかせて」
ホワイト「最後はシャウタ擬き。私の相手になるようね（でも、なんか戦いにくいわね）」

それぞれの相手を決めたブラック達。

ムーンライト「相手が決まったようね。みんな行くわよ!」

ムーンライトの号令でオーズ擬きの元へ向かうブラック達。それぞれの戦いが始まる

VSタジャドル擬き

ブラックはタジャドル擬きと対峙していた。

ブラック「相手は赤い奴ね。それじゃ行くよ!」

ブラックは先制攻撃を仕掛けるべく、タジャドル擬きへ向かった。
だが

ブラック「あれ?いない?」

タジャドルが消えた事に驚くブラック。すると、上空から火炎弾がブラックの上から降ってきた。

メップル「ブラック、上メポ!」

ブラック「上?って何で火炎弾が降ってくるの?」

ブラックが見たのは翼を展開し、右手に円形の手甲を持ったタジャドル擬きだった。火炎弾を必死に避けるブラック。

ブラック「もう、こっちが飛べないのをいい事に空を飛ぶなんてずるじゃない!」

メップル「こっちはブルームやブロッサムと違って空が飛べないメ

ポ」

ブラック「あゝあ、どうすればいいのよ」

いらつくブラックの視線の先には、棒が落ちていた。

ブラック「何で棒があるの？」

メップル「怪人の攻撃で棒を切ったんだメポ。ってブラック？」

棒を見たブラックは不敵な笑いをした。

ブラック「いいものあるじゃない」

メップル「どうするメポ？」

そついうとブラックは棒を掴み、振り回した。

ブラック「火炎弾をこれで全部打ち返してやるわ」

メップル「ブラック、出来るメポか？」

ブラック「大丈夫、火炎弾をラクロスのボールだと思って打ち返すのよ」

そう言うのとタジャドル擬きは大量の火炎弾を放ってきた。しかし、ブラックは棒を振り回して打ち返し、逆に火炎弾をタジャドル擬きに命中させた。これにより、火炎弾を打ち返されたことによって怒り出したタジャドル擬きは自らを火の鳥にして、ブラックを襲おうとしていた。しかし

ブラック「頭に血が上ってるみたいね。でも、それが命取りよ！」

そう、ブラックの右足には黒い光が集まってきた。そして、突撃するタジャドル擬きの方へ跳躍し、ブラックの必殺技を放つ

ブラック「プリキュア・ブラックキック！」

黒い光を纏った蹴りがタジャドル擬きに当てた。すると、カウンタ―を食らったタジャドル擬きは錐揉みしながら落下し、地面に落ちた。タジャドル擬きを倒したブラックはガッツポーズをした。

ブラック「よし！まず一人！」

VS シャウタ擬き

ホワイトはシャウタ擬きと対峙をしていた。

ホワイト「相手は青い奴ね。気をつけないと」

ホワイトはシャウタ擬きの行動を注意深く見ていた。するとシャウタ擬きは頭部から水流を放ちホワイトを放った。しかし

ホワイト「強烈な水流ね。でも、当たりはしないわ」

ホワイトは水流を飛び越し、シャウタの頭部に飛び蹴りを当てた。ところが・・・

ホワイト「仰け反らない・・・どうして？」

ミップル「ホワイト、原因は脚だミポ」

ホワイト「脚？」

そう、シャウタ擬きのタコの吸盤のせいで、地面に引っ付いていた

のだ。そのせいでシャウタ擬きは動けなかったのだ。

ホワイ「脚がタコその物になっているなんて・・・」

驚くホワイにシャウタ擬きは腕の鞭をホワイに当てる。しかも、これは電流入りだ。電流入りの鞭によって傷ついていくホワイ

ホワイ「うっ！痺れる！」

ミッブル「ホワイ！しっかりするミポ！」

シャウタ擬きの鞭攻撃で体力が削られるホワイ。しかし、ホワイはそう簡単にはやられない。

ホワイ「調子に乗らないで！」

そういうと電流入りの鞭を掴むと思いつき振り回し、シャウタ擬きを上に投げ飛ばした。投げ飛ばされて無防備になったシャウタ擬きに対しホワイは

ホワイ「見せてあげるわ。私の新技、受けて見なさい」

そういうとホワイの左膝に白い光が集まり、シャウタ擬きに跳躍して必殺技を当てた

ホワイ「プリキュア・ホワイクラッシュ！」

光を纏った飛び膝蹴りを当てた事によって、シャウタ擬きは吹き飛ばされて、ちょうどタジャドル擬きの所まで飛ばされた。

ミッブル「すごいミポ。ホワイ、いつの間にこんな技を」

ホワイト「私はブラックにいろいろ助けられていたの。だから、私だってブラックの役に立ちたいからこういう技を編み出したの」
ミップル「成程ミポ」

ホワイトはシャウタ擬きを倒した

VSブラカワニ

ルミナスはブラカワニ擬きと対峙していた。

ルミナス「防御に長けた相手ですね。どう行きましょうか？」

ポルン「ルミナスはどうやって戦うポポ？」

ルミナス「ちよつとした技、試してみようと思います」

ポルン「どんな技だポポ？」

ルミナス「見てのお楽しみです」

ルミナスが会話しているところをブラカワニ擬きは滑走しながら接近して来た。それを見たルミナスはハート型を模したバトン、ハーティエルバトンを召喚し、弓状にした後、光のエネルギーを放った。

ルミナス「ルミナス・ハーティエル・アクション！」

光のエネルギーをブラカワニ擬きに当てようとするが、腕の甲羅型の盾に防がれてしまう。

ポルン「防がれたポポ!？」

ルミナス「慌てないでください。本命は別にあります」

攻撃を塞いだブラカワニ擬きはルミナスに突進する。そこでバリアを張るが、ブラカワニ擬きはバリアにぶつかった。だが、これがルミナスの本当の目的である。

ルミナス「傾きなさい！」

そういうと光のバリアは傾いた。坂道のようになった事により、ブラカワニ擬きはバリアの上を走ってしまう。そして、バリアの上から滑り落ちた事により、ブラカワニ擬きは墜落してしまう。そして、ルミナスの新技がブラカワニ擬きを襲う。

ルミナス「ハーティエルファング展開準備・・・」

そういうと両腰部と腰背部に光の牙が精製していた。

ポルン「ルミナス？何をするポポ？」

ポルンの言葉を尻目にルミナスは新たな力を放った。

ルミナス「ハーティエルファング！掃射！」

そういうとルミナスが生み出した4つの牙が落下中のブラカワニ擬きを襲う。光の牙から放つ緋色の光が、ブラカワニ擬きの体力を削る。そして、ブラカワニがルミナスの近くまで落ちてくると、ファングを格納し、変わりに右手から光が集まり、円形の盾が精製する。そして、盾にふれたブラカワニ擬きを見て、ルミナスの新たな技が襲う。

ルミナス「ルミナス・ハーティエル・リフレクション！」

そう、ブラカワニ擬きの落下エネルギーをリフレクションによって攻撃エネルギーに変換された事によってブラカワニ擬きを吹き飛ばした。

ポルン「ルミナス、今の技はとんでもないポポ」

ルミナス「むりもありませんポルン。私は今までブラックやホワイトに助けられました。ですが、もし二人が戦えなくなる事もあると想定して新しい技を作ったのです」

ポルン「なるほどポポ。けど、ルミナス。キャラ変わってないポポ？」

ルミナス「気にしないでください。フアングを使うなら、少し好戦的に言っておいたほうがいいと思ったんで。それより、はやく合流しましょう」

ブラカワニ擬きを倒したルミナスはブラック達の下へ向かう。

タジャドル、シャウタ、ブラカワニを倒した三人。しかし、三対の怪人は再び起き上がった。

ブラック「本当にしつこいわね」

ホワイト「やっぱり、あの怪人は必殺技を使わないと倒せないかも知れないわ」

ルミナス「だったら、早く倒しましょう」

ルミナスの言葉を聞いたブラック達はマールスクリューの必殺技の体勢を入ろうとする、が、その時！

MH組「「「キャアアアアアアアア！」「」」

突如、剣閃がブラック達を襲ったのだ。

ブラック「一体、何が起きたの？」

ホワイト「わからないわ」

ルミナス「まさか、もう一体いるなんて・・・」

そう、ブラックが襲われたのはタトバ擬きだった。もう一体いた敵の出現にどうなる。

戦闘前編その1 M H組 & a m p ; H C組（後書き）

ブロッサム「ブラックがやられるなんて・・・」

マリン「何が起きたの？」

サンシャイン「私達はあのコンボを忘れてた」

ムーンライト「次回は私達のパートよ。けど、最後はあれに襲われるわ」

戦闘前編その2 M H組 & a m p・H C組（前書き）

戦闘パート、ハートキャッチ編。オリジナル技とココロの種、登場です。

戦闘前編その2 M H組 & a m p ; H C組

マックスハート組が窮地を立つその前、ハートキャッチ組はというと

V Sガタキリバ擬き

ブロッサムはガタキリバ擬きと対峙をしていた。

ブロッサム「素早い虫みたいな感じです。マリンだったらきつと悲鳴上げてますね」

シプレ「ブロッサム、気をつけるですっ！虫擬きがこっちへ来るですっ！」

シプレの言うとおり、ガタキリバ擬きはカマキリソードを構え、小ジャンプしながらブロッサムを強襲する

ブロッサム「えっ、もう近くに」

ガタキリバ擬きに強襲されるが、ブロッサムはバックステップで離脱する。

ブロッサム「あの脚力は厄介ですね。一瞬で近寄るなんて」

シプレ「ブロッサム、どうするんですか？」

ブロッサム「この場合は、強襲で対抗します！」

高い脚力で強襲するガタキリバ擬き。そしてブロッサムはガタキリバ擬きに対し、強襲技で対抗する

ブロッサム「ブロッサム、ぜんぶパンチ！」

大の字の体当たりで、ガタキリバにぶつける。ガタキリバは意外な攻撃に対応できずに吹き飛ばされる。

シプレ「ブロッサム、すごいですっ！」

ブロッサム「上手くはいきました。けど、今ので本気で来るようです」

ブロッサムの言葉通り、吹き飛ばされたガタキリバ擬きは、何と50体に増殖した。どうやら数の暴力で倒そうとしている

シプレ「多すぎですっ！どうすれば」

ブロッサム「なら、これで対抗しましょう。シプレ、ココロの種を」
シプレ「はいですっ！」

そついうとシプレは赤いココロの種を渡し、ココロパフォームに装填し、ブロッサムはココロパフォームから光の香水をかけた。

ブロッサム「レッドの光の聖なるパフューム！ シュシュツと気分でスピードアップ！」

そして、ブロッサムの衣装は赤く光った。そして大量のガタキリバ擬きを迎撃する。ガタキリバ擬きは攻撃を仕掛けるが

ブロッサム「いくら数が多くても、そんな攻撃は通用しません！」

スピードアップしたブロッサムの攻撃の前に撃退されるガタキリバ擬き。すると今度は、体勢を変えて、必殺技のガタキリバキックで攻撃するが。

ブロッサム「今度はこれで対抗です」

今度はオレンジのココロの種を装填し、光の香水をブロッサムにかける

ブロッサム「オレンジの光の聖なるパフューム！ シュシュツと気分でパワーアップ！」

今度は攻撃力アップの効果を持つ香水をかけた。そして、ブロッサムはこころの花の力を込めて、エネルギーとして放出する。

ブロッサム「ブロッサム・スクリューパンチ！」

攻撃力が上がったエネルギーをぶつけられたガタキリバ擬きは分身諸共吹き飛ばされ、動けなくなった。

ブロッサム「もう大丈夫ですね。これだけのパワーを受ければもう立てませんね」

ブロッサムはガタキリバ擬きを倒した。

V S ラトラーター

マリンはラトラーター擬きと対峙していた

マリン「相手は猫科怪人か」

コフレ「あれはただの猫じゃないですつ。あれは猫科の猛獣の特性

をもった怪人ですっ！油断はだめですっ！」

マリリン「解っているって。まずは様子を見ようか」

マリリンはラトラーター擬きの動きを観察していた。そしてラトラーター擬きはマリリンより先に動いた。

コフレ「マリリン、来たですっ！」

マリリン「わかってるって」

マリリンはラトラーター擬きのトラクローをバックステップで避けた。

マリリン「隙だらけだよ。それ！」

マリリンは隙だらけのラトラーターに攻撃を仕掛けた。所がラトラーターの鬣から強烈な閃光がマリリンを襲う。

マリリン「うおっ、まぶし！」

目くらましにやられたマリリン。次の瞬間、ラトラーター擬きは高速移動でマリリンを翻弄し、連続攻撃を仕掛ける。

マリリン「うわあああ！速すぎて追いつけないよ〜〜〜」

翻弄されるマリリンを見てコフレは声をかける

コフレ「マリリン、レッドの種を使うですっ！」

マリリン「レッドの種ね、よ〜し」

そしてマリリンはコフレから赤いココロの種をもらい、ココロパフォームに装填し、マリリンはココロパフォームから光の香水をかけた。

マリ「レッドの光の聖なるパフューム！ シュシュツと気分です
ピードアップ！」

そして、マリンの衣装は赤く光った。

マリ「もう、あんたの速さは通用しないよ！行くよ！」

反撃といわんばかりに、マリは連続攻撃を仕掛ける。ラトラータ
ー擬きは自身の速さについてきているのを見て、再び、目くらまし
を仕掛けるが

マリ「目くらましなんて目を瞑れば怖くないよ」

マリは目を瞑って目くらましに対抗するが、光が運悪くマリンの
額に当たり、高熱にやられてしまう。

マリ「熱っ！」

額が焼かれる痛さに耐え切れず、目を開けるマリ。しかし、その
光は額から跳ね返し、ラトラーターの目に入った。目が光に入った
事で混乱するラトラーター擬き。

マリ「熱っ。額が焦げるかと思ったよ」

コフレ「マリ、怪人が混乱しているですっ。チャンスですっ！」
マリ「えっ、チャンスなの。よし」

チャンス到来と見たマリは混乱しているラトラーター擬きの方へ
走り、跳躍後、低空からの錐揉みキックを放った。

マリ「行くよ。マリ・スパイラルダ〜イブ」

錐揉みキックが命中した事により仰け反るラトラーター。そこにマリが追撃を仕掛ける

マリ「おまけよ。マリ・インパクト！」

水色のエネルギーを纏った掌底でラトラーター擬きを吹き飛ばし、そしてラトラーター擬きを動けなくした。ラトラーター擬きが倒れたのを見てドヤ顔で決めるマリ

マリ「ギャグ専門だと思ったら大間違いだよ！」

マリはラトラーター擬きを倒した

VSサゴーズ

サンシャインはサゴーズ擬きと対峙していた

サンシャイン「見るからして力が強そうですね。私が相手にして正解かも」

ポプリ「サンシャイン、気をつけるでしゅつ。当たると痛いから」
サンシャイン「そうだね、力が強い分、動きは鈍いみたいだし、仕掛けるよ」

そして、サンシャインはサゴーズ擬きが動く前に攻撃を仕掛けた。予想通り、動きが鈍いだけあってサンシャインが優勢だった。

サンシャイン「よし、これならいける」

しかし、サンシャインの攻撃は意外な攻撃で止まってしまいサゴーズ擬きに反撃を与えてしまう。それは、

サンシャイン「うっ！まさか頭突きが来るとは」

そう、サゴーズの頭突きによって仰け反ってしまう。その隙をサゴーズはドラミング攻撃によってサンシャインを吹き飛ばす。

サンシャイン「痛たたた。まさか、頭突きで反撃するとは驚いたよ。それにしてもまだ頭突きの衝撃でフラフラする」

ポプリ「サンシャイン、大丈夫でしゅか」

サンシャイン「大丈夫よ。そっちが硬い物なら、そっちも固いので対抗するよ。ポプリ、ココロの種を出して」

ポプリ「わかったでしゅ」

そういうとポプリは銀色のココロの種をサンシャインに渡した

ポプリ「何をするのでしゅか？」

そして、シャイニーパフォームにココロの種を装填し、光の香水をサンシャインにかける

サンシャイン「行くよ。シルバーの光の聖なるパフューム！ シュシュツと気分でディフェンスアップ！」

なんと、サンシャインの衣装は銀色に光った。そして、サンシャインはサゴーズの所へ歩く。サンシャインを見たサゴーズ擬きは、両手の手甲、バゴーンプレッシャーを放ち、サンシャインに当てよう

としていた。ところが。

サンシャイン「その攻撃、効かないよ」

なんと、バゴーンプレッシャーはサンシャインの手に捕まってしまった。そして、そのバゴーンプレッシャーを上に取り投げた後

サンシャイン「サンフラワー・イーゼス！」

向日葵型の光の盾をサンシャインの前に形成し、投げたバゴーンプレッシャーをイーゼスの押し出しでサゴーズ擬きに向かって打ち込んだ。バゴーンプレッシャーを投げ返されてダメージを受けたサゴーズ擬き。今度は、一度跳躍し象の足と化した両足で、サンシャインを地割れで捕縛する。そして、地割れに囚われたサンシャインはサゴーズ擬きに引き寄せられた。

ポプリ「サンシャイン。危ないでしゅ！」

サンシャイン「大丈夫よポプリ」

サンシャインは危機的状态にも関わらず余裕を見せていた、何故なら。

サンシャイン「至近距離では攻撃を避けられませんよ、サンフラワー・イーゼス！」

至近距離でバリアを張るサンシャイン。そして

サンシャイン「サンシャイン・インパクト！」

何と至近距離からのレーザーを放ったのだ。動きの鈍いサゴーズ擬

きには避ける事が出来ない攻撃である。そして、サゴーズの周りに大爆発が起こる。そして爆発から生き残ったサンシャイン

ポプリ「サンシャイン、大丈夫でしゅか！」

サンシャイン「ポプリ、大丈夫だよ。心配して。シルバーのココロの種のおかげで助かったから」

ポプリ「よかったでしゅ」

サンシャインの意外な戦法でサゴーズ擬きを打ち破った。

VS プトティラ

ムーンライトはプトティラ擬きと対峙していた

ムーンライト「紫は最も強い敵のようね。私に相応しい相手ね」

ムーンライトはプトティラの動きを見ていた。するとプトティラ擬きは頭のプテラの翼から冷気が放ち、ムーンライトを襲った。ところ

ムーンライト「甘いわよ」

冷気攻撃を飛び越し、プトティラに向かって攻撃を仕掛けた。しかし、今度は肩のワイルドステインガーがムーンライトを襲う。そしてトリケラの角に当たり、地面落とされるがムーンライトはワイルドステインガーをかすったくらいですんだ。

ムーンライト「かすったわね。でも飛ばして落とすと言う戦法は悪

くないわ」

そして、ムーンライトはプトティラ擬きに視線を向けた。すると、再度ワイルドステインガーがムーンライトを襲う。

ムーンライト「同じ手は通じないわ。ムーンライト・リフレクション！」

すると、ムーンライトの手には二つの銀の円盤が精製された。その円盤をワイルドステインガーの前に立った。すると、角ははじかれ、その隙にムーンライトは角を掴む。そして

ムーンライト「吹き飛ばしなさい！」

角を掴んだ状態でプトティラ擬きを上空へ投げ飛ばす。しかし、プトティラはティラノの尻尾を連想するテイルディバイダーで反撃する。

ムーンライト「尻尾攻撃！って、キャアアアアア！」

そして、尻尾の叩き付けでダメージを受けるムーンライト

ムーンライト「少しは舐めてたかもしれないわ。でも、二度も攻撃は効かないわ」

そして、間髪いれず、尻尾を振りまわすプトティラ擬き。しかし、なぎ払い攻撃は、さっきのリフレクションに触れたせいで、スピニングしてふらついた。

ムーンライト「言ったでしょ。同じ手は効かないから」

スピンされて動かないプトティラ擬き。その隙をムーンライトは見逃さなかった。

ムーンライト「行くわよ！私の新技！」

するとムーンライトは高く跳躍し、右足に銀色の光が集まる。そして、

ムーンライト「受けなさい！ムーンライト・クレセントクラッシュ！」

三日月の軌道を描いた銀色の光を纏った踵落としてプトティラ擬きの頭に当てた。そのあまりの破壊力にプトティラ擬きは地面に叩きつけられて動けなくなった。

ムーンライト「どうかしら、私の必殺技」

ムーンライトはプトティラを打ち破った

プトティラ擬きを倒したムーンライトの前にブロッサム達も合流した。

ブロッサム「ムーンライト、大丈夫ですか？」

ムーンライト「大丈夫よ。それよりブラック達が心配ね。急ぎましょ」

ブラック達の下へ来たブロッサム達だが、彼女が見たのはブラック

達が何者かにやられた光景だった。

ブロッサム「皆さん、どうしたんですか」

ブロッサムは倒れたブラック達に話しかけた。すると

ブラック「油断した、まさかタトバ擬きがいるなんて」

ブロッサム「タトバ擬き・・・まさか、もう一体いるなんて・・・」

愕然とするブロッサムの背後に恐ろしい敵が

マリン「ブロッサム！後ろ！」

ブロッサム「えっ？」

ブロッサムの背後にタトバ擬き・・・とは違う敵が、ブロッサムを捕まえ、何と

ブロッサム「イヤ～～目が回る～」

回転して振り回し、そして

ブロッサム「キャアアアアア！」

タワーブリッジを決められ、投げ飛ばされる。意外な攻撃にやられたブロッサム、それを駆け寄るマリンとサンシャイン

マリン「ブロッサム、どうしたの？」

サンシャイン「誰にやられたのですか？」

ブロッサム「腕がパンダのタトバ擬きに」

マリン「腕がパンダ！？どういう意味なの？」

呆けるマリンを尻目に今度は、パンダとは違うタトバ擬きがマリン達を襲う

サンシャイン「うわああああ！」

マリン「何でカンガルーがいるのよ——！」

そう、マリン達はカンガルーにやられたのだ。

ムーンライト「何が起きたの・・・」

ムーンライトが見たのは、腕かカンガルーのタトバ擬きだった。しかも、倒したはずのガタキリバ、ラトラーター、サゴーズ、タジャドル、シャウタ、プトティラ、ブラカワニが再び現れた。絶体絶命の事態にどうなる？

戦闘前編その2 M H組 & a m p・H C組（後書き）

ムーンライト「まさに大ピンチ。どうすれば・・・」

???「次回は私が登場するから安心して。ただし、登場は意外だぞ」

戦闘中編 M H組 & a m p・H C組（前書き）

嶋さんのプリキュア。顔見せ登場です。そして、もう一人のキーマン登場。

戦闘中編 M H組 & a m p・H C組

タトバ擬きの襲撃を受け、ムーンライト以外のプリキュアは倒されてしまった。8体もいるオーズ擬きを相手にどうするのか。

ムーンライト「相手は八体。勝てるのかしら」

ムーンライトが八体のオーズ擬きに対峙しようとしている頃、ムーンライトが戦っている場所の近くでは、二人の少女がある人物を探していた。

???「アイ、何か感じない？」

アイ「どうしたの、マコト？」

アイとマコトと名乗る二人の少女。彼女達がなぜここにいるのかと言つと

マコト「どこかでママ達の気配を感じるんだ」

アイ「えっ、じゃあこの世界の何処かにママ達がいるの？」

マコト「いるよ。だって、リンクルンが反応しているよ。きっとこの近くに居るんだ」

アイ「じゃあ、早く会わないと」

アイとマコトがそのママに会おうと行動するが、その時

???「見かけないプリキュアね」

藍色のライダースーツの美女がアイとマコトに声をかけた。

アイ「えっ、私達がプリキュア？」

マコト「何で判るのですか？」

アイとマコトの質問に答える藍色の美女

???「私のタリスマンに反応しているからよ。プリキュア同士が会う時、互いの変身アイテムが共鳴するの」

アイ「アイテムの共鳴、そう言えば昔、ママ達が新しいプリキュアに出会う時にアイテムが共鳴したって」

マコト「そうなの、おばさん？」

何気ない言葉に傷つく藍色の美女

???「うぐっ！し、失礼な事言わないで。私は20歳よ。おばさんと呼ぶには10年早いわよ」

ひどい事を言われてしまった事に気づいたマコトは慌てて美女に謝った

マコト「ごめんなさい。何かひどい事を言っ

???「悪気がないならいいわ。それより貴方達、名前を教えてくださいませんかしら」

藍色の美女が二人の名前を聞こうとし、その二人は答えた

アイ「アタシは桃園アイです」

マコト「私は桃園マコト」

二人の返答を聞いた藍色の美女も自身の名を名乗った

勇奈「私は勇奈、星川勇奈よ。よろしくね」

マコト「星川勇奈か」

アイ「美人ね」

勇奈「ありがとう、それより貴方達は貴方のママを探しているよね」

アイ「そうなの、ある事件で次元に巻き込まれて、気が付いたら見知らぬ世界に居たの」

マコト「でも、リンクルンが反応するの。この世界にママがいると思っ

て、貴方達のママはすぐに会えるわ」

アイ「えっ、本当なの？」

マコト「根拠、ありますか？」

勇奈「あるわ。私にも感じるの。貴方達のママの光が」

マコト「どこで会えますか？」

勇奈「場所は星海駅の広場の近くの公園よ。その時に会えるわ」

アイ「ありがとうございます。教えてくれて」

勇奈「当然よ。仲間なんだから」

勇奈に母親の事を教えられたアイとマコトはその公園へ向かった。ある出会いを待つことを知らず・・・

勇奈「桃園か。彼女に娘がいたのだろうか？」

二人の少女が勇奈という美女に会った頃、ムーンライトはと言うと

ムーンライト「まずいわね。流石に八体はきついわ」

ムーンライトは八体のオーズ擬きに苦戦をしていた。

ムーンライト「ガタキリバの分身、ラトラーターの高速移動、サゴ
ーゾの重力操作、タジャドルの空戦能力にシャウタの液化化にブラ
カワニの再生、そして、最も強力なプトティラ。これだけあってわ
私も負けるわ」

息が上がるムーンライト。動けないところをオーズ擬きの攻撃は容
赦なく襲う。

ムーンライト「くっ！このままでは」

ムーンライトはガタキリバの放電、ラトラーターの熱戦、サゴ
ーゾの衝撃波、タジャドルの羽手裏剣、シャウタの水流、プトティラの
冷氣、ブラカワニのコブラ攻撃が容赦なく襲い

ムーンライト「キャアアアアア！」

オーズ擬きの一斉攻撃によって動けなくなるムーンライト。動けな
くなったムーンライトを見て妖精たちは

シプレ「そんな、ムーンライトが」

コフレ「ここまでやられるなんて」

ポプリ「信じられないでしゅ」

愕然とする妖精たちを尻目にオーズ擬きは無慈悲にも必殺技の体勢
に入った。そして、必殺技がムーンライトに当たる直前、ムーンラ
イトの目の前には黒衣の衣装を纏った片翼の戦士が現れ、オーズ擬

きを全て吹き飛ばした。それを見た妖精達は

シプレ「嘘ですっ!」

コフレ「どうして・・・」

ポプリ「ダークプリキュアが出たでしゅか?」

そう、ムーンライトの前にはダークプリキュアが現れたのだ。ダークプリキュアの登場に驚くムーンライト

ムーンライト「ダークプリキュア。貴方が何故ここに? 貴方はお父さんの腕の中で消えたはずなのに?」

ダークプリキュア? 「そう言うのも仕方ないわ。貴方の言うダークプリキュアは消えて言ったわ。でも、意思は残ってるわ」

ムーンライト「どういう意味なの?」

そういうとダークプリキュアは赤い衣装の戦士に変身した

ムーンライト「見たことがないプリキュアね。何者かしら?」

ムーンライトの質問に対し赤い衣装の戦士は答える

??? 「私か。私の名は・・・変革をもたらす自由の海賊! キュアパイレーツ!」

ムーンライト「キュア・・・パイレーツ」

絶体絶命のムーンライトを救ったのはキュアパイレーツと名乗るプリキュアだった。いよいよ反撃の時が始まる。

そして、もう一つ、戦いの裏で出会った二人のプリキュアもまた、戦いに巻き込まれる事になる。

戦闘中編 M H組 & a m p・H C組（後書き）

パイレーツ「次回、反撃開始よ」

戦闘後編その1 M H組 & a m p・H C組（前書き）

プリキュア、反撃開始。パイレーツ、圧倒的ナリ

戦闘後編その1 M H組 & a m p ; H C組

絶体絶命のムーンライトを救ったのはキュアパイレーツと言うプリキュアだった。ついに反撃が始まる。

ムーンライト「驚いたわね。まさか、ダークプリキュアの姿で現れるなんて。どうやって出来たの？」

ムーンライトの質問に答えるパイレーツ

パイレーツ「これのおかげよ」

パイレーツは鍵に似た物をムーンライトに見せた。そのデザインはダークプリキュアの姿をしていた。

ムーンライト「変わった鍵ね。何かしらこれは？」

パイレーツ「これはプリキュアキーと言って、伝説の戦士の記憶と力を秘めた鍵よ。そして」

パイレーツは右手に携帯電話のような物を出し、ベルトのバックルに緑の鍵を出し、これを差し込む

パイレーツ「これを差し込むことで私はあらゆるプリキュアになれるの。それを見せるわ。プリキュアチェンジ！」

電子音『キュ〜アハープ』

パイレーツは緑のプリキュア、キュアハープに変身した。それを見た妖精達は

シプレ「姿が変わったですっ!」

コフレ「見たことがないプリキュアですっ!」

ポプリ「これは何でしゅか?！」

要請の質問に対しハーブは

Pハーブ「これは別の世界に存在するプリキュアよ。この世界には存在しないの。そして、このプリキュアは植物の力を操るの。見てなさい」

そういうとハーブは倒れたブラック達に緑の光の風を浴びせる。すると、ブラック達の傷が治っていく。

ムーンライト「これは一体?」

Pハーブ「これは治癒効果を持った薬草を帯びた風、プリキュア・ヒールウィンドといって、プリキュア達の傷を治すの、ムーンライト。貴方も浴びなさい」

ムーンライト「解かったわ」

ムーンライトもヒールウィンドを浴び、自身の傷を治した。しかし、ガタキリバ擬きは治療をしているブラック達を数の暴力を持って襲おうとするが

Pハーブ「空気を読みなさい!ローズソーン・クラッシュュ!」

するとガタキリバ擬きの足元に薔薇が生えていき、ダメージを与え、ガタキリバ擬きは薔薇の蔓で動けなくなってしまう。

Pハーブ「でないとこう言う目に遭うわよ」

すると、ハーブは薔薇の鞭を手にし、ガタキリバ擬きを分身ごと縛り上げた

Pハーブ「十六夜百花繚乱！」

そして、締め付けられたガタキリバ擬きの分身は消え、本体も大ダメージを受けて動けなくなった。ガタキリバ擬きが倒れたのを見て今度はラトラーター擬きがハーブを襲う。

Pハーブ「今度は黄色か。プリキュアチェンジ！」

電子音『キュ〜アガーネット』

今度は赤いプリキュア、キュアガーネットに変身した。高速移動でガーネットを襲うが

Pガーネット「止まりなさい！」

念動力で動きが鈍くなってしまいうラトラーター擬き。そこでガーネットは頭の三日月の飾りを武器にし、エネルギーを込めた。

Pガーネット「プリキュア・ガーネットクロウ！」

エネルギーを込めたブーメランがラトラーター擬きを襲い、見るまでもなく切り刻まれ。動けなくなるラトラーター擬き、さらに

Pガーネット「これはおまけよ」

ブーメランで切りつけ、ラトラーターを動けなくした。そこにサゴーズ擬きのパンチがガーネットの背後を襲うが、慌てず銀色のキーを差し込んだ

P ガーネット「プリキュアチェンジ！」

電子音『キュ〜アメタル』

ガーネットは銀色のプリキュア、キュアメタルに変身した。そして、サゴーズの鉄拳を無効化した。

P メタル「残念だけど、鋼の力を持った私には通用しないぞ」

メタルの言葉を聞き、今度は頭突きで攻撃をするが、やはり効かなかった

P メタル「もう終わり？ならこっちから行くよ」

メタルは連続攻撃でサゴーズを圧倒した。そして

P メタル「吹き飛びなさい。フルメタルバースト！」

鋼の豪拳でサゴーズを吹き飛ばした。しかし、今度は液化化したシャウタ擬きがメタルを襲う。液化化したシャウタに苦戦するメタル。

P メタル「水そのものになって襲うのか。ならば、動けなくしてやる」

今度は青い鍵を差し込んだ

P メタル「プリキュアチェンジ！」

電子音「キュ〜アブリーズ」

今度は青いプリキュア、キュアブリーズに変身した。そして、冷氣

弾でシャウタの液化化を無効化した。しかし、今度は足を八本足にしてブリーズを襲うが。

Pブリーズ「そんな足、裁いて刺身にしてやるわ。フリーズエッジ！」

ブリーズの手に氷の短剣を形成し、八本足に対抗した。そして、ブリーズの攻撃でタコの足は切り刻まれる。そこを

Pブリーズ「止めよ！ブリザーディングインパクト！」

冰山状の爆弾を受け、動けなくなったシャウタ擬き。そして

Pブリーズ「爆ぜなさい！」

ブリーズの掛け声と同時に爆発が起こり、シャウタ擬きを動けなくした。だが、今度は空中からタジャドル擬きの火炎弾爆撃がブリーズを襲う。

Pブリーズ「火炎攻撃か。ならこいつで対抗よ！プリキュアチェンジ！」

電子音『キュアアフレイム』

今度は赤い衣装を纏い、右手にメダルキュアアを装着したプリキュア、キュアフレイムに変身した。フレイムは赤い翼を展開し、タジャドル擬きに空中戦に挑む。

Pフレイム「はあああああああ！」

激しい空中戦で激闘を繰り広げるフレイム。しかし、タジャドルの

隙を見つけたフレイムは回し蹴りでタジャドル擬きを地面に叩き落とした。そこに火炎弾がタジャドルの頭上に降り注ぐ。

Pフレイム「これだけの火炎弾。避けられるなら避けてみなさい！」

タジャドル擬きは大量の火炎弾に降り注がれて動かないかに見えた。しかし、羽手裏剣で火炎弾をほとんど打ち落とされた。

Pフレイム「やるようね。けどこれだけの火炎弾、打ち落とせるのかしら？」

するとフレイムは左手のスキャナーでメダルキュアーをスキャンした。

Pフレイム「行くわよ！プリキュア・フレイムレイン！」

すると、頭上からさっきの倍はある火炎弾が降り注いだ。タジャドル擬きは再び、打ち落とそうとするが、数が多すぎて打ち落とせず命中してしまい動かなくなってしまった。

ムーンライト「圧倒的すぎる。たった一人で5体の怪人を倒すとは・・・」

ムーンライトはフレイムの戦いに驚きを隠せなかった。そしてフレイムは地上に降り、パイレーツの姿に戻った。

パイレーツ「そう、これが私の戦い方よ。それとやりたい事があるわ。貴方達、そろそろ起きなさい！」

パイレーツが声をかけると、ブラック達は目を覚ました。目を覚ま

したブラックは見知らぬプリキュアを見て驚く。

ブラック「なっ、何なのよあんたは！」

パイレーツ「落ち着きなさい。私は味方よ」

ブロッサム「味方ですか？」

パイレーツ「そうよ。貴方達を助けに来たのよ」

ルミナス「私達を助けに？信用できるのでしょうか？」

ルミナスの疑問をムーンライトは答えた

ムーンライト「信用できるわ。彼女は私達を助けたから」

ルミナス「そうなんですか。分かりました。信じてみます」

パイレーツ「それでいいわ。オーズ擬きは後三体残っている。ここからは協力して戦いましょう」

八体のオーズ擬きのうち五体を倒したパイレーツ。今度は回復したブラック達と共に残る三対のオーズ擬きに挑む。

戦闘後編その1 M H組 & a m p・H C組（後書き）

次回、オーズ擬きに決着の時！

戦闘後編その2 M H組 & a m p・H C組(前書き)

最強の相手、プトティラ擬きとブラカワニ擬き、第二ラウンドです。

戦闘後編その2 M H組 & a m p ; H C組

パイレーツの活躍によって八体のオーズ擬きの内、五体を戦闘不能にした。残すは、ブラカワニ擬き、プトティラ擬き、タトバ擬きの三対のみ。戦線復帰したブラック達と共に戦いに挑む。

パイレーツ「残すは三体、皆戦える？」

ブロッサム「大丈夫です」

ブラック「あんたのおかげでたっぷり休んだし、今までの分、返してもらおうよ」

パイレーツ「気合入っているようね。じゃあ、行くわよ」

パイレーツたちはオーズ擬きに戦いを挑むが、最初にプトティラとブラカワニが立ち塞がる。

パイレーツ「盾と矛が相手か。誰が行く」

ムーンライト「パイレーツ、プトティラは私達が何とかするから、ブラカワニの方をお願いできないかしら」

パイレーツ「解かったわ」

ルミナス「ブラカワニは私が一度戦っていますが、油断は出来ません。ブラックにホワイト、協力しませんか」

ブラック「当然よ」

ホワイト「今度は私達のチームワーク、見せてやりましょう！」

ブロッサム「ブラカワニはブラック達とパイレーツが行くようです。私達はムーンライトに加勢しましょう」

マリン「ムーンライトだけでは危ないし」

サンシャイン「そうですね。プトティラはかなりの強敵、フォローに入りましょう」

マックスハート組とパイレーツはブラカワニ、ハートキャッチ組は
プトティラと対峙する

vs プトティラ

ムーンライト「一度戦ったとは言え、油断は出来ないわ。慎重に行かないと」

ブロッサム「ムーンライト、大丈夫です！」

マリン「今度はアタシ達がフォローに入るから」

サンシャイン「だから、思いっきり戦ってください」

ムーンライト「解かったわ」

そういうとムーンライトはプトティラ擬きに再び戦うが、近寄る寸前にプトティラ擬きはメダカブリューを振り下ろすが

マリン「ムーンライトには当てさせないよ！マリンシュート！」

マリンの水の弾丸がメダカブリューに当たり、勢いが弱まる。その隙にムーンライトの手に銀色の光が集まる。

ムーンライト「隙だらけよ！ムーンライトインパクト！」

ムーンライトの掌から銀色の光が輝き、プトティラ擬きに当てさせ吹き飛ばす。そこへサンシャインが両手を構え、そこから光の奔流を放つ

サンシャイン「逃がしません！サンシャインフラッシュ！」

空中で光の奔流に命中されたプトティラ擬き。そこへブロッサムとマリンが追撃をかける

ブロッサム「逃がしません！」

マリン「そう簡単にはいかないよ！」

ブロッサムとマリンは同時に跳躍した後、同時攻撃を仕掛ける

ブロッサム・マリン「プリキュア・ダブルインパクト！」

強烈なコブシを当てたプトティラ擬きは地面に落とされようとしていた。そして、地面に落ちようとしているとき。

ムーンライト「簡単には終わらせないわ」

するとムーンライトの左手に銀の光が集まっていた。そして、地面に落ちるプトティラに攻撃を仕掛ける

ムーンライト「喰らいなさい！ムーンライト・クレセントスラッシュ！」

そして、銀の光を帯びた手刀を当てられ、ダウンされた。しかし、ただではやられるわけには行かず、立ち上がり、今度はメダガブリューを大砲形態にして、ブロッサム達を消し去ろうとしていた。

シブレ「強烈なエネルギーが感じますっ！」

コフレ「当たったら、ひとたまりもないですっ！」

強烈なエネルギーを感じ、不安を抱く妖精達。しかし、

ムーンライト「心配はないわ、サンシャイン」
サンシャイン「解ってます」

ムーンライトの言葉を聞いたサンシャインはサンフラワー・イージスを張り、ムーンライトはムーンライト・リフレクションを張る。

マリ「二重のバリアを張れば大丈夫だね」

ブロッサム「そうとは限りません。念には念を入れましょう。シプレ、ココロの種を」

シプレ「はいですっ！」

マリ「コフレ、アタシにもお願いね！」

コフレ「解かったですっ！」

ブロッサムとマリはココロの種を受け取り、ココロパフォームに装填して、光の香水をかけようとした。そこでブロッサムは

ブロッサム「どうせなら、異なる効果の香水かけてはどうでしょうか。ここはオレンジとシルバーの種を同時にやってみましょう」

マリ「重ね掛けね。やってみるっしゅ！」

すると、ブロッサムはオレンジの香水をマリはシルバーの香水を全員にかけた

ブロッサム「オレンジの光の聖なるパフューム！ シュシュツと気分でパワーアップ！」

マリ「シルバーの光の聖なるパフューム！ シュシュツと気分でデیفエンスアップ！」

異なる効果の香水をかけたブロッサム達。すると、衣装はオレンジと銀色を交互に光っていた。

ポプリ「ブロッサムとマリリンが香水をかけたから、大丈夫でしゅよ」
サンシャイン「ブロッサム、マリリンありがとう」

ムーンライト「有効に使わせてもらっわ」

そして、プトティラ擬きの光の光波がブロッサム達を襲うが、バリ
アに塞がれた。そして、その光波は跳ね返された。さらに、ブロッ
サムとマリリンは二つのタクトを出し、必殺技を放つ。

ブロッサム「花よ輝け！プリキュア・ピンクフォルテウェイブ！」
マリリン「花よ煌け！プリキュア・ブルーフォルテウェイブ！」

二つの花の形をしたエネルギー弾が跳ね返された光波と共にプトテ
ィラ擬きに命中し、プトティラ擬きを戦闘不能にした。

ムーンライト「ココロの種の香水をこういう風に使うなんてやるわ
ね」

ブロッサム「そんなはずはありませんよ。たまたま閃いただけです
から」

プトティラ擬きを倒したブロッサム達

vsブラカワニ

一方のマックスハート組は、コブラ攻撃に悩まされていた。

ブラック「あの蛇、しつこすぎよー！」

ホワイ「あれがあつてはルミナスのハーティエルファングが放て

ないわ。展開中は無防備になるし」

ルミナス「ですが、ファングは防御の固い相手には有効な技です。何か隙があれば」

ブラック達が不安を言う中、パイレーツは白い鍵を手にある事を言う

パイレーツ「なら、ここは私に任せなさい。プリキュアチェンジ！」
電子音「キュ〜アヴィーナス」

パイレーツはオカリナを装備したプリキュア、キュアヴィーナスに変身した

Pヴィーナス「蛇にはこれが有効よ」

するとヴィーナスはホーリーカーナを吹き、蛇に聞かせた。すると、蛇はヴィーナスの支配下に落ちた。そして、ヴィーナスは蛇に攻撃をかける

Pヴィーナス「ブラカワニを足止めしなさい！」

そして、蛇はブラカワニ擬きを襲い、ブラカワニ擬きを動けなくした。

Pヴィーナス「今よルミナス！」
ルミナス「解かりました！」

ブラカワニを動けなくなった隙に、ルミナスはハーティエルファングの発射準備に入った。

ルミナス「今度は、さっきの倍です！ハーティエルファング。一斉

発射！」

今度は12機のハーティエルファングを動けないブラカワ二に攻撃した。さつきより三倍に増えたファングによって削られるブラカワ二。

ルミナス「防御はかなり削りました！二人共頼みます！」

ホワイト「解かったわ！行くよブラック！」

ブラック「解っている！」

防御を削られたブラカワ二擬きにブラックとホワイトは同時に攻撃を仕掛ける。手の盾で防戦するが激しい攻撃の前にはついていけなかった

Pヴィーナス「流石はキュアブラックにキュアホワイト。体術ならまさに最強ね。なら私も手伝うか」

すると、ヴィーナスの手には青い鍵が握られていた

Pヴィーナス「プリキュアチェンジ！」

電子音「キュ〜アストライク」

ヴィーナスは青い格闘家に似たプリキュア、キュアストライクに変身した。意外なプリキュアに変身した事に驚くルミナス

ルミナス「嘘、こんなプリキュアに変身するなんて」

Pストライク「このプリキュアもまた別の世界に存在するプリキュアよ。ルミナス見ていなさい」

その頃、ブラック達はブラカワ二擬きと交戦していたがある事に気

づく

ホワイト「ブラック、何か変よ」

ブラック「どうしたのホワイト？」

ホワイト「何か、攻撃しているのに回復しているの」

ブラック「回復？まさか・・・」

ブラックが考えている所をブラカワニの膝蹴りが襲う

メップル「ブラック、危ないメポ！」

ブラック「えっ・・・しまった！」

ブラックが攻撃に当たるのを見てホワイトはブラックを守ろうとするが

ホワイト「駄目！間に合わない！」

予想よりはやい膝蹴りを前にホワイトは間に合わないかに見えた。
だが、そこに波動弾が当たり、ブラカワニ擬きは仰け反ってしまう。

ホワイト「今のは一体？」

ミップル「何が起きたミポ？」

ブラックを救ったのは、キュアストライクに変身したパイレーツだった。

Pストライク「ブラック、大丈夫」

ブラック「パイレーツ、この姿は一体？」

Pストライク「キュアストライク。ブラック達と同じ体術に優れたプリキュアよ」

ブラック「そういうプリキュアもいるんだ」

Pストライク「ブラック、話は後よ。今はブラカワニ擬きを退治するよ」

ブラック「うん」

ブラックとホワイトとストライクはブラカワニ擬きに攻撃を仕掛ける。そこで、ストライクは助言を言う。

Pストライク「ブラカワニは再生能力を持っている。こういう相手は再生が間に合わないくらいの攻撃を仕掛けるのが有効よ」

ホワイト「幾ら再生を持っても処理が追いつけなければ大丈夫って訳ね」

ブラック「つまり、いつもどおりやれって事かな？」

Pストライク「その通りよ。これは時間との勝負よ！行くわよ！」

ストライクの号令で攻撃を仕掛けるブラック達。体術に優れたプリキュアがいるだけあってダメージ効率がかなり上がった。そして絶え間ない攻撃によってブラカワニは再生に追いつけないほどのダメージを受けてしまう。

Pストライク「そろそろね。二人共決めなさい！」

ブラック「でも、その間に再生が起きたら・・・」

Pストライク「大丈夫。時間を稼ぐから」

ホワイト「ブラック、ここはパイレーツに任せましょ」

ブラック「解った、時間稼ぎお願いね」

Pストライク「解ったわ」

そして、ストライクは右足と左腕に波動の力を集めた

Pストライク「付き合ってもらおうよ。プリキュア・ストライク・グ

レネイド！」

そして、波動を纏った連続攻撃によって傷つけられるブラカワニ擬き。そして

Pストライク「頃合ね。今よ！ブラック、ホワイト！」

ストライクがいうと、ブラックとホワイトは手に光をまとって攻撃の準備に入っていた。

ブラック「二人の共同作業よ！行くよ、ホワイト！」

ホワイト「ええ！」

そして、ブラックとホワイトは瞬時に移動し、必殺攻撃を仕掛ける。

ブラック・ホワイト「プリキュア・マーブルブレイカー！」

黒と白の光を帯びた二つの拳がブラカワニ擬きを貫き、ブラカワニ擬きを戦闘不能にした

Pストライク「グッジョブよ。二人共いいコンビネーションだったよ」

ホワイト「そう？」

ブラック「ちょっと照れるわ」

ブラカワニを倒した所でルミナスとハートキャッチ組が合流した。

ルミナス「皆さん大丈夫ですか」

ブラック「ルミナス、大丈夫だよ」

ホワイト「ブロッサムのはうはどうなの？」

ブロッサム「こっちも大丈夫です。プティラ擬きを倒しましたので」

マリン「けど、やっぱり強いねムーンライト。最後はちゃんと決めちゃうんだから」

ムーンライト「いいえ、皆がいたから決められたのよ。マリン、貴方がいなければ、私はメダガブリューの攻撃を受けていたわ」

サンシャイン「そうですよ、マリンにブロッサム。今のは二人のフオローのおかげで勝ったんだから」

Pストライク「無駄口はそこまでよ。最後はタトバ擬きが相手よ。油断はしないで」

ストライクの視線にはタトバ擬きがいた。そんな中、ストライクはある事を言う。

Pストライク「ムーンライト、後、面白い物を見せるわ」

ストライクの手には銀色の鍵が握っていた

Pストライク「プリキュアチェンジ！」

電子音「キュ〜アナイト」

ストライクはキュアナイトに変身した。その姿は服に銀のラインが入り、ブーツを履いている以外はダークプリキュアに似ていた。

ムーンライト「これもダークプリキュアなの？」

Pナイト「少し似ているわ。これは別の世界のダークプリキュアが転生した姿よ」

ブロッサム「それじゃ、こっちの世界のダークプリキュアはムーン

ライトの妹として暮らしているのですか？」

Pナイト「そうよ。そっちには光の巨人の力を受けた仮面ライダーと別の世界の貴方達が闇の勢力と戦っているの」

マリン「別の世界のアタシ、何か気になるね」

サンシャイン「どんな風に暮らしているのかしら？」

Pナイト「無駄話はそこまです。最後の相手だから気合を入れなさい！」

最強の二人を退けたブラック達とブロッサム達、戦いは最終局面に入ろうとしていた。

戦闘後編その2 M H組 & a m p・H C組（後書き）

マリン「相手はタトバ擬き、楽勝じゃん」

ブロッサム「油断は駄目ですマリン。確か、劇場版のタトバは何か恐ろしい形態を持っていますから」

サンシャイン「もしかして、スーパーがでるのですか」

ムーンライト「可能性はあるわ」

次回、これで決まりだ

戦闘後編その3 M H組 & a m p・H C組（前書き）

M H組とH C組の戦いも決着です

戦闘後編その3 M H組 & a m p ; H C組

プトティラとブラカワニを倒し、残すはタトバ擬きのみ。そのタトバ擬きに対しブラック達は

ブラック「残すはタトバ擬きか」

ホワイ「相手は基本形態だけど油断はしないで」

ブラック「解ってるって」

Pナイト「でも皆油断はしないで」

ナイトの号令でタトバ擬きに攻撃をしている。それに対しタトバ擬きはメダル入りのメダジャリバーで斬り付けようとしていた。

ブラック「さつきは不意打ちでやられたけど」

ホワイ「同じ手は通用しないわ!」

オーズバッシュで斬り付けようとするが、ホワイは両手に光を集め、両手で剣を挟み込み、剣を取り上げる。そして、メダジャリバーはホワイの手に渡り、逆に

ホワイ「自分の技で自滅しなさい!」

オーズバッシュをタトバ擬きに当てさせ、ダメージを与えた。しかし、ただではやられはしない。今度は手をパンダに変えた。そのパンダにやられたブロッサムはブラックに声を掛ける。

ブロッサム「ブラック、気をつけてください!一度つかまったらまわされて背骨が折れるほどのダメージを受けます」
ブラック「解ったよ、捕まらなければいいんだね」

ブラックはタカパンバの攻撃を必至に避けるブラック。だが、タトバ擬きも負けてはいない。今度はタカパンガルになって、ブラックを襲う。カンガルーのフットワークによって追い詰められ、ついに捕まってしまう。

ブラック「しまった！？ってうわあああ、目が回る……」

回転して投げられたブラックは上に投げ飛ばされる。そして、タワ―ブリッジが決められるかと思ったその時

ブロッサム「そうは行きません！ブロッサム・フラワーストーム！」

ブロッサムの突進で必殺投げを阻止されたタカパンガル擬き、今度はタカガルバになってブロッサムを襲う。一方、投げ出されたブラックはホワイトにキャッチされ、無事で済んだ。

ホワイト「ブラック、大丈夫？」

ブラック「何とか、あゝあ、目眩がする……」

ルミナス「ブラック、目眩が治るまで大人しくしてください」

一方のブロッサムはタカガルバと交戦していた。

ブロッサム「あのパンチ、厄介ですね。マリンとサンシャインがやられてしまったんですから」

必至に避けるブロッサム。当たらない事にいらだったタカガルバは何とタマシーコンボに変身した。

ブロッサム「嘘！こんな形態で来るなんて」

意外な攻撃に戸惑うブロッサム。そこへ、マリン、サンシャイン、ムーンライト、ナイトが加勢する

マリン「まさか、タマシーコンボが来るなんて」

ムーンライト「中々強そうね」

サンシャイン「でも、何となく間抜けそうですね」

ナイト「サンシャイン、失礼な事言わないで。本人に聞こえたら怒り出すわ」

サンシャイン「そうですね」

そのサンシャインの何気ない言葉を聞いたせいで、タマシー擬きは怒りだし、突進してきた。突進を避けるブロッサム達

マリン「危なかった」

ブロッサム「当たれば大変な事になってましたね」

突進を避けたブロッサム達だが、今度はオレノツノを装備して襲ってきた。

サンシャイン「角を武器にするなんて」

ムーンライト「刺さると痛そうね」

角で攻撃するタマシー擬き。しかし、避けまくってしまい苛立ちまくっていた。その隙をナイトは見逃さなかった

Pナイト「隙だらけよ」

するとナイトはロッド型の武器、イリュージョンロッドで角を叩き落とした。角を落とされ、怒り出したタマシー擬きはとって置きの

技、魂ボンバーを放とうとしていた。その魂ボンバーを当てるその時
ルミナス「そうは行きません！」

ルミナスがバリアを張り、魂ボンバーを防いだ。そこを目眩から治
ったブラックが手に黒い光を纏い、魂ボンバーを当てた

ブラック「プリキュア・ブラックパンチ！」

黒い拳を当てた魂ボンバーはそのまま、タマシー擬きに当たり、ダ
メージを受けて動かなくなった。

マリン「うわ。こりゃ痛そう」

サンシャイン「これでもう動かないでしょうか」

ブロッサム「流石にもう立てないのですか」

ムーンライト「いいえ、まだ来るわ」

すると動かなくなったタマシー擬きは何とスーパータトバ擬きとな
って復活した

ブラック「まさかのスーパーなんてありえない」

ホワイト「でも、基本はあれと同じよ」

ルミナス「強化したなら、こっちも強化で対抗しよう」

ブロッサム「だったらココロの種で対抗しよう」

ブロッサムの提案に対しムーンライトは

ムーンライト「待つて、ここは私とパイレーツに任せてくれない」

マリン「いいけど、大丈夫？」

ムーンライト「大丈夫よ」

そう言うときムーンライトとパイレーツはスーパータバ擬きに戦いを挑む。スーパータバ擬きはトラクローの強化版のトラクローソリッドで攻撃するが避けられ、逆にムーンライトとナイトのコンビネーションに押されていく。

サンシャイン「すごいですね」

マリン「息がピッタリだね」

ブロッサム「もし、ダークプリキュアが改心して一緒に戦ったらこんな戦いが見れたかも知れませんか」

そういつている間にスーパータバ擬きはダメージを受けていた。しかし、ただでは終らせず、バツタレッグで跳躍し、スーパータバキックでムーンライトとナイトを襲おうとしていた。それに対し

Pナイト「こっちも決めるわ」

ムーンライト「ええ、同時に行きましょう」

そういうときムーンライトはムーンタクトを出し、ナイトはイリュージョンロッドを出し、必殺技を放つ

ムーンライト「花よ輝け！プリキュア・シルバーフォールテウェーブ！」

Pナイト「プリキュア・イリュージョンソニック！」

銀色の花のエネルギー弾と銀の衝撃波が融合し、銀の光が必殺キックを出すスーパータバ擬きを襲う。最初は激突するが、やがて銀色の光が押し出し、スーパータバ擬きに命中し、消滅した。それと同時にオース擬きは元のメダルと動物の写真に戻っていった。

ムーンライト「どうやら、もとに戻ったようね」

安心したブラック達とブロッサム達は敵が居なくなったのか、変身を解除した。

なぎさ「パイレーツ、ありがとう。あんたがいなかったらどうなっていたか」

パイレーツ「礼はいいわ」

つぼみ「いいえ、礼は言ってください。もし貴方がいなかったら私達全滅してましたから」

パイレーツ「気にしなくてもいいわ。プリキュアなら当たり前のことをしたのだから、それより貴方達に言いたいことがあるわ」
ほのか「何かしら？」

パイレーツ「貴方達は近いうちに400年前に消えた悪夢と戦う事になる」

つぼみ「400年前の悪夢、ですか？」

えりか「400年前って確か・・・」

いつき「サラマンダー男爵が封印し、初代プリキュア、キュアアンジェが活躍した時代でしたね」

ゆり「その悪夢、何か関係あるの？」

パイレーツ「ええ、あるわ。けど今は現れないけど、時がたてば現れるわ。その事は既に咲やのぞみ、ラブや響にも伝えたわ」

ひかり「えっ、貴方はすでに咲さんやのぞみさん、ラブさんや響さんに会ったんですか」

パイレーツ「勿論よ。既に会ったわ。私の言いたいことはそれだけよ」

そういうとパイレーツはなぎさ達とは反対方向へ立ち去ろうとするが

なぎさ「ねえ、パイレーツまた会えるの？」

パイレーツ「会えるわ。その時は他のプリキュアと一緒にする時に
出会うわ。後、貴方にはある娘と見たことがないプリキュアに会う
わ」

そうしてパイレーツは去った。しかし、ひかりは思索していた

ひかり「何か気になりますね」

ほのか「ひかり、どうしたの？」

ひかり「パイレーツの最後の言葉が気になるんです」

なぎさ「なにが気になるの？」

ひかり「ある娘と見たことがないプリキュアの事なんです、一体
どう言う意味何でしょうか？」

ほのか「もしかして、パイレーツ以外にもプリキュアがいるのかし
ら？」

なぎさ「えっ、まさかアタシ達以外のプリキュアがいるの？」

ひかり「多分そうだと思います」

なぎさ「パイレーツ以外のプリキュアか・・・何か気になるね」

思索するなぎさをみて、つぼみはなぎさに声を掛ける。

つぼみ「あの、なぎささん。考えるのもいいですけど、咲さんやの
ぞみさん、ラブさんに響さんが気になります」

えりか「多分、無事だといいいけど」

いつき「そうですね。何もおきなればいいけど」

ゆり「他の皆も気になるし、皆集合場所の広場へ行きましょう。後
のことはそれから考えましょ」

つぼみ「そうですね。後は警察に任せましょ」

なぎさ「じゃあ、はやく合流しないと」

オーズ擬きの戦いを制したなぎさとつぼみ達は集合場所の広場へ向

かった。これが、今回の戦いの始まりになる事を知らず・・・

戦闘後編その3 M H組 & a m p・H C組（後書き）

次回、全員集合！

プリキュア全員集合（前書き）

全員集合の話です。最後に重要キャラがでます。

プリキュア全員集合

それぞれの戦いを終らせたプリキュア達は集合場所であるスターオーシャンミュージアムの近くの広場へやってきた。その集合場所に最初にやってきたのはフレッシュ組とスイート組だった。

ラブ「まだ、誰も来ていないみたいだね」

響「皆の身に何かあったのかしら？」

不安を抱く響だが、その時奏は上空で何かを見つけた

奏「あれ、シロップじゃない？」

美希「本当ね。どうやらのぞみ達と咲達が来たようね」

そう、奏がみたのはシロップだった。そのシロップの背中の席には5GOGO組とSS組が乗っていた。そのシロップから降りるのぞみ達と咲達はラブ達と響達の無事を見て安心した。

のぞみ「あつ、ラブちゃんに響ちゃんだ」

咲「どうやら無事だったね」

ラブ「のぞみちゃんに咲ちゃんも無事だったんだ。よかった」

響「何かあったかと思って心配したよ」

かれん「ラブ達と響達が無事ならなぎさ達とつばみ達はどうかしら？」

舞「何かトラブルでもあったのかな？」

舞が心配している所をちょうどMH組とHC組が集合場所へやってきた。

つぼみ「あつ、のぞみさんに咲さん無事だったんですね」

なぎさ「ちょうどラブに響も来ている様ね」

咲「どうやら皆来たみたい」

のぞみ「なぎささんにつぼみちゃんも今来たんだ」

ラブ「全員集まったね」

響「ええ、皆無事ね」

かくしてプリキュア達は全員集合した。そして

えりか「皆、何かトラブル遭ったの？」

ほのか「そうなの、この様子だと何か遭った見たいね。皆、その事を話してくれない」

響「わかったよ」

まず、フレッシュ組とスイート組は商店街にてフォーゼ擬きのことを話した

なぎさ「フォーゼ擬きに襲われた？」

せつな「ええ、ちょうどエレンと一緒に買い物をしているときに玩具売り場からフォーゼ擬きが現れたの」

タルト「そんな時は危なかったわ。いきなり飛び出てきたんやから」

エレン「その後、フォーゼ擬きは外に出たの。そこでちょうど響達と合流して戦ったの」

つぼみ「そのフォーゼ擬きと戦っている時はどんな風になっていたのですか？」

祈里「パラボラアンテナから光線を奏ちゃんと一緒に浴びせられたの」

奏「祈里は大量のミサイル。私はロケットの突進に悩まされていたの」

美希「後、煙幕を使って私達を混乱している隙にタルトやハミィ、

シフォンが拉致されたの」

ハミィ「その時はこわかったニヤ。危うく食肉が三味線の皮にされるところだったニヤ」

ラブ「せつなのアカルンを使った救出作戦を敢行したけど、作戦が見破られて、タルト達が危ない目に遭うその時。キュアパイレーツが助けに来たの」

響「すごかったわ。あらゆるプリキュアに変身して戦ったんだ」

のぞみ「パイレーツか。わたしも助けられたよ」

ラブ「のぞみちゃんも会ったの？」

響「その事話して」

のぞみ「いいよ」

今度は5 G O G O組とS S組がゴーカイオー擬きのことを話した

ほのか「こっちはゴーカイオー擬きに襲われたの？」

えりか「あんなデカブツに遭遇してよく無事だったね」

くるみ「ええ、ほんとんでもない事やりまくったわ」

舞「街中で光線を撃ちまくって大変な事態になっていたわ」

奏「とんでもないね」

こまち「その時は街中で暴れるのはまずいと思って、シロップに乗って海岸におびき寄せたの」

シロップ「その時は怖かったロプ。ドラゴンと合体して火球を俺に当てようとしてたロプ」

ナッツ「でも、こまちと咲と舞のおかげで何とかなったナツ」

美希「この後は？」

咲「撃ち落したと思ったらフォーミュラーカーに換装して暴れたけど、くるみが阻止してやって、あとのぞみがフォーミュラーカーを壊したの」

のぞみ「でも、こんどはライオンに変えて爪にやられたの。その時は背中にひどい傷が出来ちゃったの」

りん「それだけじゃないよ。助けようとしたら私とかれんさんはパトカー、うららとこまちは忍者、咲と舞は恐竜に足止めされて分断大ピンチだったわ」

うらら「でも、丁度いいところにパイレーツが助けに来ました。おかげで助かったんです」

ココ「けど、その後はきつかったココ。ライオンを倒したらシンケン、シンケンを倒したらカンゼンになって襲ってきたココ。流石にカンゼンはきついココ」

かれん「でも、そうならなかったの。パイレーツがまさかダークプリキュア5を召喚したの」

咲「それだけじゃないの。まさか満さんと薫さん呼び出すなんて驚いたよ」

のぞみ「それのおかげで私達はゴーカイオー擬きを倒したの。個人的にはまさかダークドリームが出たことに驚いちゃったの」

つぼみ「パイレーツってすごいですね」

なぎさ「私もパイレーツには驚いたの。後はあたし達の番ね」

最後にMH組とHC組がオーズ擬きのことを話した

うらら「そちらはオーズ擬きに襲われたんですか？」

祈里「しかも七体も現れるなんて・・・」

つぼみ「そうなんです。水族館に通じる通りで遭遇しました」

なぎさ「あいつらは一対一で戦ったの。あたしはタジャドル擬きの空中戦に悩まされたわ」

ほのか「私はシャウタね。攻撃がタコ足のせいで仰け反らず、逆に鞭攻撃に晒されたわ」

ひかり「私はブラカワニです。あの防御は厄介でした。ですが必殺技で何とかしました」

つぼみ「私はガタキリバです。高いジャンプ力に分身攻撃。ココロの種がなければ危なかったです」

えりか「アタシはラトラーターね。あの速さは異常だったよ。目くらましにやられるし、あやうく額に火傷う所だったよ」

いつき「僕はサゴーズです。パワーもそうですが、あの頭突きは痛かったです」

ゆり「私はプティラね。一番強かったわ。パワーもスピードも桁違いだったわ」

エレン「でも、皆倒したし大丈夫だったよね」

シブレ「とんでもないですっ！ここでタトバ擬きが出て大変な事になったですっ！」

コフレ「なぎさ達はオースバツシュにやられて、えりか達はカンガルーのパンチ、つぼみは回転投げ後のタワーブリッジにやられたですっ！」

りん「うわっ、なんてえぐい攻撃なの・・・」

せつな「基本とはいえなめ過ぎたわね・・・」

ポプリ「そうなんدهしゅ。おかげでゆりさんは大ピンチだったんでしゅがまさかのダークプリキュアの登場に驚いたでしゅ」

ゆり「ええ、その時は生き返ったと思ってびっくりしたけど、まさかパイレーツが来てびっくりしたの。その後オース擬きを五体も倒したの」

なぎさ「本当すごかったわ。パイレーツの強さに」

つぼみ「いいコンビネーションも発揮しました。キュアナイトに変身し、共闘したとは息がピッタリでした。あのスーパータトバ擬きを見事瞬殺しましたから」

これによって、すべての話を聞いたプリキュア達だったがひかりはある事が気になっていました。

ひかり「パイレーツが別れを言う際にある事を言いました」

咲「それ、何なの？」

ひかり「ある娘と見た事がないプリキュアに会うと言ったんです」

響「見た事がないプリキュア？まさかパイレーツ以外に誰かいるの？」

ひかり「多分・・・」

のぞみ「気になるね。会って見たいなその人と」

つぼみ「そうですね。私も気になります」

なぎさ「あと、ある娘か・・・何の事だろうか？」

なぎさが思案しているその時

メップル「何か感じるメポ」

なぎさ「どうしたのメップル？」

メップル「近くに闇の気配を感じるメポ」

ほのか「闇の気配？まさか・・・」

ミップル「私も感じるミポ」

ひかり「まさか、新しい敵が出たの？」

ポルン「多分、そうポポ」

ルルン「急がないと大変な事になるルル」

咲「感じたのはどこなのか？」

フラッピ「星海駅の近くの公園ラピ」

舞「間に合うのか？」

チョッピ「走れば何とかなるチョピ」

のぞみ「急ごうよ皆。大変な事になる前に」

ゆり「事態は、一刻も争うわ。行きましよう」

かくして、なぎさ達は闇の気配を感じた星海駅の公園へ走った。その行く途中では

ラブ「何だろう。何故リンクルンが共鳴しているのかしら？」

その頃、星海駅の近くの公園では

「誰か助けて！」

ピンクの少女が無数猿みたいな怪物に襲われていた。

「何でこんな所に迄現れるの？」

逃げる少女の前に白い小動物が話しかけた。

「君はプリキュアの素質があるんだ。しかも最強の力を持っているんだ。その素質がある限り、君は逃げられないんだ」

「じゃあ、どうすればいいの？」

「僕と契約するんだ。そうすれば君は最強のプリキュアになれる。そして怪物を追い・・・」

小動物が少女に契約を結ぼうとしたその時

「その必要はないわ」

そこには濃い赤のショートの少女がピンクの少女の前に現れた。

「湊ちゃん！」

「また君か、本当にしつこいよ。僕はプリキュアになってほしいといっているだけなのに」

湊「黙りなさいヌール！貴方は美琴を利用して世界を破壊しようとしているようだけどそうはさせないわ」

ヌール「どうしてだよ。僕はただプリキュアの素質を持った子をほっとけないだけだよ」

湊「それが問題なのよ。美琴はただのプリキュアではないかも知れないのよ。もしかしたら世界を滅ぼす存在になるかも知れないのよ。混沌、虚無、野望、そして終焉の名を冠する者になる恐れがあるのに」

ヌール「しつこいよ。それより、このままでは君の大切な者が敵にやられるよ」

言い争いをしている中、猿の怪物が美琴を襲うその時、湊は携帯電話を出し、真紅の鍵を差し込んだ

湊「くっ、貴方の好きにはさせない！プリキュアチェンジ！」

公園に現れた謎の怪物と少女。そしてヌールと名乗る小動物と湊と名乗る少女の関係は。そしてあの戦いは、やがてプリキュア達を巻き込むことを知らない。

プリキュア全員集合（後書き）

勇奈「次回、私の出番が来るわ。後、アイとマコトも戦闘に参加よ！」

そして、美琴となのる少女。彼女こそ・・・

公園の戦い前編（前書き）

嶋さんのプリキュア参戦！

公園の戦い前編

猿の怪物に襲われる美琴を救うべく湊は携帯電話を出し、真紅の鍵を差込み、変身コードを唱える

湊「プリキュアチェンジ！」

電子音『キュ〜アパイレーツ』

携帯電話の光に包まれた湊に彼方からプリキュアのエンブレムの光が飛来する。マックスハートとスプラッシュスターのエンブレムの光が湊に通過するとインナーとスパッツが形成し、次にプリキュア5とフレッシュのエンブレムの光が通過すると、今度は赤いブーツと赤いアームカバーが形成し、ハートキャッチとスイートのエンブレムの光が通過すると赤いスカートと赤いジャケットが形成し、最後にハートのデザインのエンブレムの光が湊に通過すると髪が長髪になり、髪の色は真紅になる。そして湊の右目に眼帯が形成し、自身の周りの光を消しさった。そして湊は決め台詞を言う。

湊「変革をもたらす自由の海賊！キュアパイレーツ！」

大量の猿の怪物を前にパイレーツは決め台詞を言って猿の群れに突っ込む。

パイレーツ「派手に・・・言ってやるわ！」

そう言うパイレーツはカトラスとジャベリンを構え、猿の怪物と交戦する。猿の怪物はパイレーツを襲うが、逆に剣と槍の二刀攻撃に蹴散らされる。武器が使いにくい状況では拳や蹴りで猿の怪物を返り討ちにする。パイレーツの戦いぶりを見てヌールは

ヌール「戦闘猿、キングゴンを相手にここまでやるとはすごいね。でも、こいつはどうするのかな？」

ヌールの言つとおり、キングゴンは銃を構え、美琴を攻撃しようとするが・・・

パイレーツ「どいて！」

そういうとパイレーツはキュアリボルバーを構え発砲した。

キングゴン「キィ！」

リボルバーによって射殺されるキングゴン。射殺されるキングゴンを見てヌールは

ヌール「飛び道具で蹴散らすとはやるみたいだね。しかし、これはどうするのかな？」

すると地面からキングゴンが現れた。地中からの攻撃にさらされ危機を迎える美琴

美琴「嘘！どうして！？」

パイレーツ「しまった！地中からか！」

地中から出現したキングゴンの対応に遅れるパイレーツ。美琴の命が危機に晒されるその時

???「プリキュア・ラブハート！」

???「プリキュア・ハピネスハート！」

突如、ピンクと赤の光によって蹴散らされるキングゴン達。その光を放った人物を見て、パイレーツは驚く。

パイレーツ「キュアピーチにキュアパッション？いや違う。貴方達は何者なの？」

パイレーツの質問を聞いて二人の少女は名を名乗る。

アップル「勇気と愛のハート、キュアアップル」

チェリー「優しさと幸せのハート、キュアチェリー」

キュアアップル、キュアチェリーと名乗る二人のプリキュアの登場に驚くパイレーツ

パイレーツ「キュアアップルにキュアチェリー？貴方達、プリキュアなの？」

アップル「そうだよ」

チェリー「私もプリキュアなの。ママと同じプリキュアだよ」

チェリーの言葉を聞いてパイレーツはかしげる

パイレーツ（母がプリキュア？どういう意味なの？）

パイレーツが戸惑う中、アップルは声をかけた

アップル「どうしたの？」

パイレーツ「なんでもないわ。それより貴方達戦える？」

チェリー「大丈夫。戦えるよ」

パイレーツ「そうか、なら一緒に戦って。私では対処できないのが

いるの。お願いできる?」

パイレーツの申し出を聞いたアップルとチェリーは

アップル「解かった」

チェリー「一緒にやるよ」

パイレーツ「そうか、じゃあ行くわよ!」

アップルとチェリーは協力を了承した。これより反撃を開始したパイレーツはキングゴン達を蹴散らしていった。その中でパイレーツはアップル達の戦いぶりを見て、ある事に気づいた。

パイレーツ「あの戦いぶり、似ている。まさか、アップル達の母はまさか」

パイレーツが考え事をしている中、死角からキングゴンの攻撃が襲おうとしていた。

パイレーツ「しまった!」

パイレーツが不意打ちにやられるところをアップルがフォローに入る。

アップル「大丈夫、パイレーツ?」

パイレーツ「すまないわ。油断してしまっ」

チェリー「いいよ。お互い様だから」

アップルのフォローによって助けられたパイレーツ。しかし、周りにはキングゴンの群れに囲まれていた

アップル「敵、多いね」

チェリー「どうすんの？」

心配するアップルだが、パイレーツはある考えがあった。

パイレーツ「慌てないで」

アップル「パイレーツ、何か手があるの？」

パイレーツ「あるわ。いい機会よ。私の戦い見ていなさい」

そういうとパイレーツの手に漆黒の鍵が握られていた。そして鍵を携帯電話に差し込んだ。

パイレーツ「プリキュアチェンジ！」

電子音「キュ〜アリベリオン」

なんとパイレーツは漆黒の衣装を纏い、鍵爪を装備した眼帯を掛けたプリキュア、キュアリベリオンに変身した

プリベリオン「貴方達、本当の暴力を教えてやるわ」

その頃、リベリオンが交戦している公園の近くでは勇奈が近くに来ていた。

勇奈「ここへ来てみたんだが、近くに闇の意思が感じるようね」

思案をしている所を、丁度プリキュアの皆が通り過ぎた。

勇奈「あれは、この世界のプリキュアか。何故急いでいるんだ？」

勇奈とこの世界プリキュアの出会いは何を意味するのか？

公園の戦い前編（後書き）

次回、リベリオンの力、大暴れ！

公園の戦い後編（前書き）

リベリオン無双な戦い。そして最後の告白を見て絶句するプリキュア達

公園の戦い後編

アップルとチェリーが加わった事により戦況が有利になったパイレーツ。しかし、大量のキングゴンが立ち塞がる。だがパイレーツは漆黒のプリキュア、キュアリベリオンに変身して対抗しようとしていた。

プリベリオン「見せてあげるわ。最強の闇に呼ばれしプリキュア、リベリオンの力を」

そういうとリベリオンの手には希望狩り（ウィツシュ・ハント）と言う大鎌が握られていた。

プリベリオン「行くわよ！」

リベリオンはウィツシュ・ハントを手にキングゴンを蹴散らした。しかし、キングゴンは跳躍して襲うが

プリベリオン「無駄よ！」

するとリベリオンはウィツシュハントをブーメラン見たく投擲し、キングゴンの群れを切り刻んだ。ウィツシュ・ハントを手放したのを見てキングゴン達は襲うが

プリベリオン「甘いわ！」

逆に左腕の鉤爪で返り討ちにした。今度は銃撃部隊のキングゴン部隊がリベリオンに向かって発砲するが

リベリオン「遠距離が使えないと思ったのかしら？」

すると地面から闇の腕が飛び出し、銃を持ったキングゴン達を吹き飛ばした。倒されたキングゴンを見てリベリオンは余裕を持っていた。

リベリオン「どうしたの？この程度かしら？」

リベリオンの挑発を聞いて怒り出したキングゴン達はリベリオンを襲うが

リベリオン「血が上った様ね。でも、その時点で貴方達の負けよ。リベリオン・ハウンドジエノサイダー！」

するとリベリオンの周りには複数の凶犬が現れ、見えない速さでキングゴン達を次々と切り刻み、凶犬によって噛み砕かれた。そして、リベリオンの手にウィッシュハントが戻ってきた。リベリオンの戦いを見て驚くアップルとチェリー。

アップル「すごい・・・」

チェリー「ここまでやるなんて・・・」

するとリベリオンがアップル達に声を掛ける

リベリオン「次は貴方達の出番よ。見せてやりなさい」

アップル「解ったよパイレーツ」

チェリー「私達の力、見せてあげるわ」

すると、アップルとチェリーの手首にはスプラッシュリングに似た腕輪を装備した。それを装備したアップルとチェリーはキングゴン

の群れに突っ込んだ。

アップル「行くわよ！」

まず、アップルは空を飛び、上空からエネルギー弾を連射し、キングゴン達を絨毯爆撃見たく蹴散らした。

チェリー「もうアップルったら」

そういうとチェリーは高速移動しながらキングゴンの群れを素早い格闘で蹴散らし上空へ吹き飛ばした。さらにチェリーは

チェリー「風よ！」

チェリーの手から強風が吹きすさび、空の彼方へ吹き飛ばした。アップルとチェリーの戦いぶりを見たリベリオンは驚く。

リベリオン「あの攻撃、ブライトやウィンディが使っていた技のようね」

リベリオンが見入れている中、キングゴン達はアップルとチェリーの方へ一斉に飛びかかるが

アップル「そうは行かないから！」

すると、アップル達の周りにバリアが張り、キングゴン達を吹き飛ばした。

リベリオン「貴方達、まさかブライトとウィンディの力を使えるなんて驚いたわ」

チェリー「そうですか」

安心するリベリオン達だが、キングゴン達はしつこく立ち上がって近寄ろうとしていた。それを見たリベリオンは

リベリオン「しつこいわね。貴方達に目に物を見せてやるわ」

するとリベリオンは右目にかけた眼帯を外した。その右目は真紅に染まっていた。リベリオンはその目をキングゴンの群れに向けて一言言った。

リベリオン「失せて」

その目を見たキングゴンの群れは恐怖に震え次々と逃げていった。

アップル「うわゝ。目を見ただけで逃げるなんて」

チェリー「何を見て逃げたんだろう」

リベリオン「油断しないで。まだいるわ」

しかし、一体だけは逃げていなかった。どうやらボスのようだ

ボスキングゴン「手前、俺の子分を怯えさせて逃げさせるとはやるようだな姉ちゃん」

キングゴンのボスを見てリベリオンは返答する

リベリオン「貴方がボス猿ね。催眠を見て逃げないとは大した奴ね」

ボスキングゴン「おうよ。ボスが舐めたら猿が廃るだろ」

リベリオン「そうね。ならかかって来なさい！」

するとボスキングゴンは跳躍して強襲するがリベリオンは難なく避ける

ボスキングゴン「やるな姉ちゃん」

リベリオン「貴方もね。当たれば痛いようね。今度は私の番よ」

するとリベリオンは鍵爪でボスキングゴンの表皮を切り刻むがダメージを与えなかった。

リベリオン「硬いね貴方」

ボスキングゴン「はっはっは！俺の体は生半可な奴ではダメージを与えられないからな」

リベリオン「そうか、ならアップル、チェリー。手を貸しなさい」

リベリオンの号令を聞いてアップルとチェリーはボスキングゴンに攻撃を仕掛ける。アップルとチェリーの手首にはスパークルプレスに似た物を装備し、アップルはブラックを連想させる激しいラッシュを見せ、チェリーはホワイトを連想する激しい連続蹴りを仕掛けるが、ボスキングゴンは

ボスキングゴン「効かぬわ！」

ボスキングゴンの気合で吹き飛ばされるリベリオン達。

アップル「どうしてなの」

チェリー「これだけ喰らって何で倒れないの」

アップルの疑問にボスキングゴンは答える

ボスキングゴン「はっはっは。鍛えられた俺の肉体にはそんな攻撃は効かんのだ」

ボスキングゴンの高笑いが響く中、リベリオンはボスキングゴンに一言言った

リベリオン「大した肉体ね。けど・・・」

ボスキングゴン「けど・・・」

リベリオン「鍛えられない所はどうかしら、たとえば」

ボスキングゴン「例えば？」

リベリオン「首や血管の所に傷ついたら何が起こるかな」

ボスキングゴン「ほう」。俺の首を傷ついたぐらいで買ったと思っているのか。どうやって勝つか言ってみろ」

ボスキングゴンはリベリオンは余裕を持って返答した。

リベリオン「それが貴方の最後の言葉よ」

ボスキングゴン「どういう意味だ？」

するとボスキングゴンの首から大量の血が流れてきた

ボスキングゴン「何っ！？何で大量の血が流れるんだ？」

リベリオン「貴方の頸動脈斬らせてやったわ。そこをきいたら大量の血がでるのよ」

ボスキングゴン「くそ！こんな手使っなんて」

慌てるボスキングゴンを見たアップル達はリベリオンに話しかける。

アップル「じゃあ、アタシ達の攻撃は無駄じゃなかったんだ」

リベリオン「そうよ。奴はテンションが高すぎて血圧が高くなっ

ていることに気づかなかった」

チェリー「そうか、血圧が高いと高血圧になっているんな病気が起こるんだね」

プリベリオン「そう、奴は運が悪ければ脳卒中にやられるところだったね」

リベリオンの会話を聞いて怒り出すボスキングゴン

ボスキングゴン「手前、はめやがったな」

プリベリオン「騙される貴方が悪いのよ。そろそろ決めてもらっわ。二人共いいかしら？」

リベリオンの言葉を聞いたアップル達は返答する。

アップル「いつでもいいよ」

チェリー「決めてやりましょう」

プリベリオン「そう、なら決めるわ」

するとリベリオンはウィッシュハントの刃にエネルギーが集まり、赤黒い光を放っていた。アップルとチェリーはマックスブレスを装備し手を繋いで離れている手から桃色と赤の雷が召喚した

アップル「アップルサンダー！」

チェリー「チェリーサンダー！」

アップルとチェリーの手に雷が集まり、一つのエネルギーになるうとしていた。そして、そのエネルギーを放とうとしていた

プリベリオン「プリキュア・リベリオン・ヘル・ファイア！」

アップル・チェリー「プリキュア・マーブルスクリー・フレッ

シュ！」

リベリオンはウィツシュハントの刃から赤黒い業火が放ち、アップルとチェリーはピンクと赤の螺旋の雷が放っていった。そして動けないボスキングゴンは二つのエネルギーに飲み込まれた。

ボスキングゴン「何じゃこりゃあああああああ！」

断末魔と共にボスキングゴンは消滅した。消滅を見届けたヌールは興味が失せたの如く、その場を去ろうとしていた。

ヌール「あゝあ、今回は出番なかったね。でも諦めないから。美琴、君は最強のプリキュアになれる。だから、僕と契約」

ヌールの言葉をリベリオンから戻ったパイレーツが遮る

パイレーツ「そんなことはさせない。私がいる限り好きにはさせないから」

ヌール「やれやれ、じゃあ今日は大人しく去るとするよ。でも諦めないから、じゃあね」

そしてヌールは立ち去った。ここに残ったのはパイレーツとアップルとチェリーと美琴と名乗る少女だけだった。敵が居なくなつたのを見て変身を解除した。

美琴「湊ちゃん大丈夫？」

湊「大丈夫よ。もう心配しないで」

美琴「うん、ところでこの二人は誰なの？」

美琴と言う少女の質問に答える二人は返答する

アイ「アタシは桃園アイ」

マコト「私は桃園マコトよ。よろしくね」

美琴「私は生月美琴よ。二人共私を助けてくれて」

二人の素性を聞いた湊だが、今度はアイとマコトに質問を言う

湊「桃園？まさか、貴方の母は」

湊が驚こうとしている所を丁度なぎさ達が到着した。どうやら戦闘が終った所だった。

なぎさ「あれ？もう終わっちゃったの？」

咲「拍子抜けナリか？」

のぞみ「もう終わっちゃったの？」

ラブ「一体何が起こったんだろうつて？」

するとラブは見たことがない二人を見て、話しかけた。

ラブ「見たことがないね。誰かな？」

ラブを見たアイとマコトはそのラブを見て、喜ぶ二人。

アイ「あっママだ！」

マコト「ようやっと会えた」

二人の返答に戸惑うラブ

ラブ「えっ、ママってどう言う意味なの？」

せつな「一体どうしたのラブ？」

戸惑うラブとせつなを見てつばみと響が話しかけた。

つばみ「ママってどういう意味なんですか？」

響「まさか、隠し子？」

戸惑う二人を見て、アイとマコトは意外な返答を言う

アイ「違うよ。アタシ達はラブの娘なの」

マコト「ちなみに私はせつなの娘なの」

二人の告白を聞いてラブとせつなは驚いた

ラブ・せつな「えっ、私達の娘？」

歴代プリキュア一同「ラブとせつなに娘？」

なぎさ「ありえな～～～～い！」

意外な告白を聞いて驚くプリキュア一行であった

湊「なるほど、こういうわけか・・・」

公園の戦い後編（後書き）

次回、なぎさ達は湊の家に来ます。そして、**勇奈登場**です。

自己紹介（前書き）

湊となぎさが自己紹介します

自己紹介

ラブとせつなの娘と名乗る少女、桃園アイと桃園マコトの告白によって絶句してしまったなぎさ達。呆けているなぎさ達を見て美琴は声を掛ける。

美琴「皆さん、大丈夫ですか？」

美琴の言葉を聞いたなぎさ達は我に返った。

なぎさ「だ・・・大丈夫よ」

咲「何ともないから・・・」

美琴「そうですか。ところで貴方達は一体何者なんですか？」

美琴の質問を聞いて、動揺するなぎさ

なぎさ「あたし達は・・・えっと・・・」

動揺するなぎさを見てアイは彼女の正体を話した

アイ「なぎささんは伝説の戦士プリキュアの一人、キュアブラックだよ」

なぎさ「ちよっ、何喋っているの。正体の事は秘密にしているのに・・・」

美琴「この人たちが伝説の戦士、プリキュアなんですか？」

動揺しまくっているなぎさだが、その光景を見て湊は美琴に言う。

湊「そうよ。なぎささんは伝説の戦士、プリキュアの一人よ。それ

だけではないわ、ここにいる人たちは全員プリキュアよ」

なぎさ「ちよつとあんた。なんであたし達の事を知っているの？」

なぎさの質問を聞いて湊は意外な返答を言う。

湊「知っているも何も、貴方達、一度私に会っているでしょ」

なぎさ「へっ、どういう意味？」

意外な返答に戸惑うなぎさ。それを見たマコトは湊にある事を言う

マコト「戸惑うのも仕方ないよ。だって湊さんもプリキュア何だから」

なぎさ「えっ、あんたがプリキュア？何の事なの？」

湊「そうね、解らないなら証拠を見せるわ。プリキュアチェンジ！」

電子音「キュ〜アパイレーツ」

証拠を見せるため湊はキュアパイレーツに変身した。その姿を見たほとんどのプリキュアは驚愕する

ラブ「あ——！あんた、商店街で会ったプリキュア！」

響「何でここにいるの!？」

のぞみ「うそっ、まさか貴方がパイレーツだったの？」

咲「海岸に会ったのがあんたとは、お、驚いたナリ・・・」

つばみ「貴方がゆりさんを助けた人何ですか？」

動揺するなぎさ達を見てパイレーツは返答する

パイレーツ「その通りよ。貴方達が苦戦している時、助けに来たでしょ」

ゆり「そういえばそうね」

エレン「じゃあ、ハミイをフォーゼ擬きから解放したのも……」
くるみ「ライオンに襲われそうになったのぞみを助けたのも……」
いつき「ゆりさんを助けたのもまさか……」

パイレーツ「そう、私よ」

パイレーツの告白にプリキュア達はまたもや絶句する

歴代プリキュア一堂「な、なんじゃそりやあああああ！」

パイレーツの告白を聞いて動揺したプリキュア達だったが時間がたつと流石に落ち着いた。

ひかり「貴方がキュアパイレーツだったなんて知りませんでした」
湊「悪いわね。貴方達が私を信じてくれなかったせいでこんな事態を起こすなんて。まあ、自己紹介をしなかった私にも非があったわ」
ひかり「そうですか。所で貴方は一体？」

ひかりの質問を聞いて湊は自己紹介した

湊「私か。私は海東湊よ。そういう貴方は」

湊の質問を聞いてひかりは答える

ひかり「私は九条ひかりです」

湊「九条ひかり。貴方はシャイニールミナスね」

ひかり「ええそうです。知っていますね」

湊「貴方達のことは新聞で見た事があるわ。フュージョン、ボトム、ブラックホールと激闘を繰り広げたプリキュアオールスターズの一

人ね」

ひかり「はい、そうです」

ひかりの返答を聞いた湊はなぎさ達に声を掛ける

湊「貴方達、自己紹介してくれないかしら？」

なぎさ「自己紹介ですか？」

湊「ええ、言ってみて」

なぎさ「解ったわ」

湊の言葉を聞いてなぎさ達は自己紹介する

なぎさ「あたしは美墨なぎさ。キュアブラックよ」

ほのか「雪城ほのか。キュアホワイトよ」

咲「日向咲、キュアブルームとキュアブライトだよ」

舞「美翔舞、キュアイーグレットとキュアウィンディよ」

のぞみ「夢原のぞみ、キュアドリームだよ」

りん「夏木りん、キュアルージュよ」

うらら「春日野うららです。プリキュアの時の名はキュアレモネードです」

こまち「秋元こまち、キュアミントよ」

かれん「水無月かれん、キュアアクアよ。言っておくけど私は中学生よ」

湊「解ってるわ。貴方は私と同じ歳でしょ」

かれん「そうよ。って貴方、私と同じ歳だったの？」

湊「そうよ」

くるみ「ちよっと、自己紹介の途中でしょ。私は美々野くるみ、ミルキイローズ。ついでに本来の姿も見せるわ」

するとくるみの周りに煙が出た。そして煙が消えた頃には白いロッ

プイヤーの妖精がいた

ミルク「これが本来の姿ミル」

湊「成程、本来の姿は妖精か。それにしては貴方、強そうね」

ミルク「そうミルか？それにしても驚かないミルね」

湊「大した事ないから、それより続けて」

ラブ「アタシは桃園ラブ。キュアピーチよ。でもってそのアイの母親ですって照れるわね」

美希「私は蒼乃美希、キュアベリーよ」

祈里「私は山吹祈里、キュアパインでみんなからはブッキーと呼ばれるの。よろしくね」

せつな「東せつな、キュアパッション。私はラブ達とは違う世界の住人だけど、今はラブの所に世話しているの。まあ私がマコトの母だなんて、照れるわ」

つぼみ「私は花咲つぼみ。キュアブロッサムです。おばあちゃんは昔、プリキュアだったんです」

湊「もしかして、貴方の祖母はキュアフラワーなの」

つぼみ「そうなんです。知ってますね」

湊「ええ」

えりか「アタシが来海えりか、キュアマリンだよ」

いつき「僕は明堂院いつき、キュアサンシャインです」

ゆり「私は月影ゆり。キュアムーンライト。プリキュアの中では最古参かな」

響「私は北条響、キュアメロディ」

奏「私は南野奏、キュアリズムです」

エレン「私は黒川エレン、キュアビート。本来は妖精なんだけどもは訳あって人間体になっているの」

湊「それで全員ね。皆よろしくね」

なぎさ「こちらこそ」

自己紹介を終らせた後、美琴はある提案

美琴「あの、湊ちゃん？」

湊「何かしら？」

美琴「ちよつと、湊ちゃんの家に来てもいいかな」

湊「いいわ」

なぎさ「えっ？湊、家あるの？」

湊「あるわ。丁度いいわ。皆、私の家へ来てくれない。そこでゆっくり話でもしましょ」

なぎさ「わかったよ」

かくしてなぎさ達は湊の家へ向かう事になった。もう一人のプリキュアの出会いがある事を知らず・・・

その湊の家の近くには藍色のバイクが止まっており、そのバイクに乗っていた藍色のライダースーツの美女が湊の家に来て来た。勇奈は玄関の呼び鈴を鳴らすと若い女性が玄関を開けて現れた。

????「どちら様ですか？」

勇奈「悪いけど、ちよつと調べ物してもいいかな」

????「いいけど、湊の家に何か用があるの」

勇奈「ええ、この世界のプリキュアの事を調べたいけどいいかしら？」

????「いいわ。思う存分調べてもいいわ。この家、広いから」

勇奈「ありがとう」

そして、勇奈は家を調べ始めた。勇奈はこの世界のプリキュアに出会うことになるとはまだ思っていなかった。

自己紹介（後書き）

次回、なぎさ達は湊の家へやってきます。それと同時に勇奈と出会います。

勇奈と湊、出会うの縁（前書き）

湊と勇奈、ついに会います。

勇奈と湊、出会つの縁

美琴の提案で湊の家へ招待する事になったなぎさ達。その途上では

舞「そう言えば湊さんはどこに住んでいるのですか？」

湊「星海市よ」

美希「星海市？それって今日私達が観光する街じゃない。で、どの辺なの？」

湊「星海の街が見える丘の上よ」

えりか「じゃあ、星海の街の夜景が見えるところに住んでいるの？」

湊「そうよ」

こまち「この口ぶり、まさか・・・かれんの家と同じかしら？」

こまちが不安を抱く中、しばらく歩くと

湊「着いたわ。ここが私の家よ」

するとそこは丘の上に立つ豪邸だった。

奏「大きいね」

かれん「まるで私の家みたいね」

一同は湊の家を見て驚いていた。

湊「驚くのも無理ないわ。私の家はかれん程ではないが大金持ちよ」
ゆり「こんな家に住んでいるなんて・・・」

ほのか「これだけの広い家、湊さん一人で住んでいるのですか？」

湊「いいえ、お母さんと使用人がいるの。後、滅多に帰ってこないけどお父さんもいるの」

かれん「両親ね・・・何か気になるわね」

湊「さて、皆、今から家に入るから着いて来なさい」

湊の家に入るなぎさ達だったが、ゆりだけは駐車場にあるバイクを見て気づいた。

ゆり「このバイク、一体何かしら？」

疑問を抱きながら家に入るゆりであった

湊の家に入ったなぎさ達は驚いていた。なぎさやつぼみ、のぞみは家の広さに驚き、こまちやほのかは家の中に興味を抱いていた。他の皆もそれぞれ様々な反応を抱いていた。そして大広間へやってきたとき、アイとマコトはある事に気づく。

アイ「あれっ、だれがいるよ」

ラブ「えっ、人がいるの？」

マコト「何か私達以外に誰かが来ているよ」

湊「私以外に人？誰がいるんだ？」

せつな「私達以外に誰かいるのかしら」

せつなが思案しているところに不意に人の声がした

???「貴女達がこの世界のプリキュアね」

なぎさ「！」

見知らぬ声に驚くなぎさ達。そしてなぎさとほのかは人の声がした方へ振り向いた。するとそこには藍色のライダースーツの美女がいた。

なぎさ「だ、誰よあんた――！」
ほのか「貴女は一体？」

なぎさは驚き、ほのかは冷静に声の主に話しかけた。それを見てアイは

アイ「あつ、勇奈さんだ」

マコト「こんな所に出会うなんて」

アイとマコトの反応を見て美希と祈里は二人に話しかけた

美希「この人、知り合いなの？」

アイ「うん、この人のおかげでママに会えたの」

祈里「じゃあ、貴女、ラブちゃんの事知っているの？」

祈里の質問に勇奈が答える

勇奈「ええ、勿論よ。それより貴女達・・・」

勇奈が話をしている所を湊が割り込む

湊「ちよつと貴女」

勇奈「何かしら？」

湊「皆動揺しているわ。少し時間たってから話さない」

時間がたち、落ち着いたなぎさ達。そして湊は勇奈に自己紹介する
ように言う

湊「見かけない人ね。貴女誰かしら？」

勇奈「驚いてすまないわ。私は星川勇奈よ」

湊「星川勇奈？貴女、唯の女性じゃないわね」

勇奈「流星はプリキュア。その通りよ」

湊「私がプリキュアである事を知っている？まさか、貴女もプリキュアなの？」

勇奈「その通りよ。私は流星のプリキュア、キュアコズミックよ」

湊「コズミック？変ね、私の世界には既にはいないはずだが・・・」

勇奈「いないのも仕方ないわ。私は別の世界のプリキュアなのよ」

勇奈の話を聞いてに響が質問する

響「別の世界？どういう意味なの？」

勇奈「貴女達はパラレルワールドを知っているのかしら」

奏「パラレルワールド？」

勇奈「そう、貴女達が住んでいる世界以外に、別の世界があるの。

勿論、その世界にも貴女達はいるわ」

エレン「つまり、別の世界にも別の私がいるって事なの？」

勇奈「そうよ。最も別の世界では、誰かがいなかったり、プリキュアではない世界があるの」

響「へえ〜。いろんな世界があるんだ。たとえばどんな世界があるの」

勇奈「そうね。私が知っているのは、雷の仮面ライダー、仮面ライダーヤイバこと武藤蒼牙が住んでいる『ヤイバの世界』、かつては世界の支配者、コンカロードの脅威にさらされ、今はルーイン帝国の脅威から世界を守るために戦っている二人のプリキュアがいる『皇リイナの世界』、光の巨人の力を受け継いだ仮面ライダー、上原大人がいる『上原大人の世界』、12の宝石の力を持ったプリキュアがいる『ジュエルマスターの世界』などがあるわ」

奏「そういう世界があるなんて驚いたわ。ところでこの世界にも私

達がいるのかしら？」

勇奈「いるわ」

エレン「そうなの、所で勇奈はどの世界の人間なの？」

勇奈「私はプリキュアハウスがあるプリキュアワールド、別名『キラーの世界』の人間よ」

響「プリキュアハウス？」

勇奈「そう、プリキュアハウスは世界の破壊者ダークエンジェルス
の脅威から人々を守るべく戦っているプリキュア達の拠点よ。正式
名称はガイアセイバーズプリキュアワールド支部の事よ」

奏「この世界にも別の私達がいるのかしら？」

勇奈「いるわ、そっちの世界には私を含む六人のプリキュアや闇の
力を持ちながら私達と一緒に戦っている六人のプリキュアもいるの」
エレン「なるほど、そっちには私達が知らないプリキュアもいるん
だ」

勇奈の話を聞いてみて湊は質問を言う

湊「勇奈と言ったわね。貴女、いろんな事知っているようね」

勇奈「ええ、そうよ。私はいろんな世界へ旅をしているおかげで他
の世界の英雄の事を知っているの、無論、仮面ライダーやスーパー
戦隊といった英雄達は私の知り合いよ」

湊「道理に、他の世界のプリキュアの事を知っているようね」

勇奈「そうよ。それにしてもまさか未来から来たプリキュアに出会
うとは驚いたわ」

湊「未来？どういう意味なの？」

勇奈「ラブや湊がであったアイとマコトはおそらく、数年後のラブ
とせつなが結婚し、貴女達が生まれた世界。おそらく、ミッドスタ
ーと言う所から来た人物のようね」

勇奈の返答に驚くアイとマコト

アイ「そうだったんだ」

マコト「じゃあ、私達は何らかの理由で過去の世界へきてしまったって事なの？」

湊「多分そうよ。おそらく、別の世界に現れた世界の破壊者の影響で次元に影響があったせいよ。そちらではプリズムフラワーの事件の影響による余波で貴女達は次元に巻き込まれて、この世界へ来たのよ」

アイ「じゃあ、アタシ達は過去のママに出会った事になるの？」

湊「そうよ。それより貴女達は過去のママに出会えたけど、これからどうするの？」

湊の質問に二人は答える

アイ「そうね、折角会えたし、暫くはここにしようと思うの」

マコト「そうだね、帰る当てが見つかるまではこの世界にしようと思うの」

湊「と言うわけだが二人はどうする？」

湊の質問に対しラブとせつなは

ラブ「じゃあ、あたしの家に来ない」

せつな「そうね、帰る当てが見つかるまではここにしようか」

アイ「えっ、いいの」

マコト「嬉しいよ。ママと一緒に暮らせるなんて」

ラブとせつなの返答を聞いて喜ぶアイとマコト。二人はしばらくここへ暮らす事にしたようだ

返答を聞いた湊は勇奈に対し質問を言った

湊「さて、勇奈と言ったわね。貴女はどうして私の家に來たの？」

勇奈「そうね、私はこの世界の情報を調べる為にここへ來たの。そして、その際、別の世界のプリキュアに変身する戦士の事が氣になつてこの家に來たの。そして、まさか本人に出会つとは驚いたわ」

湊「成程、道理に私の事を知っているわけね」

勇奈「そうよ。それより貴女はなぜ、別の世界のプリキュアの力が使えるのか氣になったの。まるで『ヤイバの世界』にいたキュアデイリーみたいね。どうやってやっているの？」

湊「そうね」

すると、湊はたくさんある鍵の様な物を皆に見せた。

なぎさ「これは一体？」

ほのか「何かプリキュアに似た形ね」

湊「これはプリキュアキーと言う物よ」

ひかり「プリキュアキー？」

果たしてプリキュアキーとは一体何か？

勇奈と湊、出会うの縁（後書き）

次回、プリキュアキーと400年前の悪夢の正体が判明する。

プリキュアキーと400年前の悪夢（前書き）

プリキュアキーと今回の敵の説明会です

プリキュアキーと400年前の悪夢

なぎさ達の前にプリキュアキーを見せた後、湊はプリキュアキーの説明に入る。

なぎさ「プリキュアキー？一体何なの？」

湊「これはプリキュア達の力と記憶を宿した鍵よ。これによって私はあらゆるプリキュアの力が使えるのよ」

ほのか「そうだったの。まるで他の戦隊に変身する宇宙海賊の戦隊みたいね」

湊「そう、これはプリキュアが何らかの戦いで戦えなくなるなったり、プリキュアの力が悪用される事と想定して創られた鍵なの」

ひかり「つまり、もし私達がプリキュアの力を失うと想定して創ったんですか？」

湊「そうよ」

湊の話を聞いて咲と舞はある質問を言う。

咲「所で一つ聞くけどいい？」

湊「何かしら？」

咲「どんな理由で戦えなくなるの？」

湊「そうね。例えば貴女達が悪の組織の名を冠するプリキュアに敗れ、悪の手先に洗脳され、人々を苦しめる存在になってしまったり、ある世界では、邪悪なる者の陰謀によって仲間割れを起こし、同士討ちにされ、全滅されたり、世界の支配者とその配下である強大なる10人の闇によって命を落としたりする事態の事よ」

舞「そうなの。でも私達が敵に洗脳されたり、同士討ちにされたり、強大な敵に敗れ去って全滅する事態なんて起こるのかしら？」

舞の疑問に今度は勇奈が答える

勇奈「そうね。この世界ではそんな事態は起きないわ。けど、別の世界では起きているの」

舞「そうなんですか？」

りん「えっ、じゃあ、別の世界の私達は実際にそういう事態に遭っているの？」

勇奈「そうよ。実際、別の世界のプリキュアはルミナスを除いて敗北し、悪の手先になってしまっているの。他にも別の世界のものぞみはプリキュアを滅ぼす破壊者になってしまっているの」

くるみ「のぞみが破壊者？そんな訳ないでしょ！」

かれん「そうね。確かにのぞみはそんな事しないわ。でも、別の世界ではそうなっているの？」

勇奈「そう、別の世界では本当に起きているの。その別の世界ののぞみは精神的に弱く、醜い争いや仲間の裏切りによってココロが壊れてしまうの。そして邪悪なる四人の闇の戦士、地獄を統べる邪悪なる天使のプリキュア、絶望の名を持つ闇のプリキュア、魔の手の名を持つ闇のプリキュア、束縛の名を持つ闇のプリキュアによって洗脳され、プリキュアを滅ぼす絶望と破壊の戦士になってしまい、その世界のプリキュアに災いをもたらす存在になってしまうの。そして、その事態を招いたのは別の世界のこまち、つぼみ、そしていつきのせいなの」

うらら「待って下さい。こまちさんが最悪の事態を招いた張本人になるなんて信じられません」

こまち「そうよ。どうして私がのぞみさんのココロを壊すような事をするの。私はあんな事しないわ！」

勇奈「その通りよ。でも、こまちだけではなく、りんやうらのせいで別の世界のものぞみは全てを失ってしまうの」

かれん「信じたくないわ。のぞみが邪悪なる者になるなんて」

勇奈「そう、この世界の貴女達はそんな事しないわ。でも、別の世

界ではそんな事をしているの」

りん「つまり、別の世界の私達は実際にやってしまっているのですか？」

のぞみ「別の世界の私が闇の戦士に堕ちる・・・そんな訳ないよね」

勇奈「残念だがそうよ」

勇奈の返答に対し、今度はラブが質問する。

ラブ「何か気になったけど、つぼみといつきが最悪の事態を招いた原因ってどういう意味なの？」

勇奈「それは、別の世界のつぼみといつきは世界を滅ぼし、世界の支配者になろうと目論んでいるからよ」

美希「つぼみといつきがそんな邪な事を企む？冗談でしょ？」

祈里「そうだよ。つぼみちゃんといつきちゃんがあんな非道な事する訳ないよね？」

せつな「でも、実際にはやっているんでしょ」

勇奈「その通りよ。実際、卑劣な手を使ってプリキュア達を苦しめたり、変身アイテムを壊そうとしたり、力で脅して罪のない人々を苦しめているのを喜んでいるの。まさにプリキュアの名を汚す屑その物よ。そして、その報いで力を失い、死よりつらい生き地獄を味わってしまうの」

せつな「最悪ね。どうにかならないのかしら？」

勇奈「それについては大丈夫よ。天上人となるプリキュア達がいるから今の所は心配ないわ」

アイ「そっか。別の世界ではこんな事が起きていたんだ」

勇奈「後、言い忘れたけど、別の世界のアイとマコトはその最悪の世界にいるわ。全ては最悪の戦いを止める為に」

マコト「これって、別の世界の私達の事じゃないのかな」

勇奈「そうよ」

勇奈の話を聞いてショックを受けるつぼみといつき

つぼみ「別の世界の私がそんな事するなんて・・・」

いつき「別の世界の僕が、デューンやブラックホールと同じことをやっているなんて・・・別の世界とはいえ、信じたくない」

えりか「二人共考えすぎよ。だってつぼみといつきが悪い事をするようなタイプじゃないの解っているから」

ゆり「気にしすぎよ二人共」

つぼみ「解っていますか・・・」

いつき「別の世界とはいえ、あんな事をされたらショックを受けますよ」

つぼみが不安を抱いているのを見て湊が声を掛ける

湊「大丈夫よ。きっと過ちに気づいて反省するから心配しないで。

その時は止める人間がいるから」

つぼみ「すいません」

湊の言葉を聞いて不安を取り除いたつぼみ達。そして響は質問を言う

響「随分脱線しちゃったけど、そのプリキュアキーはどこで手に入れたの？」

湊「これは私のお父さんがある場所で見つけたの」

奏「その場所は？」

湊「モン・サン＝ミシエルの近くに見つけたの。このキュアモバイルと一緒に」

エレン「キュアモバイル？」

湊「携帯電話型の変身アイテムよ。プリキュアキーを差し込む事で変身するの」

実際にキュアモバイラーをなぎさ達に見せた

エレン「成程、原理は海賊が使っているあれと同じね」

湊「そうよ。そして、こういうのもある」

すると湊はキュアメロディ、キュアリズム、キュアビートのプリキ
ュアキーを見せた。

響「このプリキュアキー、キュアメロディに似ている」

湊「そう。当然、貴女達のプリキュアキーもあるわ」

湊の話を聞いているゆりはある事に気づく

ゆり「まさかと思うけど、モン・サン＝ミシエルって確か400年
前、サラマンダー男爵が封印した場所じゃないのかしら？」

湊「そうよ」

いつき「400年前といえばキュアアンジェが活躍した時代ですよ
ね」

湊「知ってるわね」

ゆり「ええ、実際にサラマンダー男爵に会ったことがあるしキュア
アンジェのことも聞いたわ」

湊「そう、実はキュアアンジェ以外にもう一人プリキュアがいたの
えりか「だれなの？」

湊「その人の名はキュアミネルバ。キュアアンジェと一緒に戦った
最古のプリキュアでプリキュアキーとキュアモバイラーを創った人
なの」

つぼみ「その人がプリキュアキーを創ったんですね」

湊「そうよ。その頃は沢山のプリキュアがいたの。そして、貴女達
の前のプリキュアもいたわ」

なぎさ「つまり、あたし達の前のプリキュアがいたって事なの？」

湊「その通り。そして貴女達は初代プリキュアから力を受け継いだ戦士なの」

ほのか「そうだったんですか。じゃあ私達がプリキュアに選ばれたのはそういう理由があったんですね」

湊「まあ、そうなるわ」

ほのか「でも、何で湊さんは別の世界のプリキュアの力が受け継いだのですか？」

湊「それは、400年前、別の世界にいるプリキュア達もこの世界にいたの、あの時が来るまでは・・・」

ひかり「あの時って？」

湊「400年前、あるプリキュアを倒すため、自らの命と引き換えに倒したからよ。その時に消滅したの。そしてキュアミネルバはそういう事態に備えてプリキュアキーとキュアモバイラーを創り出したの」

湊の会話を聞いてラブは質問を言う

ラブ「そのプリキュアって何者なの」

湊「そのプリキュアは最強のプリキュアと呼ばれた存在だったの。」

でも、ヌールの子で邪悪に染まり、最凶のプリキュアと化したの、せつな「そのプリキュアの名は何？」

湊「その名は・・・キュアエンス。終焉の戦士で虚無、野望と並ぶ邪悪なるプリキュアよ」

美希「キュアエンス・・・それが400年前の悪夢の正体なの・・・」

祈里「じゃあ、美琴ちゃんはキュアエンスになり得るの？」

湊「ええ、どうやら美琴もプリキュアの資質があるみたいなの」

ラブ「だから、湊は美琴をプリキュアにさせないように戦っているの」

湊「その通りよ」

美琴「実際、私もあの人に教えたらプリキュアの資質があるみたいだけど私怖い。もしなったら私は皆を傷つけてしまうの」

湊「そう、もし美琴をヌールによってプリキュアにされたら」

ラブ「されたら？」

湊「世界が終るわ」

湊達が話している所を丁度ある女性がやってきた。

???「あら、湊。お友達沢山連れてきたわね」

湊「お母さん、何でここに？」

咲「へっ、お母さん？」

舞「それにしても若いわね」

???「そう？」

かれん「所で貴女は？」

真理「海東真理、湊の母よ」

うらら「湊の・・・お母さんですか？」

真理「その通りよ」

美琴「叔母様すいません。またここへ来てしまつて」

真理「いいのよ。またヌールにプリキュアの勧誘をされたようね」

りん「あのゝ。ヌールって何ですか？」

湊「キュアエنزを生み出した妖精よ。形は白い小動物よ。400年前に消滅したが生き延びたみたい」

こまち「何が目的なの？」

湊「美琴をプリキュアにしたいのよ。そうすれば世界が奴の物になるからよ」

くるみ「じゃあ、何で美琴がプリキュアになると解かるの？」

湊「おそらく、美琴はキュアエنزの力を持っているからよ」

のぞみ「力を持っている？」

湊「そう、ヌールは美琴がキュアエنزの力を持っていることを知っているからよ」

美琴「そう、だから私ばかり災難に遭うんだね」

湊「おそろくな」

くるみ「でも、何で妖精がそんな・・・（グ~~~~!）」

くるみが言いかけたところに何故か腹の音がした。

くるみ「ちょっと、空気を読みなさいよ!」

のぞみ「ごめん、ちょうどお腹が空いたみたい」

くるみ「そういえばそうね」

湊「ちょうど夕方になるようね。どうせならここで食事したらどうかしら」

なぎさ「えっ、いいの?」

湊「どうせ、まだここにいるんでしょ。だったら、食事をしながら話すのも手よ」

ほのか「それもそうね。ヌールのことも知りたいし」

かくして、湊の提案で食事に誘う事になったなぎさ達。そこでヌールの事を知る事になる。

プリキュアキーと400年前の悪夢（後書き）

次は食事をしながらヌールと実琴の話です。

ヌールと美琴の謎（前書き）

ヌールと美琴の説明会です

ヌールと美琴の謎

湊の家で食事会に誘われたなぎさ達。なぎさ達は食堂へ来たが、あまりの広さに驚いていた。

なぎさ「ひ、広い・・・」

のぞみ「まるでサン・クルミール学園のカフェテラスみたい」

響「そうね・・・」

湊「どうしたの？」

咲「いやゝ。あまりにも広すぎて驚いているナリ」

つぼみ「すごいですね」

ラブ「それより、席に座ろうか」

ラブに言われたなぎさ達は席に着いた。そして、湊はある事を言う

湊「さて、ヌールの話をする前に妖精たちにも自己紹介しないと」

なぎさ「メップル、あんた、自己紹介しなさいよ」

メップル「いいメポか？人前に出ても？」

ほのか「ここにいるのは私達だけだから人前に出てもいいから」

ミップル「わかったミポ」

すると湊達の前から妖精達が現れた。そして、妖精達は自己紹介する。

メップル「光の園の選ばれし勇者、メップルだメポ。がさつななぎさのパートナーメポ」

ミップル「光の園の希望の姫君、ミップルミポ。ほのかのパートナーミポ」

なぎさ「がさつは失礼でしょー！」

ポルン「ひかりのパートナーのポルンだポポ。未来へ導く光の王子と呼ばれているポポ」

ルルン「ルルンだルル。ひかりに力を与える未来を紡ぐ光の王女ルル」

フラッピ「フラッピラピ。泉の郷の花の精で咲のパートナーラピ」

チョッピ「チョッピラピ。泉の郷の鳥の精で舞のパートナーラピ」

ムーブ「ムーブだムプ。空の泉からやってきた月の精ムプ」

フープ「フープフプ。空の泉からやって来た風の精フプ」

ココ「パルミエ王国のココだココ」

ナッツ「パルミエ王国のナッツだナツ」

シロップ「俺はシロップロプ。運び屋をやっているロプ」

くるみ「ココ様にナッツ様、シロップは私と同じように人間体になれるの」

湊「人間体になれるのか」

くるみ「そうよ。ココ様は普段は教師でナッツ様はナッツハウスの店長をやっているの。シロップは学校をやっているときはカフェテラスの手伝いをしているの」

湊「そうか」

タルト「わいがスイート王国の王子のタルトや。そっちのはシフォンはんや。いや、そんな時のリズムはんはシフォンはんの可愛らしさにメロメロやったわ」

シフォン「プリップー」

奏「タルト、恥ずかしいわよ・・・」

シプレ「つばみのパートナーのシプレですっ」

コフレ「えりかのパートナーのコフレですっ」

ポプリ「いちゆきのパートナーのポプリでしゅ」

ゆり「シプレとコフレ、ポプリはココロの大樹に住む妖精よ」

ハミィ「そしてニヤーがハミィニヤ。メイジャーランドの歌姫ニヤ。そっちに居るのはフェアリートーンニヤ」

フェアリートーン「よろしく(ドド、レレ、ミミ、ファファ、ソソ、

ララ、シシ)」

勇奈「これで全員ね」

メップル「その通りメポ」

妖精達の自己紹介が終ったところで本題に入る

なぎさ「そもそもヌールって一体何者なの？」

湊「ヌールとはプリキュアの歴史で唯一邪悪な心を持った妖精でキ
ュアエンズ誕生に関わる存在よ」

メップル「邪悪な心を持った妖精メポ！？」

ミップル「初めて聞くミポ！？」

ほのか「そのヌールは何故そんな事をするの？」

湊「それは、自分が契約したエンズ以外のプリキュアを消し去る為
よ」

ひかり「エンズ以外のプリキュアを消し去る・・・」

湊「ええ、ヌールは自分の目的の障害であるプリキュアを消し去り、
世界の支配者になろうと目論んでいるの」

湊の言葉に絶句するなぎさ達。

咲「世界の支配・・・。ダークフォールの連中より性質が悪いよ」
舞「いいえ、もっと酷いわ」

フラッピ「妖精でありながら邪悪な心を持っているラピ」

チヨッピ「ヌール、なんて恐ろしいチヨピか」

湊「そう、奴はプリキュアの力を自らのエゴの為に利用し、世界を
意のままにしようとしているの」

くるみ「なんて奴なの。ヌールは独裁者でもなるつもりなの！？」

かれん「酷いわね。プリキュアの力を悪い事に使うなんて」

ココ「自分の手を汚さずに支配を目論むなんて酷いココ」

ナッツ「その通りナツ」

シロップ「まったくロブ！」

勇奈「怒るのも無理ないわ。実際やっている奴もいるようだし」

りん「まったく、妖精でありながら悪いことを目論むなんて・・・」
のぞみ「うん、美琴ちゃんを悪い奴に変えようとするヌールなんて、許さないよ」

咲達とのぞみ達が怒りだす中、ラブは話題を変えようとしていた

ラブ「話変えようか。そういえば何で美琴がヌールに狙われているの」

美琴「それは、私がプリキュアになる夢を見ていたからです」

つばみ「プリキュアの夢ですか」

美琴「はい」

えりか「何かアタシ達がプリキュアになるきっかけを美琴が体験しているみたい」

シプレ「確かにそうですっ」

コフレ「この様子だと美琴がプリキュアの素質を持つのも無理ないですっ」

美琴「ところがそうじゃないんです」

せつな「何かあったの？」

美琴「私の夢の中にヌールが出てくるんです」

美希「あのヌールが貴女の夢に・・・」

美琴「はい、こういうんです。ヌールは僕と契約してプリキュアになってほしいといってくるんです」

祈里「何かこのやり方。悪徳セールスその物じゃない」

タルト「何か、どこそのマスコットみたいやな。契約して暫くたてば契約者を化け物に変える奴を思い出しますな」

美琴「そうなんです。私が寝る度に現れてはそういう行為を繰り返しているんです」

いつき「迷惑だね。休もうとしている所にも現れて、よく寝不足に

ならなかったんですね」

ポプリ「そうでしゅ。寝不足になったら大変なことになっているでしゅ」

美琴「はい、その時は湊ちゃんがいるおかげで助かっていますからゆり「そう、それからは」

美琴「私が出てきている間は、何らかのタイミングで怪物たちが襲うようになったんです」

アイ「じゃあ、アタシ達が湊さんと一緒に戦った怪物も」

美琴「そうです、あの怪物は私を狙っており、ちょうどいい所にヌールが出るんです」

マコト「タイミング、好すぎてない？」

美琴「はい、そしてヌールは必ず契約をするように迫るんです。怪物を倒すには私がプリキュアになるしかない」と

響「何か酷いわね。嫌がっている人にそんな事をするなんて」

奏「じゃあ、美琴さんはプリキュアになるのが怖いのか？」

美琴「はい、もしなったら私は間違いなく皆を傷つけてしまうかも知れないんです」

エレン「美琴、何かに怯えているのか？」

美琴「はい、私は世界を滅ぼす存在になるのを恐れているんです」

ハミィ「美琴、大丈夫ニヤ。その時はニャー達がいるから」

美琴「そうですか。その時はお願いします」

響「任せなさい」

響が話しているところで机にちょうど食べ物が出てきた。

なぎさ「あつ、ちょうど食べ物が出てきた……」

その量と質を見て絶句するなぎさ達

なぎさ「何て量なの……」

咲「しかも、質が良過ぎる」

のぞみ「うわゝ。美味しそう」

ラブ「ほ、本当ね・・・」

つぼみ「すごいですね湊さん・・・」

湊「そうかしら」

響「うわ、すごすぎる」

豪華な食べ物を見て絶句するなぎさであった

豪華な食事を食べたなぎさ達は湊の家に過ごした後、帰路へ向かうとしていた。

なぎさ「美味しかったね」

咲「うん、こんな料理は初めてナリ」

のぞみ「いくらでも入っちゃうよ」

響「そうねのぞみちゃん。私も思わずおかわりしちゃうくらい美味しかったから」

ラブ「そうよね」

つぼみ「こんな美味しそうな物は初めてですから」

しかし、玄関前で湊が呼び止める

湊「待ちなさい」

なぎさ「何、湊？」

湊「どうせならお土産を渡さないと」

ほのか「そうね。お土産を買い損なっただし。ありがたくもらっ
わ」

湊から土産をもらっちなぎさ達。

勇奈「気前がいいわね」

湊「まあね。それより貴女はどこへ泊まるの」

勇奈「私は星海市のホテルに泊まるから」

湊「そうか。美琴はどうするの？」

美琴「帰りたいけど、怪物に襲われるかも知れないし」

のぞみ「じゃあ、一緒に送ろうか」

美琴「いいの」

のぞみ「だって友達でしょ」

美琴「ありがとう」

なぎさ達は帰路へ向かうが

ラブ「困ったわね」

アイ「どうしたの？」

せつな「帰ったとき、お母様がどんな反応するのかしら？」

マコト「そうだね。どんな反応するか」

美希「心配なら着いて行こうかしら」

祈里「私も行くわ」

ラブ「ありがとう」

フレッシュ組はアイとマコトのことに悩まされスイート組は

ハミィ「おかしいニヤ？」

エレン「どうしたの？」

ハミィ「シリーがいないニヤ」

響「何で？」

奏「先に帰ったんじゃない？」

そのシリーはというと

シリーはある人物に会っていた。それは

???「響達がキュアパイレーツに会ったの」

シリー「その通りだシシ」

???「キュアパイレーツか。パパとママが知らないプリキュアがいるなんて」

シリー「どうする、アコ？」

アコ「決まっているよ。私もパイレーツに会うわ。っとその前に明日、響に会わないと、シリー、明日皆はどこに集まるの」

シリー「ナッツハウスだシシ」

アコ「ナッツハウスね。ありがとう。響達にも伝えてね。私も行くから」

シリー「わかったシシ」

シリーが会った人物は調辺アコ。彼女こそキュアミューズであり、メイジャーランドの女王、アフロディテとメイジャーランド国王、メフィストの間に生まれた少女である。彼女はアフロディテとメフィストを救うため仮面のプリキュアとして活躍していた。彼女の登場で物語に新たな展開が起こる

ヌールと美琴の謎（後書き）

次回、美琴の送迎に敵襲撃。その時、のぞみ達は201の敵に襲われる。

マーベラス「俺の擬きでも出るのか？」

その通りです。

送・迎・襲・撃 前編（前書き）

送迎しているところを襲撃。最早お約束？相手は201の戦士達だ。

送・迎・襲・撃 前編

美琴の安全を守るため、家まで送る事になったのぞみ達。その途中では

美琴「まさか、貴女達がプリキュアだったなんて驚いたわ。けど、どうして正体を隠しているの？」

りん「まあ、色々と事情があって正体を隠しているの」

美琴「そうだったんですか。それにしても羨ましいね」

のぞみ「羨ましい？どうしてなの？」

美琴「だって私、何の取り得がないの。そういう意味ではのぞみちゃん達が羨ましいわ」

のぞみ「そうかな？」

くるみ「まあ、仕方ないわね。りんはスポーツ万能で料理上手、しかもアクセサリーのデザインセンスにも優れているし、うらははメンバーの中では一番幼いにもかかわらず頑張り屋で歌も上手いし、女優になるための努力をしているし、こまちは博学でおっとりしているし、小説家になるための努力もしているわ。まあ、時々何を考えているのかわからない所があるけど、かれんは頭がいいし、スポーツも出来るの。そして、あたしは何でもできるの。のぞみは・・・取り得がないけど」

のぞみ「くるみ、酷いよ」

美琴「そんなはずないよ」

のぞみ「美琴ちゃん？」

美琴「だって、のぞみちゃんは今私を心配してくれたんじゃない。一人ぼっちの私を」

のぞみ「そうかな？」

かれん「知らない人でもすぐに友達になれる。それがのぞみのいい所よ。だから。デスバライアに対しては話し合いをしようしたり、

のぞみのコピーであるダークドリームの心を氷解させ、友達にさせたのぞみの才能があつてのことよ」

うらら「そうですね」

こまち「だから、私達はのぞみさんたちと一緒に戦えたのよ」

かれん「私ものぞみと出会わなかったらずっと一人ぼっちだったわ」
美琴「そうだったんですか」

そうして会話をしながらのぞみ達は美琴の家へ向かっていた。その途中の広場で

夏「どうした、ココ？」

小々田「ナッツ、周りに何かいるぞ」

シロー「周り？何がいるんだ？」

シローは周りを見渡すと、そこには201の人物がのぞみ達の周りを囲んでいた

シロー「そいつら、まさか・・・」

のぞみ「シロップ、どうしたの？」

シロー「なんで、あいつらが」

そう、のぞみの周りにはスーパー戦隊擬きがいた。

りん「ちよつ、何でゴレンジャーにジャッカー、バトルフィーバーにデンジマン、サンバルカンにゴーフライブがいるの？」

かれん「どうして、ダイナマンにバイオマン、チェンジマンにフラッシュマン、マスクマンにライブマンがいるの？」

うらら「そつちにはターボレンジャーにファイブマン、ジェットマンにジュウレンジャー、ダイレンジャーにカクレンジャーがいます」
こまち「こつちにはオーレンジャーにカーレンジャー、メガレンジ

ヤーにギンガマン、ゴーゴーフアイブにタイムレンジャーがいるわ」
のぞみ「ガオレンジャーにハリケンジャー、アバレンジャーにデカ
レンジャー、マジレンジャーにボウケンジャーもいるよ」
くるみ「ゲキレンジャーにゴーオンジャー、シンケンジャーにゴセ
イジャー、ゴーカイジャーまでいるなんて、流石にゴースターズ
はいないようね」

スーパー戦隊擬きに怯える美琴

美琴「どうして？また敵が現れるなんて・・・」

小々田「まさか、行動が読まれた？」

夏「そうかも知れない」

シロー「どうするんだ？」

のぞみ「ココ、美琴ちゃんを護つて」

小々田「解かった。美琴、安全な所へ逃げるぞ」

美琴「うん」

美琴が安全な所へ逃げると、のぞみはスーパー戦隊擬きの方を睨ん
だ。

のぞみ「平和を護った戦士達を悪いことに使うなんて許さない！皆、
行くよ！」

りん、うらら、こまち、かれん、くるみ『Yes!』

「「「「プリキュア・メタモルフォーゼ!」」」」
「スカイローズ・トランスレイト!」

のぞみ達はプリキュアに変身した。

ドリーム「今度はスーパー戦隊が敵になるなんて」
ローズ「昼間はゴカイオー擬きに襲われ、今度はスーパー戦隊が相手ね」

201もいる戦隊擬きを見て呆れるドリーム達

ミント「201体もいるようね、どうするアクア？」

アクア「ここは一体ずつ倒すべきね」

レモネード「流石に大量はきついですね」

ルージュ「でも、ブロッサムは50体の敵を相手していたんだし、何とかなるでしょ」

ドリーム「そうだね、じゃあ、いつもどおりやろうよ」

ローズ「そうね、でも、ペース配分は考えなさい」

すると、ドリーム達は機動力で攪乱し、スーパー戦隊擬きを分断した。すると6つのグループに分けた

VSレッド軍団

ドリーム「私の相手はレッド軍団ね。主人公が多いけど負けないよ」

そういうとドリームはクリスタルフルーレを携え、レッド軍団へ突っ込んだ。それに対しレッド軍団は剣でドリームを斬り付けようとするが、ドリームはフルーレで対抗した。

ドリーム「戦隊のリーダーを悪いことに使うなんて許さない！」

そういうとドリームはレッド軍団を斬り付けた。その途中で、リュ

ウレンジャー擬きとゲキレッド擬きが格闘に挑むが、格闘を得意とするドリームには通用せず返り討ちにあう。

ドリーム「私に格闘に挑むなんて無謀だよ。本物ならそうは行かないけど・・・」

その後ろでボウケンレッド擬きとアバレッド擬きがロッドで殴るが、ドリームは裏拳で返り討ちにした。すると、今度はデカレッド擬きとタイムレッド擬きが射撃で挑むが

ドリーム「飛び道具にはこれよ。プリキュア・ドリームアタック！」

するとドリームの掌からピンクの蝶の形をしたエネルギー弾を放った、そしてデカレッド擬きとタイムレッド擬きを返り討ちにした。だがその隙にドリームは長い物に巻きつかれる。

ドリーム「何でロープ？」

ロープの主はスピードエース擬きとゴーグルレッド擬きだった。ロープに縛られたドリームだが、

ドリーム「縛っても無駄だよ」

するとドリームの手は光った、そして縛ったまま走って、必殺技を放つ

ドリーム「プリキュア・シューティングスター！」

ドリームはピンクの光を纏い、突進。進路上にいるアカレッドをスピードエース擬きとゴーグルレッド擬き諸共倒した。レッド軍団を

倒したドリームの前に、リーダーであるゴークイレッド擬きが襲う。

ドリーム「貴方がリーダーね。行くよ！」

ドリームはフルーレでゴークイレッド擬きと交戦。剣と剣でぶつかり合うが、ゴークイガンの射撃によってダメージを受けて後退する。

ドリーム「銃を使うなんて、厄介ね。こっちも何か対抗しないと」

すると、ドリームはタイムレッド擬きの所にボルブラスターが落ちていた。そこでドリームはボルブラスターでゴークイレッド擬きを撃つ

ドリーム「これでも食らいなさい」

ドリームはボルブラスターを撃ち、ゴークイレッド擬きにダメージを与えた。その隙に

ドリーム「これで決めるよ。プリキュア・クリスタルクラスター！」

するとドリームのフルーレから無数の結晶を放射し、ゴークイレッド擬きにダメージを与え、ゴークイレッド擬きを倒した。それと同時にレッド軍団は元のレンジャーキーの玩具に戻った。

ドリーム「主人公だけあって苦戦したよ」

ドリームはレッド軍団を打ち破った。

送・迎・襲・撃 前編（後書き）

ルージュ「これが今年最後の更新ね」

レモネード「私達の活躍は次ですね」

ミント「でも、すぐに出るわ」

アクア「相手はスーパー戦隊でも擬きでは相手にならないわ」

ローズ「本物だったら苦戦するわ。ネタバレだけあたしの相手はこういう連中だからね。ほんと、アバレキラーといい、デカマスタ
ーといい、シンケンゴールドといい、ゴセイナイトといい、ゴカ
イシルバーってほんとある意味チートね」

次回はルージュ、レモネード、ミント、アクアの戦いパートの予定
です。

ドリーム「後、私がボルプスターを使ったのは後の伏線だよ。だ
って、私はある形態で銃使えるようになるから」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6079x/>

プリキュアオールスターズ 出現！最強のプリキュア

2011年12月31日20時50分発行